

自ら稱するものにして、猶ほ、子の因縁は親にありとのいんねん説を眞先きに掲げる天理教の取るべき態度であつたらうか。以上の如きことがらに對して、天理教當局の取れる態度は實に宗教的ならぬ態度であるのみか、非天理教的態度であると云はねばならぬのである。

こゝに至つて、余は天理教が宗教の假面に隠れ、天理教屋の本性を現はしてゐるものであると論斷することをはばからぬのである。更に考慮せねばならぬことは、大西の信仰の問題である。が、新聞をしてお筆先きの研究資料の内容が國家の基礎を危ふくするものであると報せしめてゐる。國家の基礎を危ふくするとは一體何んであるかと云ふに、

それ等の不穩の文字には、

「日本の國は天理教で治むべきもの」とか。

「高山の眞の柱は唐人や、これがだいいち神のりつづく」てふ御筆先きに於いて、高山の眞の柱を、恐れ多くも上御一人のやうに解釋してゐる等のことである。

これ等は、教理の不統一を物語る以外の何物でもない。斯る明瞭ならざる文句（明瞭でないのが本當だ、元來はパラノイアの云つたことだ、條理がある筈がない。ほんの口に出た思ひつきに過

ぎないのだ。これを理窟でコネ上げやうとするから解釋が種々出るので。）を明確に一定せず。天

啓なるが爲にその解釋は各人の頭にあるものだとするから、種々な解釋を生じて來るのである。

今ついでであるから側道にそれるやうだが、前記高山の眞の柱の御筆先きに對する、中西牛郎氏の解釋を添へることゝしよう。

「天啓の教は世界一列救濟するの教なれば日本民族が外國思想を歓迎したればとて、神は決してこれを怒り給はぬのである。世界人類が互に相接觸して互に其の思想感情を交換しこれがために世界平和の理想を實現しつゝあるは即ち眞道の宣傳に對する準備として、神の御意に合ふことである。然らば『高山の眞の柱は唐人やこれがだいいち神の立腹』とは治者階級が歐米文化に心酔して日本魂を失うたから、神が義怒を起し給ふたと解釋してはならぬ。斯く解釋すれば神は攘夷黨の首領であるといふことになる。是れ神を瀆がし奉るの甚だしきではあるまいか。神が當時の治者階級を『唐人』だと怒り給ふ所以は天啓の教へが教祖によりて顯示され神の自由用が枚擧に暇あらざる程現はれてゐるにも拘はらず。頑固驕傲なる態度にて、これを否定して神の肉現たる教祖を迫害するからである。苟しくも日本民族神ながらの道を以て立國の大本とすべき治者階級なれば、自ら進んで國民一般に先だつて天啓の教へを信奉すべき筈なるに、

これが反對に出でたのは是れ神の義怒し給ふ所以である。一派の邪義者流は此の『高山の眞の柱』を以つて恐れ多くも上御一人のやうに解釋してゐる。是れ萬世一系の天津日嗣は宇宙を攝理し人類を救済し給ふ本元眞實の神から來つて永遠無窮の寶祚に當り給ふことを知らざるからである。

この邪説は常に我が國體を破壊するのみならず。亦天啓の教へを破壊するものであるから、生前には國刑に處せられ、其の死後は牛馬に墮落すべきものである。」「神の實現としての天理教」一八〇頁）

以上中西氏の論文を見るに、實に一つの言葉に對する獨斷的見解なることを知ることが容易である。と俱にお筆先きなるものに對して種々な解釋をするによいと云ふことも知ることが出来る。これ實に天啓の文を教理とするものゝ便宜にして、いつの世でも阿世曲學的の解釋を以つてするのはこの種天啓の教理を持つものゝ通例の如き觀がある。

斯る種のものに對して、これが意味不明である方を喜ぶ傾向があることは否み得ないことである。次にその説明を聽こう。

「其他にも便利な事は假名でありますと意味を、幾重にも取ることが出來ます。譬へば『はし』

と書けば漢字の橋、端、箸など一字で三字の意味が表せますのは獨り假名の徳であります。而るに漢字で端と書けば物のハシク、だけの事しか示さず、箸と書けば物食ふ箸の事だけであるし。橋と云へば川や溝やに渡してあるものだけの意味しか表しません」(木下眞進堂發行「御かぐら歌註解」愛水先生著二頁)

と云つてゐる如く、一つの言葉に數意を含ませることを特徴かの如く思つてゐるのは事實であります。この反面には、自らどうでも解釋するによいと云ふことを認めてゐるものであると云はれても仕方があるまい。それだから、一つの解釋を他の解釋で間違つてゐるとは云はれぬ筈である。ところが實際は、決められないものを決めたり。判りきつてゐることを分らなくしたりしてゐるのは、全く未だ教理そのものゝ統一なく、綜合的でなくて單に斷片の寄せ合せであり、このことが又、偏執症のものせるものだとの反證ともなるのであつて、従つて、相矛盾するものがある。ところが、念頭に置いてをらぬやうにしか思はれぬのである。

上述の中西氏の解釋も意義甚だ判然たらざるを得ぬものがあるのは實に、氏の罪にあらずしてお筆先きの罪だと見なければならぬのである。

ついでだから、大西事件に絡む二三の事柄を述べ、大西事件の如き傾向の根源が天理教自身に

も存することを述べて見よう。

「堂々たる殿堂に豪華な生活子供は、

「姫様、若様」

大西は多数の信者から『甘露臺様』と敬稱され生神様同様の待遇を受け日常生活は豪華を極めてゐた。信徒の寄附による金品で美衣美食にふけり五人の子供に對しては周圍のものをして『お姫様若様』と呼ばせ長女愛子、次男正憲が磐城小學校へ通學中は學校まで送り迎へを爲し或は侍女をつけ、學校では侍女の爲めに特に圖書館を貸してゐた。研究所内の大西の居室は冬は暖房装置で温め、夏は紹張の衝立を通して侍女が團扇で涼風を送り「扇風機は生神様には勿體ない」と稱して絶対に使用しなかつた。研究所の建物は總坪數約千二百坪で敷地は約一町歩ある。信徒は内勤と稱するものが百五十名布教師五萬人全國の信徒四十萬人と稱し遠く滿鮮にも信者が散在してゐた。

「研究所の内部組織、

一切の經濟は信者の寄進。

内部組織は講師、應接係、事務所、詰員、農耕係、當直員等で毎日期六時夜六時半の勤行と朝八時晝一時夕七時十五分の三回に『お話し』をなし勤行には普通天理教でやる『お手振り』をなし。お話しには講師が説教をする。建築その他一切の經濟は普通天理教同様一切信者の寄進によるものであるが。云々」(昭和三年八月二十四日東京日日新聞夕刊所報)

以上の報導に接し、吾人は宗教を悪用するもの、(宗團自體に既にこの傾向あれども今は悪用のみ云ふことにする)如何に豪華生活を爲してをり、如何に信者をして巧妙に欺いてゐるか云ふことを知ることが出来るではないか。五萬人の布教師と云へば、膨大なものである。これ等の布教師の中に勿論野心家はあるであらうが、皆々野心家ばかりではなかつたであらう。なかには宗教的英雄のやうな心持ちで、または、パレステナに於ける舊約の豫言者の如き心境のものなだけではなかつたらう。さはあれど、教義そのものが、國體の基礎を危ふからしめむとするものであれば、なるほど、その主張に對して權威がつくものであり、絶対に近くなるものである。それだけ又國家より見れば、危険視せねばならぬこととなるのである。五萬人の布教師はさて置いて、四十萬の民衆は、言はゞ、被搾取層にある人々ではなかつたか。わづか、十年そこ／＼のうち、あれだけの大殿堂を作り。あれだけの生活を爲し、五萬人の布教師を手馴け、四十萬人の

民衆の長となつた大西愛次郎なるものは、確かに民心の缺點を洞察するの手腕をもつてゐたものであると言はねばなるまい。

此の點よりしても、今日の天理教はその教會の多きをもつて、その教師の多きを以つて更に信者の多きを以つて、優勝なる宗教なりと號することは潜越なるのみならず。盲蛇に等しきものであると言はねばならぬ。更に單なる杞憂として置かれぬことは、六百萬の民心の要求するものが、天理教々理にあると云ふ點である。六百萬人の民心は、余が述べ來れる如き教理を生命としてゐるとするならば、それこそ、社會的現象の缺陷の反映を見せると云ふ點に於いて、誠に現代社會の機構を更らによく研究せねばならぬとの思ひを深からしむるものがあるではないか。

マルクスは正しく如上の點に於いて現代資本家制生産組織の缺陷を指摘したものであると云ふことが出来るのである。

猶ほ、人間は宗教に熱狂すれば如何なることでもするものであると云ふことを左に紹介するにとしよ。

信者は大西が入浴すれば争ふてあかの湯を飲んだり、浴びたりしたものがあつたと云ふ。先祖代々の土地を二束三文に賣拂ひ大まじめで天理教本部に寄付するものもあつた。

近い中に天變地變があつて一面が泥海となるといふので、土地を地主に返還する小作人、田畑を二束三文に賣り拂つて百姓を止めたものも相當あつた。

濱松市坂屋町洋品店鈴木喜和藏は都市計畫の道路擴張で土地を市に賣つて得た一萬圓のうち五千圓を教會本部に奉納し、洋品類は全部賣り拂つて店を閉ぢ天理教に熱中してゐた。

静岡縣磐田郡光明村中谷大治(三二)も近日中に事變があるとして俣銀行から一萬二千圓の預金を出し自宅裏の古井戸に隠匿して天理教を信じ、仕事もしないでゐたものだつた。

群馬縣碓氷郡松井田町天理研究會本縣支部長、古屋うら(六五)は、今回の逮捕に對しても天理教祖おみき婆さんが捕へられたと同じだとうそぶいてゐる。古屋うら女は語つて曰く。

「裁判所や警察未決にも四十日餘りも御厄介になりました、悪いことをしたといふでもない、神様のためですもの何れ時が來れば私達のしたことを世間が認めて呉れるでせう。……私は三十四でこの教をうけそれまでは脳病と肺患とで不建康勝ちであつた。が、信仰に入つてから三十六七年間一度も藥を飲んだこともないといふ程丈夫になりました。今回のことも全國では百數十名の人達が難にあつて、まだ未決に居る人もありますが、神様のことですから、何んとも思つてはをりません。」

茨城縣相馬郡小絹村大字小絹生れ瀧川幸一郎(三五)同人妻ふく(三七)の兩名は檢事局に送られたが、幸一郎、ふくの夫妻はお筆先きに書かれた。天變地變が必ず近くあるとて取調べに向つた平署員に對して。

「あなた方も篤と御思案なされて御辭職せねば必ずつめたくありませんぞ」

とて天理教の一部を説いて署員を啞然たらしめたのであつたと。

以上の例示によつて諸君は容易に、天理教の社會に及ぼす害毒の著しいことを知ることが出来たでせう。勿論云ふまでもなく、上例は、大西を首領とする天理教研究會の事柄に屬するを以つて、之れをもつて直ちに天理教の害毒とすることは出来ないかも知れぬ。然れども我々は、斯る弊害を醸す根據たる教義が同一であると云ふことによりて、現天理教にも又如上の事件の如きものを惹起する楔機を含むものであると云ふことが出来るであらう。そればかりでなく、次の俚言は天理研究會以前に各々の口から耳に、耳から口に傳へられた戒訓であると云ふことからして、我々は容易に如上の事件の如きことがらが、よし、それは刑事問題や裁判沙汰にはならなかつたにしろ、社會に對して根深かき害毒を流し、今日の財産を獲取したものであることは常識的の頭のあ

るものは容易にうなづけるのである。それは、

「屋敷を拂ふて助すけ給へ天理王命」

「屋敷を拂ふて田賣り給へてこの命」

てふことである。然るに今日は六百萬の信徒を有してゐる。このやうに多數の信徒を集めたにいては項を改らためて後に述べむとするところであるから。こゝには略して置くが、とにかく、信者の弱點病處に食込むものゝあることは確かである。

これ等の信者を取り扱つた某縣特高課長は語つて曰ふのには、

「信者の思想を見るに、いづれも無智なものばかりで、布教者に吹き込まれて單純に信じてゐたものらしい。それをもつて直ぐに思想の惡化と斷することは出来ないかも知れぬがしかし事件そのものは重大なる不敬文句があるから許すべからざるものである。」

と述べられてゐるが、斯る事件の發端は正しく無智蒙昧の徒輩の致すところである。

現代に於いても、然も天理教の信者の智識程度を見るに誠に是等に對して科學的宗教の何物なるかを教へる必要があることを痛切に感ずるのである。科學的宗教と云ふ語が不適當であるならば、宗教學と云つてもよい。ただし、こゝで云ふ宗教學は、神學や形而上學であつてはならぬも

のである。これに加ふるに宗教心理學、精神病理學等を以つてする一つの組織を作り、廣く民衆に教へ込むことは、現下の日本に取つて最も緊切な事ではあるまいか。我國當局が國體的反道徳的言動のみを咎めて、個人の生命財産に對してはその個人が迷想的思想を抱こうが、邪説迷信を信じようが、思想の自由であり信教の自由であるとの口實で、何等の干渉も及ぼさぬことは眞に國民の安寧秩序を保證するとは云はれないのではあるまいか。醫の理想は醫無きに至らねばならぬと同様に、國民をして如上の迷想的思想や、淫祠邪神的信仰を抱かせ、これを抱くことをもつて自由なるが故にとの口實は、時局を眞に理解せるものゝ態度ではあり得ないと思はれる。

淫祠邪教を祖先と同一列にせしめて神社として祀つてゐる日本の現状にありては、如何にしても、積極的手段に出づることは出来ないまでも、余の主張たる、宗教學一般位でも（坊主や牧師であつては駄目である）農村田舎に講演せしめる組織を助長せしめるやうにしたならば、もそつと、宗教によりて受ける國民の害毒も減じ得るであらうと思はれるのである。日本の現状は運動や音樂等に力瘡を入れるべき時ではあるまい。若し當局にして智育萬能の弊害として社會主義一般の危險思想を結果するに至つたから、體育萬能的に力を入れねばならぬとの意見のやうに新聞などによりて見られるが、體育は遂いに競争にまで進められ智育を底下せしめる結果に至るのは、

所謂、チャンピオンなるものに見ても明らかではないか。危險思想が多くなつたらなつただけ、その危險思想を研究させるがよい。堂々と討議させるのがよい。朝野こぞつて研究するがよい。之れに對して徒らに外的壓迫を加へるは古い形容ではあるが、角を矯めて牛を殺すやうになりはしまいか。言ふまでもなく思想的信念は一種の宗教的形態を取るものである。それは信念より湧出する熱病の如き、熱烈なる傾向があると云ふ點で。だから、宗教に對する方策とても又そうあらねばならぬ。此處に宗教的危險思想（余は如上の成語に個人の生命財産を危險ならしめる思想との意を持たせたい）に對して、その蒙を啓き、その迷を悟らせ。その無智をして正智に至らしむるやうに導びくところの宗教學一般を吹き込まねばならぬ。徒らに體育や音樂に酔ふてをるべき時ではない。

刮目して汝が足下を見よ饑死戰上に蠢動する幾多の貧民を見るであらう。

面をあげて汝の顔前を見よ憔悴せる産業豫備軍のひしめきが映するではないか!?

耳を欬たてて聽神經に力を入れ、あの音響を聽け！生活苦、就職難、失業苦の叫喚を聽くであらう。

更に深夜に至りて悲痛の聲をあげ、斷末魔の叫びをあげて悲しきかすれた音を殘して三途の川

を渡るべく急ぎ行く人はたれぞ。生活戦にもろくも破れた夫婦ものではないか。いたいけない幼児を伴ふ一家族ではないか。

一六六

これ等の悲曲を聴き、これ等の痛ましき場面を見ても猶ほ且つ奢侈俛樂をむさぼり、スポーツに狂ひ、音楽に酔ひ、酒色をほしきままにするものがあつたなら、これこそ、プロレタリアートの敵線に布列して速射砲をあびせかけらるべき資格をもつものであると云つてもよいだらう。

一般宗教々團の當局は斯る資格をもつものである。天理教は殊に甚だしくあるやうに思はれる。何故ならば、無きものを有るとし、出来ざるものを出来るとし、不明のものを明瞭とし、愚夫愚婦を惑はして、彼等のなけなしの物品を捲きあげて、これをもつて豪然たる殿堂を築き、その内に住み、日常生活も又奢侈を盡してゐるので見ても分るであらう。

話しは側道より細道へとそれた観がある。が、これも余のあるものに對する反抗意識の表らばれと見て許して載きたい。

要するに天理教が大西に對して眞に宗教的態度に出たならば、——宗教的態度に立つて『たんのう』して、大西を正道に導びき込み得たならば——大西をめぐる、五萬の布教師と四十萬の信徒をして國刑を受けさせずとも濟んだのである。然るに、自教の『たんのう』の精神に反し、ま

た『ニクイ』てふ埃りを積み、然もその事件起るや本教とは關係無しとの聲明書を發するに至つては、全くその本來の本性を表はせるものにして、「ひと皮むける」中味の醜狀を暴露したものと云つてもよい。その本性とは何か？それは宗教をもてパンを得る營業的宗教屋であると云ふことである。こゝに余は天理屋乃至天理教屋と呼び來つた根據がある。國家は斯る營業的天理教屋には重税を加すべきである。

一介の労働者が、淺利貝を賣るにも一圓かけて鑑札を警察から下附してもらはぬうちは商賣は出来ぬ。然るに、一圓と云ふ金は労働者に取つては正に大金である。だのにそれは價值あるかも知れぬが、精神的教義を賣つて莫大の寄進にあづかるものには、よろしく國税を附加するのは當然ではあるまいか？余は識者に對してこの問を提出して置くのである。

余は斯る宗教團體に對してマルクス主義的理論抗争をいどむことを今は止めることにする。その理由は、余よりもその仕事に適當な人はいくらでもゐるのであらうから。

次に余は八埃の第五の位置を占むる『うらみ』について述べて行くことゝしよう。

『うらみ』を怨恨にあてる。この意味は人をにくみ、敵視することを云ふ。『うらみ』について天

理教學者は次の如く云ふのである。

一九六

「自分が人から恨まれると云ふのも、それだけの因縁の理が廻つて來たので、世の所謂暴を以つて暴に報い、血を以て血を滌ふといふのは、つまり復仇の心でこれほど埃となるものはありません。御神樂歌にお示し下された。

『なんぎするの心から我身うらみであるほどに』

といふ御教訓を心に刻んで人を恨まず、天を怨まず、これ皆自分の因縁と足納して喜んで通らねばなりません。

然るに、『たんのうの理』も『いんねんの理』も忘れて、人を恨み、天を恨むなどするはよく無い心づかひで、教祖様が埃の一として教へられたのも此の所以であります。〔天理教とは如何なる宗教か〕四六頁〕

こゝにも、『いんねんの理』『たんのうの理』が活躍してゐるのが見えるではないか。人より怨恨を受けるのは、怨恨を受けるやうなことをした『いんねん』によるのであると先づ説教してゐる。自分が蒔いた種の果實を自分が取るのは當然だと云ふにある。だから、人から怨恨を受けるには受けるだけの理由があつて受けるのだから、『たんのう』して（忍耐して）なんぎするのは

自分の心がらだからと我身をうらんで、天を恨んだり、人を恨んだりしないやうにせねばならぬと云ふのにある。若し人を恨んだり天を恨んだりするとせば埃りであると云ふにある。

余等はこゝにも、弱きものゝ味方ならざる天理教の教義を見ねばならぬことを悲しむ。

こゝにも、總べてのものをあきらめるとの消極的なやゝもすれば厭世思想を起させるに似た考へを吹き込むのであるのを観ねばならぬ。

こゝにも権力、金力のあることによりて宗教に依頼する（道樂として宗教を信仰するものはのぞくが）ことを必要としないものゝ身内であることを如上の教理より看取されることが出来る。

今の世に營々として蟻の如く、汗みどろになり、渾身の力を盡して、血を吐く思ひで働らいても一家の生活に不安を感じ、働らいても働らいてもウダツの上らぬ一生を送らねばならぬのが今の世のプロレタリアートの實相ではないか。こうして、苦しみ續けてゐる、労働階級層や小市民諸君に、これ以上の耐え忍びを要求するのはあまりにも實狀に盲であるか、見て知つて見ないふりをし、知らないふりをする悪心の所作ではないだらうか。プロレタリアートに『たんのう』せ『たんのう』せと要求するよりも、ブルジョアに不當の利をむさばることを止めよと要求する方がどれだけ宗教的行爲であるか知れない。これをして初めて、労働階級の味方になり得るのである。

一九七



有産階級に『ほし』『をし』『かあゆ』『にく』『よく』を離れよ！これは埃りである。その埃りのあるうちは、身上事上に障りはいつか来るぞと、いはば、宗教的戦線を敷くならばそれは民衆の味方となり得る。然れども、以上の教理を一般民衆に要求するのは、強いものが弱いものを打つて踏んで蹴倒しても、その弱者に向つて、お前の打たれ、踏まれ、蹴倒されるのはあたりまへだ我慢しなさいと云ふやうなものだ。こんな仲裁はあらうか？こんな仲裁はありつこないではないか。こんな仲裁は仲裁でなくて強者の味方であり。強者の犬であり。非道不人情のものでなければ出来るものではない。

天理教の學者諸君、君等はこのやうな結果を招來することを、君等の教義なるものゝ中に含まれてゐることを知つてゐるか？それとも知らんのか？知らぬでこの教理を人に押賣するのは、如上の結果を齎すものであると云ふことを知るべく、天理教々理對社會、天理教對一般民衆との關係を研究したまへ。天理教々義が如何なる動機から組立てられ、どんな眞意をもつてゐるものであるかを研究したまへ。

余をして天理教々理を云はしむるならば、個人の頭腦中にあるものは何も云はない。然し、事社會に關するときは、片手落の見方をしてはならぬと云ふことを知つてゐねばならぬ、と思はれるのである。

主觀的事柄は問はない。然し、社會的事柄については社會人として之れに容喙する權利を有するのは、我々が社會人としての性質自體より必然のことである。

如上の結果を齎すものであるとの事柄を知つてゐて、猶ほ且つ、如上の教義を宣布するのは、明らかに搾取階級の一人であり、ブルジョアよりも猶ほ狡猾な搾取家であると、我々は云はねばならぬ。これはブルジョアの上前を剝ぐものであり、それ自身うまき汁を吸ふものであると云はねばならぬ。

こゝでも我々は、有るものに儲けさせ、無いものからは取り立てる或るものの姿を醜にくゝも見る以外の何物をも見ないのを残念だと思ふのである。

余は第六位の埃に屬する『はらだち』について次に述べることゝしよう。

『ハラダチ』——寛容忍耐の徳を破るもので忿怒の文字を當てます。

この埃りを拂ふことが出来るかといふに『たんのう』して月日(神を云ふ)を満足して通るより外に道はないのであります。お言葉にも、

『満足は道の肥』

『満足はたのしみの花が咲く』

とも仰せ下されてあるのであります。兎角人間は日々に不足をつけたりおもしろくなく暮らしたりするが爲に、遂ひに腹立ちの素となるべきであるから『たんのう』して不足をつけぬやうに、いつも晴天の心を以て通らねばならぬことを教へられたのであります。尙又この埃りは前節の『ウラミ』と同じく人に腹を立てさせたり、人に恨ませるやうに仕向けるのも、やはり埃りとなるのでありますから、深く注意せねばなりません。〔天理教とは如何なる宗教か〕三十五——三十六頁)

以上の引用文に意味することは、矢張り、寛容し忍耐し『たんのう』することを極力主張して、不足に思つたり、面白くないと思つたりして満足して暮らさなければ矢張り埃りとなるのであると云ふにある。

これによりても、明らかなる如く例の通り無抵抗主義を教へてゐることが解る。腹を立ると云ふ命題は、腹を立ると埃りになり、埃りは、身上事上(身體や事業上)に障り(悪結果)を生ぜしめる悪いんねんの種を爲すものである。と宣言してゐることが容易に解る。ところが、渡邊勝氏は。

「忿怒には敵愾心と私憤とがあると云ふ。敵愾の心は善であつて、忠憤や、不義不信の人の社

會に跋扈するを忿む。私憤は埃りとなる。」(天理教側面觀)

と云はれてゐるが、天理教の『ハラダチ』は氏の云はれるやうに明瞭に區別して意味せられてゐるでありませうか？ 余は疑義無きを得ないのである。若し氏の云はれる如くでありましたならば、天理教の八埃である、『ほし』『をし』『かあゆ』『にく』『うらみ』『はらだち』等は皆或る條件のものに主張さるべきものであつて、絶對的の力を意味する語句ではないと云ふことにならねばならぬのである。即ち、以上の埃りは正義の爲に起す分には埃りとならぬと云ふことでなければならぬのであります。然るに天理教々師、天理教學者の多くは渡邊氏の如き意味で云つてゐるやうには思はれないのである。これはどうしてかと云ふに、埃りを起すことそれ自身を主張し、何んでもかでも『たんのう』に埃りを結びつけて解釋してゐることによつても分るではありませんか。だから、渡邊氏のお考へは天理教々義と道德的意味を以つて粉飾して説明せられたのだと云ふことが知られるのであります。だが、我々も矢張り、氏の意見の如く公憤は善にして埃りにあらずとの説に賛意を表したい。何故ならば、若しそう云ふ風に解釋しなかつたならば、天理教は全然たる無抵抗主義に陥つてしまふだらうから、實際はこれをやつてゐるのであるが)又、天理教の神様も怒つてゐる。これを天理教では公憤と見ない限りは、横

範とすべき神様が怒つて人間に手本を示してゐるのだから人間も怒つてもよいことになるのであるが、これを公憤と見れば人間も公憤をやつてもよいのだと云ふことが出来るのである。その神様の立腹と云ふのは次のやうなものだ。

「病とてせかいなみではないほどに神の立腹今ぞあらはす」(御筆先第一號)

「何のよなせつない事がありとてもな病ではない親の殘念」

「今迄も月日殘念山々と積りてあるをかやしするぞや」

「此の世界山喰へなぞも雷鳴も地震大風月日立腹」

「雷鳴も地震大風水つきもこれは月日の殘念立腹」

これを以つて見るも、神様も矢張り立腹もすれば殘念だとも思ふつてゐるのであることが分る

ではないか。それよりしても、社會正義の爲めに奔走するものは不義邪曲に對して忿怒の情を以つて之れと抗争するも、これ實に天理教の神の立腹や殘念と何等の變るところはあるまい。さすれば實際は單に消極的なる『たんのう』の理のみを主張すべきではない。あきらかに、天理教主義を通す爲めには之れを障碍するものに對しては、どこまでも突破して進むべきものであることを前提とせねばならぬ。

要するに、天理教々理を通るについては、『たんのう』の思想をも省みてはならぬ場合のあるものにして、此の點に於いて、『ハラダチ』の教理は絶對的に之れを守らなくてもよいと云ふことが解るではないか。

然るに實際は信者に對して『いんねん』の理を高調し『たんのう』の理を強調する。が、それ自體は何等の『いんねん』も『たんのう』をも感ぜず、爲さざるものであることを見るにつけても、他人に對して求めるところあるも、自らは之れを爲さざるの不當的態度が解るではないか。我々は之れによりても又單にその不適當なことを見たに過ぎなかつた。ただ、搾取的な傾向を濃厚に表はしたものの以外の何ものも見ることが出来なかつたのである。

次に第七位の埃である『カウマン』について述べることにする。

「カウマン」高慢はいふまでもなく鼻を高くして人に誇る心使ひで、謙遜低き心、やさしき心が人の美徳であるといふ事を知りましたならば、反対の高慢は悪るい心であるといふ事は説明するまでもないことであります。

高慢と虚飾は常に難れぬものなれば、何時もみえを張り、知らなくとも知つた姿を装ひ、無くても有るやうに見せびらかし、一切の偽善とか虚榮とかいふものはこの高慢心から起る結果に外ならぬものであります。

教祖様が。

『あほうになれ』

と仰せられしは深く味ふべき言葉でありませう。「天理教とは如何なる宗教か」(三十六頁)以上の教説を見るにつけて、吾々は佛教々理に於ける七慢を思ひ出す。七慢とは、慢、過慢、慢過慢、憍慢、我慢、大慢(増上慢)、卑慢を數へることが出来る。ところが佛教の慢は天理教の慢の如く『あほうになる』必要を認めぬ慢である。元來佛教の慢は自己増大の結果にして、自我をありのままの自我として認識するものに取りてはこの慢は心理的現象として起り得べきものではない。殊に深く注意すべきは『あほうでないもの』が『あほうになる』やうな態度を取るの

明らかに佛教で云ふ『卑慢』であると云ふことである。或る佛教學者は、卑慢は天狗の裏の方へ鼻を高くしたやうなものだと云つたことがあるが、うなづかれる點があるではないか。天理教で美徳の一として數へられてゐるのに謙遜と云ふ徳があるが、謙遜の度を超すと卑慢になると云ふことを忘れてはならぬ。

言葉尻を捉へて批難する譯ではないが、引用文中の無くとも有るやうに見せびらかし一切の偽善とか虚榮とかいふものは、この高慢心から起る結果に外ならぬと書いてゐるが、現在の天理教はこの高慢心をもつて教界に臨んでゐるのではありますまいか。神の存在の不確實なるを確實に存在するが如くに説くは明らかにこの高慢と云ふ範疇に入るべきものであつて、更に驚くべきは、外容的に堂々たる如く見せるけれどその實は教義に統一なくその内容の空虚を努めて隠蔽せむとしてゐるのは何よりも先づ虚榮を表はすものであつて、教内にも斯る經濟派とソリの合はぬ純信仰派の人々があるにはあるが、恰かも月明の星に比すべきことを以つてしても、天理教の正體が奈邊にその本態を置くものであるかと云ふことが分るではないか。この事は正しく、精神的商品をも以つて物質的代償を得るてふ經濟的現象を示す以外の何物でもあり得ない。余等はこゝでも、彼等天理教々團の物質をいくら積んでも得られぬと云ふ精神をお爲ごかしにそれを求めねばなら

ぬ弱處、病點を有するものに押しつけて、賤しいと云ふてゐる物品金錢を引換へに受け取る有様を見る。そして猶ほ面白いことは、それ等のこよなく尊い精神を買つたものでもパン無しには生きて行けぬと云ふ事實を知ること、非常に價値があつて、それをもつてゐるものは偉いと思ひ、それを有つてゐる人を偉い人だとする。その持つ人は即ち精神を賣つて安々と大殿堂に住んでゐると云ふことである。

余はこの事實を一體どうしたものか、理解し難いが、この事實からして、天理教とは儲けるものだと思ふことを知ることが出来るばかりだ。それなのに、儲ける等と云ふことを云ふと、彼等は手を振つて誠にやかに「あなた、それは間違つてをりますぞ。」と鹿爪らしく説教をまくし立てるが、黒紋附に立派な袴に足袋を履いて、扇をもつてゐる圖はあんまりなりからして金のかゝらぬなりではないではないか。それからしても、深い腹には金がほしいと思はぬと、どうして云はれるか。こんなことを云つたとて無い腹を搜ぐられる等と云ふ天理屋さんもあるまい。

商賣の性質上、口上も商賣の手前金は欲を起すもの、ほしがつては埃りになりますぞ。財産をもつてゐてもだめですぞ。と云ふものゝ、そう云つてゐるうちにお金が入つて來るとは、まあ、なんと良い商賣ではないか！現代のやうに人間が多く、浮ぶ瀬の無い人間が何商賣も何商賣もい

けないと云つてゐるとき天理屋とは又考へたものではないか。そんじよそらの天理屋さん。少しためたら貧乏人にでも施しておやりなさい。そうでなければ、天理王命のお手入れや、障りや、身上事上の變化は無くとも、地獄もあり、暗いところもありますぞ。まあ、地獄極樂は無くとも、いづれは、君等の子や孫が天理屋てふ札つきである爲めに、世の立て替へのその後には『しゆんてくげん』が來ますれば、饑鬼になるか地獄行きになるか、まあ、とつくりと胸に手をあて、お考へあつた方がお爲ではありませんか。これ以上、宣傳費にする金や音楽の夕だとか、お話しのだとかに使用する金を、食ふに食なく、働らくに仕事なき人々に、例のお箱の大慈大悲の天理王命様の御利益を見せてやるべく施しておやりなさい。こんなときに、この場合働きたくとも働けないでゐる人々に、

「働きなさい。人間であつて働かないものは我が教への子ではない。」

と教祖様が云つたから、施す必要がないなぞ云ふやうなことがあれば、それはあんまり頑固一徹な盲者の野暮と云ふもんですぞ。仲には働きたくとも働けない人間のあることを知らぬ果報者がゐるかも知れぬが、それ等の人は先づ大阪でも東京でも新聞の、論説なり社會欄なりに注意さへすれば、容易に知ることが出来るのであつて、それを知らずに、労働者の叫びを兎や角くと

批評したり、彼等大衆の唯一の浮き上り策としてのマルクス主義を、蛇蝎の如く嫌つて研究しようともしないのは、云はゞ、盲者の食はず嫌と云ふものではないか。

八埃の最後の位置にある『ヨク』について述べませう。

「私慾は前に申した七ツの埃の源となるものである。

『近道とよくとかうまんなきやうにただ一寸の本道に出よ』

との神様のお言葉は何んと服膺すべきではありませんか。右申しました八埃の結果が自然に外部にあらはれて『身上なやみ』となるのであります。

即ちお筆先に

『何にても病といふて更になし心得違ひの道があるから』

『一れつにあしきといふてなけれども一寸の埃ついた故なり』

『一れつは皆めんくのむねのうち心得違のみちがあるから』

『どのやうな痛み患みできものや熱もくだりもみなほこりやで』

と仰せられてある通りであります。されば如何にしてこの埃を拂ひ去ることが出来るかと申せば、それは信心の力によるべきこと勿論であります。即ち日夜絶え間なき神恩を感謝し、借物の理をわきまへ、天理天道をおそれ、日々に反省し、一日は一日の成人の道を通りて、誠實の人となるべきであります。

『誠眞實定まれば身上すこやか』

以つて神様の御高恩の程を知ることが出来ませう。」（「天理教とは如何なる宗教か」三十八

——三十九頁）

以上の引用文は天理學者の一見解である。欲の結果は『身上なやみ』（病氣となること）となるとおどしてゐるが、欲は七ツの埃の源となるものであると云ふのである。どんな、痛みでも患ひでも、出来物でも、熱の出るのも、下痢するのも、皆めんくの心得違の結果、埃となつたものゝあらはれであると云ふにある。つまり、心の持ちやう一つが身體にあらはれると云ふことに歸するのであつて、それ等の埃りは『よく』に源を發してゐるから、『よく』も又埃であると云ふところから、『よく』を殿りに置いたのであらう。これ等の埃と病氣とのことについては、後

に一節を設けて説明するつもりだからこゝには省くこととする。

元來人間に欲が無かつたらどうであらう。おそらく生きてゐるものが無くなりはいまいか。現代の如き社會制度に欲を取去つて理想郷を建設すべきであらうか。制度を理想的に換へて行くことによつて、自ら欲を離れるやうにするのが特策なのかは、考へる人にとつて明らかかなことではあるまいか。現代の如き社會的狀態にありて、社會的欠陥を變改して理想的世界建築に力を盡すのが先きか？（理想の實現は難しいことであつてもそれに近づくことを意識的に豫想して）現代の變改に對して心を理想的心境に置くことを以つて外界の不合理を合理と眺め、非理想を理想として見ようとするのが先きか？云はゞ、外的變更によりてその外的變更に内的心境を合はせて行くことが先きか。外的のことをどうでもころでも内的心境で歪めて見るのが先きかと云ふことは、充分考慮せねばならぬことである。今日の進歩した教育は内的と外的との方面より教育を施して行かねばならぬことを力説してゐる。天理教の如く單に内的のみ重心を置くのは、一面にのみ目を注いで他面を忘れたものか、乃至は片手落ちのやり方でなければならぬと思ふ。人間をして人間たらしむるには、物心一如の上から人間の向上を計らねばならぬ。心が物を作るとか、心から物がなるとかは全く獨斷であると云はねばならぬ。

我等はこゝでも又獨斷的敎説を以つて愚民を惑し、迷妄の間に事を爲さんとする奸手段の含まれてゐることを、見逃してはならぬと云ふことを知ることが出来るのではないか。

以上で八埃についての説明を了つて置きたい。が、これがどんなに人心に影響し、どれ程、人心を惑はす結果を引き起すかは、次に漸次に諸君の眼前に展開されるであらう。

余は以上數節に亘つて天理教團に對して毒舌を振つて來た。それ等の毒舌を振ふのも、余と天理教とにいんねんがあつての爲だらう。天理教はたんのう、（我慢して）してこれを有難く聽くべきである。怨まず、いからず反省すべきである。——天理教的に解釋して——ところが天理教團に對して、その欠陥に心附いてゐるのは余ばかりではない。教内のものでも殊に教養のある青年は、とつくに心づいてゐる。次にその二三を紹介しよう。

「現在我々の教團にゐる我々の悩みは、敎祖が説いてゐつた道があると云ふことを前提として我々はしてゐるのです。

處が我々はこれを學的に研究して行くことが、教團生活に受け入れられないのです。そこに自分の心の要求と實際生活の矛盾があつて、其處に我々の悩みがある——二十九頁

先程柏木先生の説では天理教は決して墮落する教でないと言ふ。が現在の天理教を見ると墮落は無いとは云へないと思ふ。佛教と同様に墮落すると思ふ——三十頁（日本大學天理教青年會機關雜誌「大和路」昭和四年二月號）

三四

「人の前に立つて信仰を語り『八ツの埃り』を説きながら、自らが救はれてゐない。『足納の生活』を送りませうと口には云ひながら、絶えず不平を云つて通つてゐる。他人の心得違ひのみを指摘しながら、自分の醜惡さに気がつかない。而して宗教家然として立つてゐる。——五十七頁

外形的のみ目ざましい發展をして來て内面の空虚になりつゝある本教の危険云々。——五十八頁

お道の人で往々『此の神様を信仰してゐれば外の神様に參詣する氣になれぬ。』などと云ふ人があります。實際お道で教會以外の神社に參詣する人は至つて、少いやうに見受けられる。——五十一頁（同上）

「或る信徒の問え

岩井尊人

『何時の説教でも本教を擴張の手段の外に出でない様ですが、何故信徒に現在に處する生活法を説かないのですか』——五十一頁

D『自活せざる教師は食はんがために、信徒に強要する點が多いやうに見受けられますが、自活法を講じて後の布教では道が遅れるのですか』

（Dに對する答へとして次の如く岩井氏は述べてゐる。）

『人間の生活に古來より、恒産無きもの恒心無し、といふ。されど、もうかなはん。身をすてねばならん。しかし身をすてゝもといふ處に神が働く、とあり背水の陣といふことも亦有之候

——中略——

強要するといふ事も實は強要せらるる者の心よりみて強要せらるゝ場合が多い。強要はうける人の心によりて意識せられて強要となる。強要してゐることを意識してゐても、受ける人が強要せられてゐる考へのないときは、受ける人に於いて少くとも強要の効果も意義もないわけである。

三五



E 『何かといへば理を立てるといつて喜納金を出させるが本教發展上自然の趨勢でせうか』  
 (Eに對して岩井氏は次の如く答へてゐる)

『喜納金が出したくないなら、それはいや／＼強賦金となる。喜納金でない。嫌なら一文も出すに及ばぬ。斷乎として受取つてはいけない。それは出してゐないのである。よくがあるならやめてくれ神が受取り相叶はずと仰せある。只々一文の金の出損が道を弘めるための道をしらすに、神の目にはいぢらしい子供たる苦しんでゐる人を助けるの資力と化することを確信するとき、文字通りの、ひのきしんであり、喜進であり、喜納金である。心に伴うてのつくし、はこびがものだねとなる。』——五十一——五十二頁〔昭和二年十一月發行「みちのとも」〕

以上述べたやうなものによつて、我々は何を知つたか。それは、

イ、天理教々團は學的研究を受け入れない。

ロ、純眞の青年の要求を満すに足らぬ。

ハ、宗教としての天理教團には既に墮落がある。

ニ、他には教理の實行を要求すれども要求者自身はそれを行なはぬ。

ホ、たんのう／＼と云つてもそう云ふものがたんのうせず不平をならしてゐる。

ヘ、他人の心得違ひばかり指適して自分の醜惡さがわからぬ。

ト、外形的にばかり發展してゐるが、内的組織や教義の統一がまるでダメである。

チ、日本國民としての敬神の念を阻害するやうなものを出す憂ひあり、キリスト教に於けるが如き神社參拜拒否問題を起す危険を含んでゐる。

リ、外的勢力のみに専心してゐる。(商賣屋の所以)

ヌ、自活する爲に教師が信者に金を強要するものが多い。(全く商賣屋だ)

ル、何かと云へば金を寄附させることばかり考へてゐる。(搾取たる所以)

と云つたやうな點が實際存することを知らることが出来るではないか。D、と、Eに對する岩井氏の答へにも誠に巧妙な詭辯が含まれてゐるではありませんか。余は之れに對して今は何も問はぬこととする。このことについてはいづれ述べるであらうが、實際教内の聲を聞き、又はその意見を見るに如上の點に氣附くことであるが、事實はまだ／＼ひどいことがあることを余はこゝに斷言して置くものである。余は今まで、出来るだけ文献に據りて余の主觀的の考へを述べるこゝ

をつゝしんで来た。客観的のものを出来るだけ讀者諸君の眼前に提供して来た。讀者諸君は余の提供する資料以外に、より深いより廣い事柄が存することを知らねばならぬ。何故ならば、余の實際見又は聞いたことで、ひどいことがあつても、余は典據の無いものは出来るだけ論難の根據とすることを遠慮したから。

### 八、労働は働らかざるものに強ふべきものだ！

天理教は以上の教説の後には必ず『たんのう』して『ひのきしん』せねばならぬと前同様な教説的口吻で行儀よく説き聽かすのである。

「教祖が、働きなさい〜人間であつて働かないものは我が教へ子ではない」と、云つた。此の意味を布衍して行くと人間として社會的勞働利他的勞働をなさないものは天理教徒でない。云ひ換へれば神(理)の子供でないと言ふことを意味する。」(大平良平氏著「天理教より見たる人生の意義及價值」八十三頁)

「日の寄進は勞力の寄進である。犠牲の精神である。」(渡邊勝氏著「天理教側面觀」)

「日の寄進とは貨物に對して神へ日日誠の精神を寄進するの謂である。

理(神)をたて、身が立つ、と云はれてゐる。

客観的には自己の運命人類の運命を變じ、主観的には感恩報謝の一念を起すことである。」(大平氏前同著八十七頁)

以上の例によりて吾々は『ひのきしん』即ち、日の寄進と云ふことが如何なることを意味するかと云ふことを知る事が出来るではないか。日の寄進とは勞働だ。はたらく事だと云ふことを知ることが出来るのである。

勞働は神聖なりと云ふ語は色々な意味合ひで余りにも我々に聞きならされてゐる言葉である。生産せざるものは喰ふべからず、とのモットオも又耳についた言句である。だから、はたらくと云ふことは、生きることに對しての必須の條件であると云ふことは言ふまでもない。だから天理教が教理の主要なるものとして、『ひのきしん』を高調するのは、何にも殊新しきことではなくし

て、太古より意識的にせよ無意識的にせよ人間には考へられ要求されてゐたことに相違はない。『労働は神聖なり』との命題は労働を賤しきものとするに至つた時機より産み出された語句であると云ひ得る。印度に於いては釋迦の在世時代その社會には四階級の別があつた。然して働く者は最下層に屬してゐたのであつた。釋迦は精進を高調した。明らかに精進せざるものに對する戦端の開始であると見ることが出来る。そして今我々が見るやうな有閑階級に對する反省を促すことを専らとしたのは云ふまでもない。釋迦に於いては、今余が述べた如き階級てふ考へを持つてをらずに、只々、不精進なるものに對しての抗争であつたかも知れぬ。その結果は矢張り労働せざるものゝ多くある有産階級即ち當時の婆羅門（僧族）、刹帝利（王族武人）階級に對する反旗を翻したことであつたと見てよらしい。そして必然毘舍（農工商人）、首陀羅（奴隸賤族）階級の味方を爲せるものと見ることが出来る——働きつゝある階級の味方として。

キリストの生存時代に於けるサドカイ人、パリサイ人にキリストが反抗したのもあまりに彼等の固定的なるに對して、彼等の有閑的なるに對して、彼等の形式的なるに對して、貧民の淫賣婦の、收税人の友として彼等に反抗したのも單なる神の國の到來を説き、福音の到來を教へるのみばかりではなかつたらう。それは、働くこと、うごくこと、靜止せざることを教へ、働かざるものに對

して、うごかざるものに對して、儀式張つたものに對して、單なる社交的なるものに對しての抗争であるとしてよらしい。それは、次の文句でも解る。

「安息日の爲めの人間か？人間の爲めの安息日か？」

と云つた。ことでも解るであらう。矢張りキリストも又民衆の爲めの味方であつた。支配階級に抗争して被支配階級に屬するものゝうち、たちをあげんと努力したのも、一人であるとしてよらしい。だが、政治的變改を以つてこれを救はむとせむ爲めには當時の状態が此れに適應してはゐなかつた。それだから、四十日の荒野のさすらいに於けるサタンとの抗争があつたのだ。

「カイザルのものはカイザルに還せ！」

神のものは神に還せよ。サタンよ去れ！」

とは、普通精神的要素としてのみ解されて來たが余の見解を以つてすれば、人間——等しかるべき價值ある被支配階級——を救はん爲めには物質的、精神的の兩方面に渡る救済でなければならぬ。昔にキリストには知れ切つたことであつたらう。だから四十日のこゝろみを受けたとの話しはキリストの内面活動を記するものであると見るは妥當とする。然も物質的に苦しんでゐる民衆、當時のユダヤ國がローマに對しては被支配階級の立場にあつた故もあり、

又こんな状態にありながら、舊約の學者等はどうかであつたらうか、形式に流れ、人よりも立法を重しとしてゐる彼のパリサイ人や、サドカイ人の搾取階級の構成、この状態を目のあたりに見せつけられて『神の福音』を傳へたキリストたるもの、何んで之れが變革を企だてないことがあらうか。四十日のこゝろみは、實に斯る意味合ひに取り得ることによつて、初めて意義のあるキリストを眺め得るのではあるまいか。人間救済とは、精神的救済のみを云ふのではない。人間救済は人間救済である。人間が物質と精神との二要素のある限り人間救済は精神的救済と同じ程度に物質的救済を必要とするは如上の論理で明らかであらう。話しが側道にそれたが、とにもあれ、働けとの掛け聲は働かざるものに對してのかけ聲であつた。と云ふことは確かである。そして之れを律する種々なるものがあるが、それは正道にもどさんとする正道を超した反對の道であることは、あへて、伊勢貞丈の神道獨語の一節を引くまでもなく知ることは難くないのである。

孔子も、釋迦も、キリストも、人の働くべきことたるを主張してゐる。そして天理教はどうか。天理教も矢張り『ひのきしん』『ひのきしん』と云つて働くことをその教義の重要なものとしてゐる。だがこゝに注意せねばならぬことがある。それは、天理教の『ひのきしん』の要求はあわれにも働くことを必要としないものに對して提供されてゐるのではなくて、働きつゝあるもの、又

は働らかむと思つても働らくに職なきものに『はたらけ』、『はたらけ』と熱心氣に説き廻はされてゐると云ふことである。それは又どうしてかと云ふに、天理教は救済を目標とするからと稱して『谷底』即ち下層階級にその教義の宣布を専らにするからである。下層階級若しくは勞働大衆に對して『ひのきしん』を高調することは、明らかに、働いても働らいてもその日の食に追はれて憩ふ時をさへ充分にもたぬ人々に、その憩ふことも止め、少しの油を注ぐことも止めて、粉骨碎身に働け働けと強ふるの一般である。遊んでゐるものにとつては、身上事上の惡變化の來ることをもつて之れをおどす、如何にもそのおどすことには寔に同感である。然し、そのおどすことも次のやうな條件を冠して初めてこゝに許るべきものであると云ふことを忘れてはならぬ。その條件とは何んであるかと云ふに、巨滿の富を擁して働らかなくとも衣食に窮せず、而して安逸をむさぼつてゐる人々に對して、如上のおどしを極力教説すべきものではあるが、働らきたくとも職なく、仕事を欲しくとも仕事にありつけないで止むなく遊んでゐると同じやうな外見を呈する人々に對して、行なはるべきことでないことである。これを取り違へて、何んでもかでも遊んでゐるものに對して『働け』と云つたとしたならば、ブルからは何の要求も出ないかも知れぬが、プロからは、次のやうな要求の出るのは見え透えてゐることである。どんな要

求かと云ふことは説明するまでもないだらうが、それはこうである。

「俺れ等も遊んではゐたくない。遊んでゐれば嬪や子供にも米の汁も吸はせることが出来なくなるんだ。だが、働きたくとも働く仕事がないんだ。仕事はあつても、一家を養つて行くに足るだけの金は取れないんだ。一人でも、二人でも食ふだけ取れれば、遊んでゐるよりはよいではないかと云ふのが金のある人の常に云ふ言葉なのだが、そう云ふ通り一人でも二人でも食つて行ければ結構だが、後の家族どもはどうなるんだ。食ふことが出来ないではないか。だから、結局は食へないやうな破目に陥つてゐるんだ。そのうちに病氣にでもなつたり、不幸でもあつたりしたら、それこそ目もあてられねえではないか。君等が働けと云ふなら働く。それこそ、一生懸命に働らくから一家の生活の保證を與へてくれる仕事は一體何になんだか教へてくれ。」と云はれたら、天理先生一體どう答へるのだ。今のところで天理教が最も聖業と云つてゐるのは、天理教々師になるのだ。如上の問ひに天理教は天理教々師でもすゝめるか。天理教々師が一人でも多くなるのは明らかに、不勞利益を食ふもの、非生産利潤を食ふものを造る以外の何ものでもないのである。

「他人の財貨をねらつて我が懐中を肥やさんと紋附羽織でノラクラ遊んで神樂動をしてゐる人

間の仕事である。」(田中豊州氏曰く)

と云つた人もあるが、一面の眞理を傳へるものと云つてもよい。だのに、彼等はこの理を辯ぜず、働くに仕事なく、努めんとするに職なきプロレタリアに對して『ひのきしん』『ひのきしん』と如何に強調するかを示そう。そして、驚くことには、その結果は無き者よりの搾取を爲すと云ふ結果を招來する以外の何んでもないと云ふことと、勞働大衆に對してはお爲ごかしに『ひのきしん』『ひのきしん』をすゝめると云ふことである。

「天理教の一つの特色は從來の宗教が何れも智者、學者、顯門、富豪と云ふ社會の上流社會を踏臺としてその福音を宣傳せるに反して天理教は全然之れとその行き方を異にし其の救濟の第一手を所謂谷底の人即ち貧者、弱者、劣者、不具者、不幸者につけた天理の教へである。」(大平良平氏著「天理教々理より見たる人生の意義及び價値」三十九頁)

「よくあるではありませんか、あのやうによく事の分つた人であるのに少しも句が掛らない(著者曰く、天理教に興味持たぬ人との義)、あゝ云ふ人でこそ學者にでも充分道を説かせて頂ける

のになあと。又反對にあの何も解らない人がよくまあ、あのやうな人に匂ひが掛つたものと人間が考へたら、不思議でならないやうなことがあります。これ等は皆親様が一名一人の因縁を見分けて御守護下さるのであります。高山(有産階級を云ふ)に教へても、どうもうまく行かぬ。何故ならば、彼等には物質上の心配はありません。だから神に御願ひすると云ふ様な心は容易に起らないし、又信ずることも出来ないであります。

次に谷底せり上げの道であるから、谷底より開始する。彼等貧民は直ぐ御守護を頂くのであります。何故なら彼等には頼るべき物質も何もありません。だから助けてやらうと云へば本當にそれを頼んで來ます。で御守護を頂く事が早いのであります。

何んとなれば彼等下級民は、宗教とはどんなものか、神とはどんなものか、斯うした問題については、頭は少しもないのであります。只病氣を助けて頂いたのなら有難いこれだけを知つてゐるのであります。病氣を助けさせて頂けばそれでよい。それが理想であります。(昭和二年十一月發行「道の友」四五—四六頁野口一二氏論文)

「更らに此の自由平等が天理教の理想否な神の理想であるといふ證據は文明の進歩に伴ふて人

權が次第に自由平等化せられつゝ行く社會組織の變更は之れを實證してゐるのである。御筆先に、

『世界中一列は皆兄弟や他人と云ふは更にないぞや』

『此の元を知りたるものはないのでな、これが月日の残念ばかりや』

『確と聞け高山やとて谷底を儘にしられたことであれども』

『これからは、月日變りて出る程に儘にせうならすればして見よ』

と神は全世界の子供と性格と運命に差別の存することを好まぬ。この親心はやがて全人類の人格的價值と運命とを平等化せんとする神の理想として表はれたのである。(大平良平氏著「人生の意義と價值」四七—四八頁)

如何にも大平氏の云ふが如く、天理教は、智者、學者、顯門、富豪等の上流社會を踏。臺とはしてゐない。それは、現管長中山正善氏の發表によりても明らかである。即ち、七十二%までは農民であり、残り二十八%は都會人であると云はれてゐる。その教師の統計を取つて見れば、一萬二千人のうち

不入學者 二・九二七人

高等小學校卒業者 八・一五二人

高等小學校卒業以上 九九九人

であると云はれてゐる。これによりても、如何に天理教信者が學問無きものゝ集會團體であるかを知ることが出来るのである。この事は、今日の天理教發達の（勿論外的の）最も須要なる理由の一つを爲すものである。これは後述に又改めて一括として述べるであらうからこゝでは除いて置く。中山正善氏の發表によりて知ることく、十二分の一の知識階級者を持つ、天理教の現勢は如何にしても智者、學者を踏み臺とするものは云へぬ。それは明らかに、貧者、弱者、劣者不具者、不幸者を踏み臺にするものであると云はねばならぬ。だからこそ、非常なる危険があるのである。智者顯門、富豪に踏み臺を据えて置くのであると天理教が財的勢力を層大すればするほど、それ等より吸収したものであると云ふことが出来る。が、貧者、弱者、劣者を踏み臺としてゐると云ふことは丁度その反對で、天理教が外的に發展して、だん／＼太つて行けば行くだけ、貧者は益々貧しく、弱者は弱く、劣者は手も足も出なくなるやうになるのは當然であつて、こゝに、「家敷を拂ふて田賣り給へ天理王命」の古人の訓戒を破つて素寒貧になるものが出て來るのである。

る。だから、踏み臺とは吸血虫の吸血盤附着部を意味することゝなるのである。

更に貧者、弱者、劣者等が信者の大部分を占めてゐると云ふことは、野口氏の云はれるごとく有産階級は物質上の心配もなく、あやふやなものを信するには智力が動くから、神様にお願する筋合のものもなく、又信仰にも入らうとすることも出来ないものである。が、貧乏人や弱者や、劣者はそうは行かぬ。自分に力がない。物質的の餘裕もない。従つて現代の社會制度に於いて物質の變化せるものと見てもよいところの智識もない。従つて反省もなく思考力もない。見聞が狭いから奇異の現象に、すぐ魅せられてしまふ。かくの如き奇異なものと思はれる現象が他にも澤山あることを知らないである。ほんとうに素朴な信仰の仕方をしてゐるものが九分九厘までであると云つてよい。だから勿論、宗教とはどんなものか、神とは何んぞや、と云つたやうなことは、てんで初めから問題とはしない。それこそ野口氏ではないが、「そうした問題については、頭は、少しもないのである。」

ところがこれと反對に、よく物事のわかつてゐるものとか、相當の知力の動く人、には盲信と云ふことが無いから、容易に信仰に入らうとは思はないものである。またこれが當然であつて、野口氏の云つてをられるやうな、何も知らぬもの、あんなわからずやと思つてゐるものには、よく

信仰に入るものが多いのは、當然であつて、何も、人間が考へたからと云つて不思議でもなんでもないのである。充分科學的に説明し得るものであつて、むしろ余は、相當の學識のあるものであつて然も猶ほ熱心に斯教の教理を何もかもそのまま受け入れてゐる人々を憫まざるを得ないやうな氣持がするのであります。そんな人々は、如何程他の學識に長けてゐても、少くとも、宗教學や心理學や精神病學やも、そつと、難しいところを云ふと、認識論等をやつてゐない人ではあるまいかとさへ思はれるのである。然らずんば大なる野心家にして、天理教を喰ひものにしようとするものだと評してもよからうと思ふのである。廣池博士にしてもそう云つたやうな——これは前者の型に屬すると思ふが——傾向のある人ではないかと思はれる。博士は元來法學島の人やうであるが、博士は天理教の天理をこよなく哲學的に解してゐる。が(三省堂發行、日本百科大辭典第七卷七四一頁、中段、本書六十六頁參照)それは、天理教々理史を無視した獨斷であると云はねばならぬのである。それはどうしてかと云ふに、博士の解釋は天理なる文字でなければ解釋の出來ないやうな解釋の仕やうをしてゐられるが、轉輪王の命の場合の轉輪なる文字では、どんなことをしても解釋を爲すことが出來ないのである。ところが、天理教々理史を見たものでさへあれば、たれでも、天理王命は轉輪王命と書かれてもゐたし、呼ばれてもゐたと云ふことが斷言出來る。

その證據をお目にかけてませう。

「天理教は天保九年十月廿六日に大和國山邊郡中山善兵衛の妻ミキによつて唱道せられたもので其の初めは神佛混淆にて轉輪王命と稱し、

『惡しきをはらひて清めたまへ轉輪王命』

と歌ひ神前に舞踊して心神の清淨を計るものである。(中略)早く轉輪王を天理王に改め帝釋天等の佛教的なものを斥け、漸次に教理を系統づけた。(加藤咄堂氏著「民間信仰史」四一五—四一六頁)

これによつて、三省堂の日本百科大辭典中の天理教なる一項に執筆せる論文中の天理王命の信仰に對する廣池博士の所説は根底から覆がへされるものであると云はねばならぬのである。

次に余は野口氏の論文を見て、注意せねばならぬと思ふのは、病氣を助けさせて頂けばそれによい。これが理想でありますと云ふ一節である。元來病氣を癒すのは醫者の役目であつて宗教家の本質的役目ではない。日本大學教授松原寛氏は宇宙誌に於いて次のやうに云はれてゐる。

「助け一條を以つて彼等は無上の光榮だと考へてゐる。然し此處に天理教の危機は存する。教徒



は深く思ひを致してもらひたい。彼等の助け一條は『病魔の驅逐』であり、『家内安全』であり『商賣繁昌』といふ。現世利益は有難いに違ひない。私は徹頭徹尾之を宗教より排除せよとは云はない。然し、現世利益のみが宗教ではない。之れに没頭すればこそ、低級卑賤と思想家たちから罵られる。現世利益には思想はいらぬ。只信仰で足る。否只盲信で足る。鰯の頭も信心からといふのも、其處の謂である。然し宗教に思想が無くれば宗教の命はない。

宗教が只現世利益を事とするならば、畢竟それは便利重寶なる道具に過ぎない。」と云はれてゐるが、その論に多少の奇矯の點はあるが、然し、思想を背景とせざるべからずとの見解に至つては余も又賛意を表するものである。如何なる思想をバックに持つべきかは今問題としないこととするが、神の啓示による教理が、人間の抗撃的となるやうな不合理性をもつてゐるものは、到底、總べての人間を首肯せしめるに足るものではないと云はねばならぬ。

殊に野口氏の云はれる治病が天理教の理想であるならば、天理教は全く非醫者の行爲を爲すものにして、これ官許なき行爲を爲すと云ふ點に於いて、道德にも背反するものであると云はねばならぬのである。そしてそれが天理教の理想だとすれば、天理教は誠に素朴的な形貌でしかあり得ないとともに、その幼稚なものをもつて、世界一の宗教であり、だめの教（最終の教）であつ

てこれ以上に他に宗教は生じない等と豪然と構へてゐるのは、腹が立つ前に苦笑せざるを得ないのである。殊に不思議なのは、病氣を癒してもらつた。神様は有難いと云つて拜むが、お医者さんが病人の病氣を癒してやつても、拜むことはほとんどないと云つてもよろしい位である。これよりも不思議なのは、病氣が癒つたからと云つてお医者さんには藥代や診察代ですむものを『ひのきしん』だの、『つくし』だのと云つて、家や田はまだしも、大方の財物を寄進するに至つては、神様の診察代や藥代は餘程高いものにつくと云はねばならぬのである。だが然し、こう云つたことを信者諸君は考へようともしない。ひたすら神様のみが有難いものとして拜んでゐる。これは信仰ではなくて盲信であると云はれても何んとも辯解は出來ないだらう。もつとも、辯解が出來なくて、辯解せずにあることが『たんのう』の精神で、前世の懺悔と神様から受取られるんだから結構な話しではあらうが、人間として辯解まで行かぬまでも、それ等の事柄を明瞭にするところが出來ないと云ふことは、教儀の宣布と云ふ旨に、反するであらうに、どうですかね、と問ひたくもある。

シンクレアがその名著「宗教の利潤」の中に、

「人が精神運動に熱中してゐる時ほど、そのポケットの内味を浚ふに容易いことはない。」

と云つてゐるが、天理教徒の實際の信仰ぶりと照合すれば一致する點のあるのは面白いではないか。(天理研究會事件のときの田島を賣り、又は商賣を了つて本部に寄附したと云ふ實例を参照してもらいたい。本書一七七頁——一九二頁)このことは後段に於いて更に申述べるところであります。が、天理教に於いても、信仰が熱烈になればなるほど、財産も家も、何もかも總べて神に返さんとする念の強くなつて行くのは事實であつて、これは余の力説せんと思ふ點である。その理由は實に巧妙なる教理に存するものであると斷言し得るからである。

第三引用例に於いて注意すべきは、野口氏の論文と相對應せる『谷底せり上げ』と云ふことである。第三引用例は、野口氏の谷底せり上げの結果を述べてゐるやうに思はれる。云ふまでもなく、谷底せり上げとは、下層階級を上層階級に近づけると云ふことである。

そして、第三引用例の筆者たる大平氏は漸次それが行なはれつゝあると云つたやうな口唇を漏してゐるかに見受けられる。それは、如上の意味に於ける自由平等が天理教の理想であり、神の希望であり、昔しより今までの社會進化、文明進歩は人權の自由平等化を伴ひつゝ社會組織の變更が行なはれてゐると云ふことである。御筆先きを引いて氏は語を續けてゐる。世界人類は皆兄弟である。だのに、今までは、高山(支配階級との意)が谷底(下層階級との意)を儘にしては

來たが、これからは月日(神との意)が今迄と變つて世に臨むから、下層階級を支配階級が自儘勝手にすることが出來たら、して見よ。そんなことはさせないぞとの意味がたつぷり含まれてゐるやうに思はれる。

かくして、結局のところ、全世界の人間をして、運命や性格の差別をなくする、そして人類の人格的價値を平等にして了ふのが神の理想であるんだと結んでゐる。

さて、以上の主旨をよく考へて見るに、出來そうなこともあり、出來得ないと思はれるものを見出すことが出來るではないか、如何にも氏の云はれる如く、下層階級の權利はやうやく認められるやうにはなつて來てゐるが、まだ、氏の考へるやうな平等と云ふ點までは至つてゐない。そればかりか、氏の云はれるやうな意味のもとに、天理教が社會にはたらきかけてゐるかが甚だ大なる疑問でなければならぬ。氏の云ふが如く、それほど神の理想であり天理教の理想であるところの平等の考へが重要なものであるならば、何故に天理教本部が階級的形態をもつて宗教界に臨んでゐるのか實に諒解に苦しむところではないか。

そればかりではない。天理教とて又それ自身一つの特權的ブルヂユア的階級に屬するものであることは、今日公平な眼より見て何等の不思議もあるまい。然るにそれが、民衆の味方と號して

ゐるのは、實に大なる錯誤と奸策を弄しつゝ、行つてゐるものであると云はねばならぬのではあるまいか。これ等の事實は明らかに下層階級と上層階級との階級的差別の撤廢とにも白日のもとに曝され、階級層の無になつたときには破壊され消滅すべき運命を荷ふてゐるものであると云はねばならぬ。今からでもおそくない！天理教本部を初め、天理教關係諸君よ君等の今迄の教理を有産階級にもつて行つて鼓吹し給へ。そして、下層の民には、君等が口癖のやうに云ふ教祖の雛型を體して本部並びに、教會の總べての財産を投げして提供し給へ。そうすれば、君等の所謂世の立て直しのあかつきには君等も眞に神の豫言を實現することが出来るだらう。何故ならば、そうすることによつてのみ、有より無に融通をつける唯一の機關となり得ることが出来るから。

そうでなければ、悔を千歳に遺すに至るかも知れぬことを余はこゝに注意して置く。と俱に、次に高津氏の忠告を参考の爲に紹介して置く。

「日本の宗教家が政治的に進出すればブルジョア政黨に味方することが必然である。然るに無産大衆の勝利も早かれ晩かれ必然である。其時勝利者たる勞農大衆は宗教家をどう裁くであらうか？是は考ふべき重大問題である。既成教團内にも幾多新人がゐる筈である。諸君がせめてその集團の反動性を稀薄化することに努力されるならば、それは單に人類解放に對する貴き奉

仕たるにとどまらず、諸君の同族の將來を明るくするものであらう。」

と云はれてゐることは、深き味識を天理教々徒諸君に乞ふものである。

も一つ述べて置きたいことは、現在の天理教の教會組織であるが、これは誠に巧妙な共産的形態を取つてゐると云つても過論ではあるまい。

「當分教會（東本分教會）常詰めの布教師は四十五名ばかりゐる。そしてその教師の食扶持は教會で支給する。」（第二四〇號『道の友』二十一頁）

と云つてあることによつても分ることであらう。次のやうな世評もある。ついでだから紹介して置く。

「D、現在天理教は文部省が問題にしてゐる。さうして、潜行的の共産黨のやうなもので却々潰れない。

C、共産黨の思想をもつてゐる。下村前宗教局長が言つてゐた。却々潰れぬ。どうしても宗教法案を作らなければならぬと。

E、一體天理教は共産黨でないか。

C、金持のところへ行けば腰節強くあたって、金を寄附させる。尤も生温いやうぢや安々と訊かないから。

三六

G、彼等が上手な手段で行くから財産家も折れて仕舞ふ。さうして今度は有難いと云ふことになる。脅迫すると云ふことより神の罰を受けると云ふ風にやるだらう。

A、勿論、體よくやるさ。

G、例へば斯う云ふことを云ふ、肺病がある。肺病患者は大抵金持の者で非常に綺麗だ、表面は非常に綺麗だが腹の中は腐つてゐる。惻口だと云ふ。此の智識階級の間に肺病の多いことはそれだ。それは神さんの手入れである。罰を受けるのである。さう云ふ顔付きの綺麗なもの、外面の綺麗なもの本當は腹の中が腐つて仕舞つて斃れてゆく。神様のお手入れである。立て替へである。悪るい人間は罰があたつて死んで仕舞ふ。立て直しがある。それだから悔改めよ。財物は罪の塊りだから出して仕舞へと云ふて説く。

E、天理教を信じて皆んな財産を上げて仕つて愈々食ふに困るやうになつて、儲て翻つて天理教に入つた當時から考へて自分の財産の有た方が好かつたと後悔するものは無いでせうか？  
F、無論ある。あげた當時は教會が養つてゐるが、暫くすると色々の理由を附けて追ひ出す。

これで路頭に迷ふと云ふことになる。(昭和五年一月發行「宇宙」誌四六—四七頁)

まあ、こう云つたやうなものである。ひのきしんさせて、金や財産をなげ出させて、それを教會に集まるものが費つて、そこで共産的な生活を爲す爲めの基本財産とし、もう財産がないとなると追逐すると云つたやうな譯合ひである。

だから田中豊洲氏は次の如く憤慨してゐる。「斯の如き混合教が國家からは獨立の宗教と認められ、多くの愚婦愚夫からは主宰の神の如く創造神の如く崇められつゝ、その尊崇せる教師信徒の膏血を吸収するのみならず、現在の祖先が子孫の爲めに又家系の爲めに遺せる山林田畑家屋敷を始め、七珍萬寶と妻君、娘、爺々婆々を擧げて財團法人天理教本部の囊中に收めんとし、遂には我帝國の基礎を覆へし、世界の各國に浸入して世界に天理王國を現出せんとする非望を企圖するに到りぬ。

實に恐るべき邪教天理教である。彼等が常に説くところは、天理大神に對する絶対服従である。架空の神である天理大神は、何等の命令をも出さないのである。命令を出すものは天理教廳本部である。所謂、本部の命令に教師信徒は絶対服従者であることを強ひるのである。彼等の天理人道なるものは多少にても、勞働の上に物質の上に盡し運ばし(無報酬で働らき

三六

金を寄附すること) 得ると見ればその手段方法を論ぜず。盡し運べを要求して止まず。此の盡し運ぶ事をのみを以つて天理人道にかなつてゐる者と見做してゐるのである。故に若し信教徒にして盡し運ぶ資格無きものと見れば、如何なる境地に彷徨せる人間を見るも、之れに一顧をも與へない輩の集團である。困苦缺乏に沈める同胞を見るも、死に瀕せる疾患者を見るも、救済的の同情を拂はないと云ふことを以つて友誼なりと心得てゐる輩である。」  
と痛論してゐる。語や少しく烈しきと雖も、天理教の弊害を喝破し照破して餘韻なしと云つてもよいのである。

實に、働けくのかげ聲は彼等天理教に取りては非常に便利であり。又無くてはならぬものであるけれども、民衆の爲めには誠に、強敵であると云はねばならぬのである。これとても、今日の有産有閑階級に屬するものに強ひてこれを貧民、弱者、劣者、不具者、不幸物に流通して一人でも浮き上がらせる算段でもすればまだしも、如上の人々の常として救ふと云ふものには藁をも握らんとする人間の弱點につけ込んで、彼等のもてる最後の一物までも搾取しようとする事實を見せつけられる誰れでもが、之れに對して反抗の意識に胸を燃さぬものが有るであらうか？若し有るとすれば、それこそ人間にあらざる動物なりと云はねばならぬのである。

勞苦と貧窮との根城の上に立つて犠牲にあまんじさせ、病氣を手入れた、因縁引寄せたと喜ることばせて生涯を迷妄の間に終る。天理教被搾取階級は、總べての、ひのきしん(無報酬的勞働、金錢寄附)の代りに何をもらつたが？それは、神樂歌と舞踊とより滲み出る、無理強ひの安心、はかなき諦め、一度吸ふならば骨髓までも滲み込まねばおかぬ激烈な阿片に過ぎなかつたとは、あまりにも情けなさ過ぎはせぬか。

こゝでも余等は宗教天理教が商賣屋天理教となれる醜にくい姿を目のあたり見せつけられたに過ぎなかつたのである。斯る商賣屋天理教に對して余の如く批判を爲すのが天理教の敵となるべきものであるか？それとも中山ミキの眞意を教ふるものであるか？余は敢へて天理屋に借問し置く所である。無智識階級、無産者階級を天理教の踏み臺とせるは幾多の理由の爲めではあるが、其の結果として、それ等を踏み臺とする爲に、それ等よりの經濟的寄進を得ることによりて非生産的消費者群を造り出したに過ぎない。彼等がそれ等力なき階級層より有難がらせて捲き上げるばかりでなくして、捲き上げるものと、捲き上げられるものとの芝居の幕合にうま／＼漁夫の利を占めてゐるものがある。それは、言ふまでもなく搾取階級の人々である。よい因縁と埃りの滅去と、來世の惡因縁、身上事上の障りを説いて善男善女を睡眠の世界へと導びいて行く。斯くし

て、民衆が漸次に眠るに従つて、得たり顔で搾取階級は經濟的搾取を行ふのである。かくして、天理教は現代に於いて最も出色せる『阿片賣買業』の役を立派につとめあげてゐる。天理教屋發展！商賣繁盛！成程天理教屋に取つては天理大神は有難い神様な筈だ。だが、民衆の爲めには悪神でこそあれ、決して善神であり、福神ではあり得ない。

## 九、醫家の注意すべき天理教の病理觀

人間は病の器と云ひ、病ほど辛いものはないと云はれてゐる如く、病氣になる誰れもが大變な苦痛を嘗めるのは今更喋々を要すまい。

だから、病氣になれば、誰れでも早く癒りたい。よくなりたいと思ふのは、人間性の必然である。病氣を患ふ人が醫者を頼りにするほど、醫者を信用するほど眞面目な態度は普通には一寸見受け難いものである。なぜかつて、早く全快したいと云ふことが人間の本能である以上、何んでもよい。癒して欲しい。この苦痛を取つてほしい。と思ふのは言はず人間の弱點と云つてもよからう。人ありてこの弱點に乗じて、不當なる利を貪ほるものがあつたとせんか、それこそ人道上無視することの出來ぬものであると云はねばならぬのである。

我々はこの人道上無視出來ぬ形態を天理教に見るとは實に不快に堪えぬものである。

けれども、天理教はこの人間の弱點の存する爲めに今日の財産を爲したことを思はゞ、天理教に取りては又こよなき大切な事柄であると云はねばならぬのである。

それ故この一節は反對者よりは天理教の缺點を指摘する資料を、天理教の如き側面に立つものには、その致富的方法を知らせることが出来るものである。

さて、天理教の病理觀はと云へば、云ふまでもなく神よりの力を授與されることであるが、その神から借用する力の授けがあるか否かは、人の心の持ちやうによりて條件づけられたものである。つまり、人の心次第で神は病氣を癒すかどうかを決定するのである。ところがこゝに、見逃してはならぬ陥穽の存するは、心の持ちやう如何によつて神の恩寵が下ると云ふ思想である。如何となれば、心の持ちやうの善悪は外形に表らはさなければならぬ。神が眞にあるものであるならば、心の思念だけで事足るのであるけれども、患者對教師となれば、そうは行かぬのである。教師は神様ではない。だから心の表はれとしての何等かを要求するのである。そこに後述するであらうやうな危険が、患者の方には伏在してゐるし、教師の方つまり天理教側の方には搾取に都合がよい條件を持たせるのである。

盲信者はこう宣傳してゐる。

「世に病を持つ人達よ、寸時も早く天理神様に依りて眞實の神のみ胸を悟られよ。然らば如何なる難病強病もたちどころに癒やさるゝのである云々」(昭和二年十一月發行「みちのとも」六五頁)

如何なる難病も強病もたちどころに癒やさるゝとは、一寸面喰ふではないか。それは迷信だとして笑ふべきことではない。新聞あたりの廣告を見ても大抵はこんなものだ。それなのに、薬が賣れて一代身上を作つたものもあれば、大變發展してゐる何々商會もある。それによつても、溺るゝものは薬をも握るの病人の弱い心理に喰ひ込んでゐるものが、どれだけ澤山この世の中にあるかど窺はれるではないか？

天理教も、天理屋開業はこうして弱點をぎうと掴んで、好い汁を吸つてゐる一の商賣なのである。

順次に天理教屋の御説教を眺めて行くことにしよう。種々なもつともらしい。しかつめらしいお説教が術學的な口唇で語られてゐるのが見られ、その後ですぐ、辻褄の合はない理窟を捏ねてすまし込んでゐるかが知られるだらう。

「十トこのたびあらはれたやまひのもととはこゝろから。

此の章の大意は我等疾病の本源は多く心の所造なることを示されたるなり。

このたびは教祖の教を宣布し給ひたる初を言ふなり、やまひのもととはこゝろからとは疾病の本源は心に在りと云ふ意なり。

疾病の本源は心に在りと云ふを以て一の天啓とせられたれば、心と病との關係に至りては今日醫學が既に發見したる理法の外更に一層緻密の關係あるを知るべし。今述義者の意を以て之を解説せんに、上に一言したるが如く多くの心理的苦痛は變じて生理的苦痛たらんとする傾向あるものなり。是蓋し心身關係の理法に基く者なり、かの八個の欲塵は皆是第一には心の苦痛を生ずる原因にして轉じて又身の苦痛を生ずる原因なるを知るべし。然れども是多くの疾病に就きて云ふものにして、總べての疾病に就きて言ふものにあらざるべし。何となれば疾病の或るものは外界種々の禍と同じく自然界の苦に屬すればなり。我が天理教は一大宗教なり。精神界の大革新を以て自ら任ずるものなり。罪惡及び禍害を擺脫するを以て目的とするものなり。豈世間の醫に代りて疾病を治療するを以て事とせんや。もし我が天理教を以つて或る意味に於ける醫なりとせば、醫の醫なりと稱することこそ適當ならめ。何んとなれば我が天理教は神の

恩寵によりて罪惡及び禍害の本源を斷除するを以て目的とすればなり。然れば罪惡及び禍害の外に發生し人力を以つて排除すべきものは之れを世の國家に委託するが如く疾病の現に發生し世間の學術によりて治療すべきものは之を世の醫業に委託するものなり。要するに人力によりて排除せらるゝ罪惡及び禍害は人力によりて之を排除し唯人力によりて排除すべからざる罪惡及び禍害の本源は非人力的救濟即ち神の救濟に依頼するなり。是の如くなれば、疾病既に生じて醫藥を用ひるを教徒に禁ずる如きは獨り國法に觸るゝのみならず、神の救濟を本領とする宗教として斷じて之を爲すべきに非ざるなり。」（「御神樂歌述義」一四三——一四五頁前管長中山新次郎氏著）

この例と前の例とを比較すれば、實に面白い對照を見得ることが出来るではありませんか。前者は實際の信者の叫びであり。後者は形式的にその筋の人に見せる爲めの文字の羅列であることがだれにでも看破することが出来るでありませう。これによつて、形式的のことがらと、實際天理教師が布教してゐる實踐的教説とは大違ひであると云ふことが、理解されることが出来るのである。

そして實際には、信仰が進めば進むだけ醫者にかからむとするものが少くなると云ふことが分るのである。一例をあげるならば、

「先生の御話しには神様一筋にもたれるのならば藥も醫者も止めてはどうですか、成るほど藥も醫者も神様の御思召で出來てゐるのでありますから必要ですが、それより直接親様の御守護が良ろしいでせう。」（「みちのとも」第三十九卷第十七號八二頁）

「大患の病人が云ふた。醫師はいやです。死んだら診斷書を書いて呉れますから心配はありません。どうか一心に願ふてください。いくら勸めても醫師は嫌の一天張り、そのうちに吐く、瀉すで實に寒心せずにおられぬ。その翌日もその又翌日も。三日三夜それでも本人の一心と側の一心は、とうとうさしもの大患もけろりとして、お蔭様でその後益々健全となつた。」（椿卯之助氏著「このころ」二〇八頁）

と云つてゐるが、これにて明かな如く信仰……こうなれば盲信だが……に熱中すれば醫者や藥が不要と云ふやうになる。これは教理の解釋がそうさせるのであつて、これによつても、前管長



中山新次郎氏の前記の釋明は表でた言ひ譯で、實際は醫者にもかゝらずして死んで行くものが非常に多いと云ふことに想到しなければならぬのである。このやうな熱心さにする教理の大體は漸次述べることにするが、こゝに注意せねばならぬことは、醫家がこれ等の現象に對して、我れ關せず焉の態度を取られるのは如何にも齒痒ゆい次第ではないか。醫家とても今日の不景氣に崇られてゐるとは新聞の報ずるところである。何故かと云ふに、それはあまりに民衆に對して冷淡であるが爲めであると云つてもよからう。藥價が高い。貧民階級にはとうてい手がとどかぬ。貧民はそれ故安價な祈禱禁厭に走るのは當然であつて、人情の然らしむるところであると云はねばならぬのである。それだから、醫者にかゝりたくとも金がない。金が無ければ醫者は相手にしない。今時の醫者には仁術の仁の頭もないのが九分を占めてゐると云つてもよい。醫學校に入學する目的も濟世司命の大理想の爲めではなくて、職業にあぶれない比較的安全な職業だ、割合に就職難が少ない、だから商賣として現代にはもつて來いである。こう始めから打算的に出てゐるのである。學校の月謝は商賣の資本の一つである。こんな職業意識で修める學問に眞劍味の無いのは云ふまでもなく、従つて職業的方面にばかり頭がうごく、研究心が欠ける、物質的にのみ發展して精神的教養が甚だ薄つべらである。患者に對しては現金主義になり、金があればつきつきりでも治療に

従事する。無い脳味噌を絞つても處方する。いやはやあきれはてたものと云はねばならぬものも、随分あると聽いてゐる。これを宗教家は物質文明の弊害だなどと批難するが、この點は的をはずしてはゐないやうだ。余は人類人道の爲めに、現代醫家諸君に跪拜三拜して希むらくは、願はくば昔しの醫家の如き態度に出でられむことをと歎願する次第である。

若し醫家諸君にして貧者を顧りみなかつたならば、國民をして迷信邪道に追ひ込む一つの誘因を與へるばかりでなく、引いては諸君のドル箱を他人に取られるの結果に終るのである。併も諸君は頭腦的にも肉體的にも物質的にも患者に提供するところがあるが、天理教式治療に至つては以上の總べてを具備してはゐないのである。そればかりか、諸君に對しては藥代として一定通りのものを出す、信仰によりて治療せんと思ふものは、全財産までも投げ出してかゝるものもあるのである。これは國家の施設に於いても充分考量を要すべきところであると思はれる點である。

その實例を紹介すれば、

「飯料は當方から出さして頂く約束を致し尙ほ心の印として負債の中から百圓勤めさして頂いたであります。それから三日を経過して、大神様の靈驗は鮮かに現はれたのであります。奇跡？ 何と云ふ御慈悲の暖かき事よ、今迄ハシさえも持つ事も叶はなかつた右手が、ツチを振

つて自由に仕事が出来るまでに御守護を頂く事になりました。」(「みちのとも」第三十九卷第十七號二八頁)

二八〇

と云ふことがある。この引用文の前に、手の筋が切れ鉋創の爲めに、神に願つたが癒らなかつた。が百圓出したら、以上のやうに三日にして癒つたと云ふ、天理教の神様を有難い〜と信仰する靈救の經驗談であるが、これを見て醫家諸君はどう思ひますか、百圓はおろか二百圓でも三百圓でも出せと云へば出すのが病人の心理状態だ位は醫家諸君たるもの先刻御承知でせう。殊にその方ばかり研究してゐる人に於いてをやでありませう。これ等の病人はただ、あなたの病氣は癒る引き受けたとさへ云へば、安心して盲信していくらでも出すものである。もう一例引いて見やう。「その信者と云ふのは永年の肺病で既に醫者に手離れ死に直面してゐた。その分教會長は死を前にした最後の心定めとして、上級某大教會の神殿改築への寄進を説いた。そこでその信者は、『二十萬餘りの財産しかないが、スツカリ神様の爲にお供へしませう。よし、助かつても助からないでも……然しお尋ねしたいが、その盡した後は一體どうなりますか。』との返事であり、質問であつた。その會長さんは、『盡した後は各自の因縁を自覺して苦勞をするのだ。』

と答へた。そこでその信者は

『苦勞、苦勞はもういやです。盡しても尙その上苦勞をせなければならぬのであれば、もう盡すのは止めませう』

と答へた。そして暫くしてから、

『嘘でもよいから樂をさしてやると云ふて下さい。』と云ひ、

『私にはもう何事も云ふて下さるな、これ限りお断りするから』と断つた。(昭和四年八月五日發行「みちのとも」二八頁)

これによつて見てもどんなに病人の要求が自分の病氣からのがれたい欲念に燃えてゐるかが、亦その要求を満足させるものがあればどんなものでも自分の財産を投げ出してもとの心構へがあるものだ云ふことが理解されるではないか。それと同時に、病人のこうした弱點につけ込むところが、どんなに容易であり、且つ、病人に本當のことを話すよりも治るか治せぬか明確に判断が出来ないまでも『治る治る』と軽くうけあふことが嬉しがられ、有難がられるかと云ふこともわかるではないか。天理教は實にかゝる弱點を捉らへ、搾取を行ふて平氣でゐるのである。醫家諸君もこの點に留意せねばならぬのである。

さてこうした風に出させるにはどう云ふ風な思想を吹き込んで置くのであるかと云ふことについてお話しを進めて行くのであるが、これは、前節に亘つて述べて来たことを應用すればよいのであつて、云はゞ、因縁、借物貨物等の理をチヤン、ボンに組み合わせせて説明とするのである。彼等天理教屋はどう云ふことを云ふか聴くことにしよう。

「埃りがこりかたまつた時は長く神様の、さんねんりつぶくは、いざり、めくら、つんぼ、おし、らい病となつて現はれるのであつて、前世今世の因縁であるが、前世が多い故これは盡した結果でなければ根を切つて、頂くことが出来ない」(第三十九卷第十七號「みちのとも」六頁)とまあ、云ふてゐる。心に埃りを積む、それが病氣として身上(肉體)に表はれてくる。そして引用文にあるやうな、いざり、めくら、つんぼ、おし、らい病等は前世の因縁だ。だから、盡す(教會に金を又は財産を寄附すること)をした結果、つまり無一文にならなければ助からぬと云ふのである。

「天理教の特種の新人生觀の一つは、一切の生理的故障は心理的故障の反映であると云ふ所謂精神的病理觀である。

人間は從來疾病の器としては作られなかつた。其の疾病の器として病床(教祖はこれを布園牢と云つた)に呻吟しなければならぬのは其の者の精神に於いて天理人道と合はぬ不自然な精神があるからである。」(大平良平氏著「天理教より見たる人生の意義及價值」一五一頁)

とあるを見れば、人間が病氣になるのは、人間の心が悪るいからだ。それは天理教の教へに従はず、不自然な精神があるからだと云つてゐることとなる。それからまだ面白いものがあるお目にかかせよう。

「それから二、三ヶ月を経ました。が、病は一寸の變りもありません、其の旨を先生に申し上げますと、

『そうそれでよろ。』

との返事でした。

『それでよいとはどんなことですか。』  
と尋ねますと、

『貴方は病氣が治つたら直ぐ學校へ行きたくなるでせう。急に結構頂けないと云ふ事はその精神があるからだ、神様はしこみたい爲に身上でひつばつてゐて下さる。それで萬事よく聞

き分ける様に』とおさとしになりました。」(第三十九卷第十二號「みちのとも」五頁)

とあるにはいさゝか面喰ふではないか。神様は學校へ行つて勉強をするのを好まない。それどころか、しこみたいと云つてゐる。しこみたいと云ふのは、天理教々師にしたいと云ふことである。(この場合は)斯くして癒つたら學校に行つて勉強しようとする青年を天理教々師即ち非生産的消費者群、不勞所得を食ふ一人とする爲めに、病氣にして苦しめるとはどこまでも勝手な神様ではないか。かゝる神がもし實在するとせば、余は我國の八百萬神に祈願してかゝる有爲の青年をして徒らに非生産的事業、それも文化に貢献するところあればまだしも害にはなれ益なき天理教屋の一人としよう等とする神を、邪神悪神の張本人として我が大和民族から退去を命ぜねば止まぬのである。學問はさせずして病氣にして置き、向上心を無くしてそれでよろしい、萬事それでよいとは、そう云つて聽かせる教師も教師だし、どうにかした調子で、病氣が癒つたと有難がつて報告する熱心がりやも熱心がりやだ。それをまた取り上げて、神様の靈救にかこつけて、その及ぼす弊害も考へずに、天理教本部の機關雜誌の中に憶面もなく載せて、これによつて神様が病氣を癒してくださるんだぞとの宣傳になると思ひ込んでゐる編輯部の人々も人々ではないか。もつとも、天理教から見れば教師を造るには、天理教の本部にある教校に入學せねばならない。

教校に入學するには無一文では行かぬ三ヶ月位で餘程の金が入用だ、その金は本部に入るんだから、腹工合はまんざらでもあるまい。儲る仕事なら少し位い辻褃が合はなくとも、理窟に外れてゐても、言つてのけるのが天理教の特色だ。下手に理窟でも云ふものなら、理性を超越した天啓の教は不可思議なものであり。超自然的のものであり。神秘的なものだ、理窟などにかゝるものではないと空嘯いてゐるが、これほどわけのわからぬものはあるまい。天啓については前段(三十六頁)に詳述したからこゝでは述べぬこととするが、神秘とは神の秘するところで、人間の知るところではない。人間には解りつががないのだ。これを解し得る等と思つてゐるのは、それこそ飛んでもない間違ひだ、神を冒瀆するも甚だしいと云はねばならぬ。こう云ふと、天理屋特異の論陣を張つて、次のやうに云ふのは見え透いてゐる。

「如何にも神秘はそうした意味であるかも知れぬ。だからこそ、教祖が神憑して、神のお聲をのこして下されたのだ」

と云ふに決つてゐる。天啓を擔ぎ出す手合はまあ大抵こんなもので、似たり寄つたりしてゐるものだ。ところが教祖はこんなことは云つた覚えはあるまい。今日の天理教は教祖の眞意を繼承してゐるか!教祖は(今偉いものとして論ずれば)精神的にも物質的にも、今あるやうなことを

希んではゐなかつたと云ふことは、次の言葉で明らかではないか。

「御教祖様が御逝くなりになる前に墓はこゝかいなあと分る位の程度にしておくと仰言つておられました」(第三十九卷第十二號「みちのとも」一八頁)

を見ても分るだらう。教祖のこうした、心根の奈邊にあるかも知らずに今日の外形的の發展は何を語るか。これ明らかに教祖の願はなかつたところを以つて、奇貨借くべしとなして喰ひ物にしてゐるものではないか。余をして教祖中山ミキを宗教的天才の一人なりとの前提より論ぜしめるならば、現今の天理教は教祖の意志を繼がざるものなるものありと云はざるを得ないのである。教祖が「里の仙人」を説けるのを以つてして決して生産的職業を離れて、非生産的消費者群を造れとの意志が有つたとは如何にしても考へることが出来ぬではないか。更に、不可思議とは思議しべからずであり、これを斷ずるは憶斷であり空想であると云はねばならぬものである。又超自然的等と云ふが、これとても吾人の頭腦外のものたるは云ふまでもない。これ等の吾々の思議し得ざるもの、吾々の頭腦外のものを以つて明かなりとし確かなりとするは盲斷であり、無反省のものゝするところであり、文化の爲に實に憂ふべき現象であると云はねばならぬ。更に注意を要するは、思辯的(理智的)なものを作ることの不利なるを悟つてか、

「教師は餘り思索的に行くよりやはり助け一條で行かなければ駄目だ。」(昭和四年五月號「みちのとも」二五頁)

と云つてゐることによつても知ることが出来るだらう。斯くして、有爲の青年は失望して出で行き、現在の教理に満足するものゝみがのこり、形式的となり従つて熱心味なく彼等のあるものをして次の歎息を洩すに至らしめる結果を來したのである。

「近來不思議な御助けが少くなつたのは、遊民に等しき教師が多くなつたからだ。」(第三十九卷第十九號「みちのとも」六六頁)

と云ふことによりて容易に知ることが出来る。そして又、教内にあるものでも、非生産的消費者がゐること、不勞利益を貪つて安逸にふけつてゐるものゝあることに氣づいてゐる者があると云ふことは、遊民に等しき教師が多くなつたと云ふ上例の語句によりて、いともたやすく知ることが出来るではないか。

病の元因は心からだ。病を起すやうな心は惡因縁を積んだからだ。惡るい埃を積んだからだ。それだから神が立腹して病氣にするのだ。と説くのを定石とする。次にその主張を見よう。

『知らしたら、あらはれでるのは氣のどくや、いかな病も心からとて』(二四號)

二六

『病とてせかいなみではないほどに、神のりつぶく今ぞあらはす』(二五號)

『いま、でも神のゆうこときかんからせひなくおもてあらはしたなり』(二六號)

教祖の御長男秀司先生は性質善良にして教育あり、決して世間から見非議すべき人ではなかりしも教祖から見給へば、神の御意に合はぬところがあつたが、そのうちに先生は足疾を煩つて、其の痛みが劇しくなつた。而して教祖は秀司先生の足痛は神の御意に逆つた罰であるとおさとしがあつた。即ち『神の立腹今ぞあらはす。』といふ此の神の御諭しは中々きびしいのである。

併も秀司先生の足疾について、教祖は人間一切の病ひは其の心遣ひが神の御意に違背するから發生する。換言すれば人間一切の病は罪惡の結果であることを、いかに始めて示し給ふた。惡因病果の御さとしは實に最も重要な天啓である。此の天啓を疑ふものは到底眞正の天理教徒に

はなれない』(中西牛郎氏著「神の實現としての天理教」一五八——一五六頁)

秀司先生がほめられてゐる。秀司先生に對するおさとしを人間一般に對してのおさとしだとしてゐる。天啓の教へであると例の癖が出てゐる。ところが、秀司先生はそんなに立派な人か、中西氏は氏の著書に於いて次の如く云つて置いてある。

「これからは心しつかりいれかへてあくじはらうて若き女房」(御筆先第一號六五)

是れ秀司先生が四十九歳にして、平等寺村の小東氏から、十九歳の松枝子を迎へて正妻とされた事實に關しての神諭なれども云々」(同書一六二頁)

と云はれてゐることによりても明らかではないか。教祖の御筆先によりても窺はれる如く秀司先生四十九歳までは放埒はしないとしても、心をしつかりしてゐなかつたと云ふことは確かである。中西氏が秀司先生の提灯をもつて、性質善良にして教育あり。決して世間から見非議すべき人ではないと云つてゐる。が四十九歳の新郎(?)と十九歳の新嫁との夫婦は果して氏の所謂、世間から見非議すべき人ではないだらうか?三十違いの夫婦。どう見ても何か譯がありさうではないか。こんなことでも、天理教は勇敢にそれは因縁だところ云ふのだ。人をして他の人を欺むかせるばかりでなく、自己も又自己を欺満して阿片に陶醉してゐる、あはれむべき偏執病の卵

がこゝにも見られるではないか。笑つてはいけない。かゝる偏執病の悪因縁は天理教流に云ふと一體何んなことをしたのか(?)と余は借問して見たいのである。又こう云ふことも云ふ。

『どのやうな、た、み、な、や、み、も、で、け、も、の、や、ね、つ、も、く、だ、り、も、み、な、ほ、こ、り、や、で』(御筆先第四號二〇〇)

人間一切の疾病は其の身體機關の不規則的狀態である。而して世間の醫學は此の不規則的狀態を物質的原因に歸する。既に身體機關の不規則的狀態を物質的原因に歸する以上は、これを治療するにも亦物質的手段を以てせねばならぬ。これ種々醫學の由つて起る所以である。天啓の教も亦決して醫藥を否定するものではないが、併し元來人間の身體は神の貨物であるから、我等身體の自由用は、即ち神の自由用であつて我等自己の自由用ではない。蓋し救濟期後にあつては、神は我等を罪惡から解放せしめんが爲に、罪惡そのものが即ち疾病の原因であると教へ給ふ。

此に於いて世間の醫學原理は根柢から覆へされたやうであるも、これ又決してそうではない。救濟期前に於いては、疾病の原因は物質的とのみ思つてゐたから、その療法も又物質的でなければならぬ。救濟期後に於いても亦一切疾病の原因は悉く道德的のみではない。併し神が既に我等をして罪惡から解放せしめんが爲に、罪惡其の物が即ち疾病の原因であると教へ給ふ已上は同一疾病でも誰れのは物質的原因であるが、誰れのは道德的原因である。かといふことは容易に見分けの附くものではない。ただ、これと云ふ物質的原因無きに、俄然發生するが如き疾病の如きは、全く神がその人をして改悔せしめ、或はその人をして道の用となさんが爲めに誘引の法を施し給ふたのである。

要するに救濟期後の疾病は神が天啓の眞理、即ち人間の身體は神の貨物といふ眞理と靈救の恩寵、即ち人間をして罪惡から解放せしめ給ふことを知らしめ給ふ誘引の法であれば、救濟期の疾病からこれを區別せねばならぬ。(中西牛郎氏著「神の實現としての天理教」一九四頁)

氏の如上の論文を見て先づ第一に心に留るのは、氏が今日の醫界に於ける病理觀、又はビボクラテース氏を鼻祖とする西洋醫學、素問靈樞を最も古い典籍とする東洋醫學、即ち皇漢醫學の疾病觀及其の變遷を知つてをられるかどうかと云ふことである。

如何にも今日醫科學は物質的治療法だとの叫びは巷間に満ちてはゐるが、その叫びをそのまま受け取つて、物質的療法は物質的原因より起る疾病を治するには適するが、心理的病氣を治するには適せずと直ちに推論するは甚だしき色盲であると云はねばならぬ。又ある天理教學者が、信

仰を以つて病氣を治すことが天理教が始めた、等と稱してゐたものがあつたが、これも又不見識無學も甚だしいものだと言はねばならぬ。支那は傳説ではあるが黃帝の時代に既に一家見を醫療にたてゝゐたことが知られるし、平安朝時代に、丹波康賴の撰せる醫心法第二卷の卷末にはとつくの昔しに心理療法のことが書いてある。又佛典即ち大藏經とか一切經とか云ふものゝ仲にはこれ等心理的療法は枚擧に遑なきほど記載されてある。これ等を知らずに世の薄つべらな俗學的聲に和して現代醫學は物理療法だの、天理教が始めて心理的療法をやり出したのだと云ふは、實に俚言の「盲者蛇に怖ぢず」式勇敢者であると云はねばならぬのである。余は不遜であるが教へて置こう。少くとも疾病を論ぜんとするものは、醫學博士富士川游氏著「日本疾病史」「日本醫史」か又は著者名を忘れたが「世界醫學史」でも讀んでみられることを必要とするのである。次に不思議に堪えないのは、これは前にも述べたことではあるが、神が、疾病を下してその心得違を矯めんとするはよいとしても、人をして天理教に入らしめる爲に病氣にすると云ふのは如何にも合點がってんの行かぬ神様だと云ふ事である。何も病氣にしなくとも、神様の萬能をもつて苦しめずにくらでも道に引き入れることが出来るではないか。何も自分が見込みをつけて、これではと思ふものを苦しませるにはあたるまい。人間ならば、これは使へそうだから、本當に使へる人間か

どうかと試めして見てから、本當に使へる人間だかどうかが解つて見込み通りだからと云ふこともあらうが、萬能にして三世を洞察する神が人間の心が分らぬ筈があるまい。して見れば、病氣を興へて人間を苦しめるにもあたるまい。こんなことは分り切つてゐることではあるまいか。だがこれが分らぬのが天理教徒の天理教徒たる所以で、阿呆になり馬鹿と云はれて持つてゐるものを取られて有難がつてゐるものとしては當然であらう。が國民として一般民衆としては誠に残念であり、又一面憐れを催はさざるを得ないのである。

我等の自由用のところにも矛盾があるが、今はそれを問はぬこととする。が、最後に、大變をかしく感ずるところを指摘して見やう。それは、實際のところ精神的原因があるにも拘はらず、その原因は物質的とのみ思つてゐたから、その療法も亦物質的でなければならぬと云はれる中西氏の言葉である。これは、丁度五尺の男だと思つてゐたからと云つて、三尺の童兒に五尺の男の着る着物を無理矢理に着せねばならぬと説くのと一般であつて、普通のものゝ考へ得べからざるところであつて、獨り天理教徒間に於てのみ通用する理屈であるかも知れぬ。

さて天理教に於いては病氣のとは心がらである。惡因縁を積むことによりて、埃りを積むことによつて病氣は出來てくるものと教へる。そしてこれを教理の根本信條としてゐる。今二三



の所謂神言なるものを引用してお目にかけてやう。

「人間に病といふてなければども此の世はじまり知りたるものなし」

「このことを知らしたいからだんく」と修理や肥料に醫者や藥を」

「何にても病ひ痛みは更に無し神の急き込み手引なるぞや」

「世界中何處が悪しきや痛みしよ神の道教せ手引き知らずに」

「此世に病と云ふてない程に身の内障り皆思案せよ」

「何にても病といふて更になし心違ひの道があるから」

「思案せよ病と云ふて更になし神の道教せ異見なるぞや」

「一寸したる眼の悪しき腫物や上せ痛みは神の手引きや」

「今までは病と云へば醫者藥皆心配をしたなれども」

「これからはいかな六ヶ敷病でも心次第で直らんでなし」

と云つてゐるのは正しく萬病は心に原因すると云ふ思想が出てゐると云ふことをどうしても否定することは出来ないではないか、こんな調法なものをのこして行つてくれたから（このことについてはいづれ機會を見て述べることにしよう）これを利用して喰ひものにする游民に等しい天理教々師を現存せしめるに至つたのである。それ故ミキ婆さんも悪因縁をのこした一人である。彼等が最も悪く云ふ牛馬にならねば幸である。（牛馬を以つて最も罪深き因縁を作れるものとする）天理教教師諸君、君等は牛や馬を食つてはいけませんぞ。君等の教祖様がござらつしや、かも知れぬでな、教祖でなくとも、人間があるんだから。ところが實際は牛馬を喰ふものが大部多いのには余もいさゝか驚ろく。多分牛馬は人間に食はれることによつて、白因縁を積み來世は

人間にでも生れて来ると云ふやうなものだらう？

天理教は病氣に對してこう云ふ原因があるとの解釋をつけてゐる。次に紹介して置くが、これが金を捲き上げるについて非常に大切であることは、余がこゝで更に云ふまでもなく明らかなことであらう。

「肺病は潔癖で高慢で強情で貧慾で表面の體裁と内部の精神と一致しない我儘の性格にある。癩病は金錢、縁談、義理、人情を切つてく切り捲り、人の嫌がることを仕盡した結果のものだ。」

胃病の根本原因は天の與へ（金錢ばかりが天の與へではない。衣食住、職業、地位、名譽、父母、兄弟、妻子、眷族、朋友、師弟も亦さうである）を不足にして彌が上に貪らんとする強慾心に基づくのである。

腦病は高慢心の過度に歸因する。

心臓病は偏狹にして人と物とを容るゝの度量のない爲である。

一、盲（聾）

二、中風

三、癩病

四、瘰

五、癆咳

六、啞

七、咯

八、疔

の八つは前生持越しの因縁病（業病）と云つて八埃の中に於いて最も大きい埃としてある。」

大平良平氏著「天理教々理より見たる人生の意義及價值」六五——六六頁）

こうである。埃りが積れば病氣になる。縁談や義理を切れれば癩病になる。衣食住を不足に思へば胃病になる。高慢すれば腦病になる。神様がこうするのだ。悔い改めさせる爲に、神の道に引き寄せる爲に、まあ何んと恐ろしい神様ではないか。それだから天理教々師は、心臓病の信者があるとするれば、あなたは偏狹だとして人も物をも受け入れる度量が無いから、こんな病氣になるんだと患者に説きかすに至るのである。

これ等を見ることによりて、どれだけ病人の弱點に喰ひ込み易い教理であるかが首肯されるで

はありませんか。

ところが、この論理を押し進めて行くと大變な結果を齎らすものである。これは病氣は悪いんねんを積むことから表はれると云ふ主張から身分の高下貴賤を問はず、病氣となるとすればそれは心からである。悪因縁の結果埃りを積んだことによる。だが神の道寄せ神の急き込みがあつて後悔させる爲めに病氣を與へる。そして道に引き寄せるための手引びきとなると云ふことは、病者一般に對して共通でなければならぬ。ところが中山新治郎氏や中西牛郎氏の如き詭辯を置いて教祖の書いた神言そのものを素朴に解すれば、誰れだつて上述の解釋を下さねばならぬものである。處でその結果は、この病者一般に對しての通則は、高貴な人々に對してもそれが人である以上、等しくあてはまらねばならぬ。何故ならば病氣は埃りの表はれであるから。

ところが天理教師はこう云ふときにこれを肯定しはしない。空嘯いてそれは下々の埃りの爲めに身代りになるのだと解釋してゐる。とても便利なものではないか。高貴な人に對して不敬に亘らぬやうにする爲に、無理強いに押しつけた解釋だと云ふも過論ではあるまい。親の因果が子に廻ると云ふ古る臭い佛教的三世因果思想の俚言があるが、天理教も又御多分に漏れずこんなことを云ふてゐる。子供は十五歳までは親の因果を引け受けるのであると云つてゐる。それから後は自

分の因縁によりて善くもなれば悪くもなるのだと信じてゐる。十六歳のものが病氣になつたとする。親の因縁と自分の因縁とを加へた因縁で、自分は病氣になつたんだと考へることが出来る。こんな罰を與へる神は又何んと云ふ考へなしの神様だらうか。人間をして甘露臺建設の理想に達せしめやうとするには、そんな生温いことでは到底希みは達し得られぬことを余は斷言して置く。何故に神は天罰觀面と云つたやうな工合に、一事々々のことがらに對して直ぐ様應報を與へぬのであるか？人間はそれでなくとも、神の目にはいぢらしい等と云つてゐるではないか。眞に人間がいぢらしいならば何も廻りくどくもつて來なくとも、あゝせ、こうせ、そうしてはいけない、こうしてはいけない、と云ふやうに教導するのが本當に有難い神様ではないか。甲の病因を乙に表はして見たり下の行爲を因として上のものが惱んで見たりするのは、あきらかに神様の遊戯でしかあり得ない。天理大神すみやかに君の力を振つて悪るいものは悪るいやうに、善いものは良いやうに結末をつけたまへ。若しそれが出來ないとすれば、君も又存在しないと認めるからそのつもりでゐてくれ給へ。と余は天理大神にいどむところである。こう云つたやうな矛盾は發生的に物を見るから必然に陥るのであつて、これは結果的に見て價值もあらうが、發生的に見るならば大なる錯誤を生ずるに至るのである。のみならず獨善主義的なものを上位にあるものに

生ぜしめるに至るのである。これは充分注意せねばならぬ點であるから心して考ふべきものである。次にこの病氣の延長せるものとしての死のことについて一寸觸れて見やう。

三七〇

### 十、勝手に附ける死の解釋、不體裁にもボロが出てゐる。

前節に述べた病氣の續きとして、死に對して天理教はどう考へてゐるか云ふに、これを説くにも矢張り貸物借物因縁の理等の考へを根據としてゐるのである。死ぬとは天理教では云はぬ。「出直し」「お迎へ取り」「お引き取り」「衣更へ」等と云ふ。神様から借りたこの身上(肉體)を神様にお返して又來世に出て來る。神様に引き取られたのだ。又は、

「古き衣物を脱ぎすて、新しい衣物と着更へるやうなものや」

と云ふて、身上を新らしいものと更へるのだと云ふやうな考へ方をしてゐるらしい。こゝで我々は考へねばならぬのは、我々の心が來世も過去世も等しいものであるならば、何故に現在の我々が過去世の事を記憶してゐないのかと云ふ疑問である。心が不變のものであるからには前世のことも知つてゐてよい筈であるのに、何故に前生のことには知らぬのであるか。余は天理教學者に

借問して置く。

ところで死に對して天理教學者はどう説明してゐるかを見て行こう。

「出直し(死)とは此の世界に生存する時が充ちて再生もしくは再來する爲めに一旦此の世界を去ることを云ふのである。此の世に生れるのも死するのも皆神の意志に依つて行はれてゐるものである。御筆先きに、

『此のところ止める心で來るならば其の儘何處へ月日(神)出るやら』

『出るのもどんな事やら知るまいな月日迎いに出る承知せ』

『胎内へ宿し込むのも月日なり生れ出すのも月日世話取り』

これを詳しく云へば人間の生れるときは、大戸邊尊と大食天尊と國狹土尊との三神が揃はなければ産は出來ないのである。三神の手が揃つて大戸邊尊が胎内より子供を引き出し、大食天尊が母體との縁を切り、國狹土尊が彼の皮襪ぎをして母子共に健全に發育するのである。依つて子供を、もうけることを産すると云ひ産の神と産(三)神を云ふのは、三柱の神の御守護に依つて生み且つ生まれるのである。

又死ぬときは此の世の縁を切るのは大食天尊である。と云ふのは生、死共に人間力で行はれる

三七二

ものでなく分挽力、切斷力、繼續力と云ふ自然力が加はつて始めて生死の事實が實現せられるのである。

身體は神の貸物だて古くなつたらお返し申して又た新しい身體を貸して貰ふのやでと教祖がみつてゐる。(大平良平氏著「天理教々理より見たる人生の意義及價值」一三六頁)

以上の文中不審に感ずるのは、産神が健全に産ませようとしてのお考へで、胎内へ宿し込んだのだから、健全に生れるのが當然であるのに拘はらず、逆産をしたり流産をしたり、又出産時は身を切るやうな陣痛を與へたりするのは一體、大戸邊尊、大食天尊、國狹土尊はどう血迷つたのか、怠けたのか、力がないのか、そのところ判然としてくれなければ困るではないか、神は神の職務を充分に盡すべきであるぞと注文したくなるではないか。

それから次に問題なのは、我々の心は我々のものだてと教へる。我々のやることは、我々の行爲は、我々自身のやることであると教へて置きながら、死は人間力で行はるべきものではないと云つてゐるが、それでは自殺を一體どう解釋するのであるか。これは文字の變な解釋ではないが、自ら殺すのである。英語式に云ふと我は我自身を殺すと云ふことである。これが、神の力で行はるものであるとすれば、吾々の自由意志を認めて置きながら、これを又否定すると云ふ結果に至

るではないかこんな矛盾を平氣で述べてゐるとは、どう考へても普通の頭ではない。正しく、バラノイアの頭腦であると云はねばなるまい。こゝにも又余等は教理の不統一を見る以外の何ものも見ないのである。殊に次の文句は我々に特別の面白さを感じしめるのである。

「此の世の人間は皆神の子や神の云ふ事確かと聞き分け。

眞實の心次第の此の助け病まず死なすに弱りなきよう。

此の助け百十五歳の定命と定めつけたし神の一條。

とある。即ち之れに依つて見れば人間は其の精神が健全化せられた曉には、百十五歳の定命を享け更らに神の絶對境に迄進化したならば、不老不死の仙境に入る事が出来る。」(大平良平氏著「天理教々理より見たる人生の意義及價值」一三八頁)

如何にもユートピア的説教ではないか。諸君喜び給へ。天理教徒は不老不死の仙境に入る事が出来るかと云つてゐますぞ。不老不死もよい。それにしても教祖は何故百十五歳を定命としたいと云つたのであらうか。百十五歳と何故に限つたか。こう問ふならば、勿論天理一流の詭辯的な前後の見さかえも附かない出鱈目な解釋をつけることは分り切つてゐる。長生の記録として實在のものとしてされてゐるのは三河の百姓萬平が二百二十四歳まで生き、その子孫及その妻等も百三

十歳以上まで生きたと云はれてゐる。そして江戸の永代橋の渡り初めはこの萬平一家の三夫婦が行つたと云はれてゐる。篤學の士は宇津木益夫編輯「日本醫譜四十」を参照すれば分るだらう。この事實からしても、人間は萬平ほどは生き得るものであると云ふことが分る。萬平は三里の八日灸によりて長生したと云つてゐるが、兎にもあれ、人間が二百歳以上まで生き得ると云ふことは正しいとすれば、中山ミキが何うして百十五歳を定命と云ふに至つたかは、問題とするに充分な價值がある。

猶ほ又、教祖が百十五歳まで生きると云ひながら、神の實現にましますとまで云はれる教祖が何故百十五歳まで生きなかつたか。これが第一問題だ。これを開教の爲、一般民衆の身換りの爲に死んだのだと云ふ教師があるが、又次の文によりてもうなづかれる。

「教祖が貴い御壽命を二十五年間縮めて御昇天下された」

有難いとなれば何んでも有難いものだ。惚れた女房は世界中での美人だと思はれると同じだ。鯛の頭も信心がらとは、この間の消息を穿つたものだらう。譯も分らずに信じてゐる。何んとお目出度いではないか。一生懸命信じたまへ。だが財産を取られぬやうにすることは欲では無い世の爲めだ。そう思ふてゐることだけには氣をつけることだ。

ついでだから云ふて置くが、今の管長様（中山正善氏）はこう云はれてゐる。

「天理教に於いては天理に順應して執着心を去り、自己反省によつて其の神の目的である所の天地人類の完成に向つて努力することを以つて本旨とするのである。即ち神は人類を助けて圓滿なる理想境に到達せしめようとしてゐられるのであるから、人間は神の恩頼たる「助け一條」を信じて、自己を訓練し陶冶して神の意志、換言すれば天の理に添ふやうに努力せねばならぬのである。然らば必ず總べては完成されるのである。此の完成とは心の完成の謂であつて完成されたる心が人の境遇に表はれた時には、

- 一、人は長生します。
- 二、病氣は致しません。
- 三、仲睦ましく平和です。
- 四、仕事は成就致します。
- 五、子孫は續いて榮えます。
- 六、物質に不自由はありません。
- 七、感謝感激で暮せます。

## 八、安心立命を得られます。

と云ふ八つの條件を備へた完全な人間となる事が出来るのである。

而してこの不完全な人がある限り、人生は何時迄も理想境に達することは出来ない。神の意志に添ふことは出来ないのである。即ち、理想の自我を建設する爲には、現在あるがまゝの我を捨て、つまり凡てを神に捧げてかゝらねばならぬのである。この神への献身が即ち天理教精神の積極道たる『ひのきしん』である。

愛の徹底した心境は天理教の『たんのう』の精神である。〔昭和五年一月號「宇宙」三四—三五頁〕

こゝにも又我々は、人は長生し、病氣はせず、仲睦ましく、仕事は成就する、子孫は繁盛する、物質には不自由がない、感謝感激で暮らせ、安心立命が出来るとの、うまい事ばかりを聞かせられる。以上が完全になつた天理教の理想世界である。ところが現在ではそうは行かぬ。現在の人間は不完全である。人間が不完全な限りいつまでも如上の理想的世界に到達することは出来ない。不完全な自我より、完全に至ることを希望するならば、凡てを神に捧げなければならぬ。それは『ひのきしん』である。財産も山林田畑も、家屋敷も七珍萬寶妻君、娘、爺、婆、等々自分を中

心としてあるものは何んでも神に捧げなければならぬ。これが『ひのきしん』なのである。これ等を捧げるには、何んでもハイハイと云つて出さねばならぬ。カリソメにも不足心を起してはならぬ。満足して出さねばならぬ。これが『たんのう』なのだ。こうしたときに以上の八つの條件を備へた完全な人間が出来ることになるのであると、まあこうおつしやるのである。どうです、讀者諸君、承服出来ますか。こう云ふことが承服出来て、こう云ふことが出来ると思つてゐる人々は、次のやうな夢物語りも何んの不思議もなく受け得られるのだらう。それはくゝ立派なところだ。一般の信者は死ぬと、こういふところへでも行くことと思つてゐるのだらう。

「近き將來に於いて全世界の人類の精神が向上進化して、神の絶対理想に一致した曉には晝の晴天に夜の微雨、嚴冬もなければ酷暑もなく、大風もなければ洪水もなく、海嘯もなければ噴火もなく、落雷もなければ、地震もなく、饑饉もなければ、旱魃もなく、疾病もなければ疫病もなく、四時の氣候は調節せられて人は天壽と天祿とを樂しみ、所謂、

『提灯要らが笠いらす、鎖さぬ御代にするが一條』

の甘露臺世界が實現せられるのである。〔大平良平氏著同上七七頁〕

何んとまあ結構な世界ではないか。人間が平等になつて機械化すとは誠に稀らしいではないか。

こんな夢物語りはさて置いて、こゝに捨てて置けぬことがある。それは病氣から死の轉期を取れるものに關してである。

言ふまでもなく天理教に於いては病氣を埃り（罪惡）の表はれであるとする。それだから、病氣から死の轉期を取つたとすれば、その死ぬと云ふことが病氣の最も進んだものだと思へばならぬ。語を換へて言へば、病氣が充じて死んだとすれば、死ぬと云ふことは神の引取りであるのだから、心に借し與へた肉體を神が引取つたと考へねばならぬ。病氣は神の立腹であるならば病氣によりて死ぬことは、神の立腹の極度に達したものであると云はねばならない。病氣で死んだと云ふことは神の立腹の爲めに殺ろされたと云ふことである。神が立腹して貸した身體をむりやりに剝ぎ取つたのだと考へることが出来る。因業な高利貸しが期限が來ても拂はぬ債務者から、無くては暮れぬ一枚より無い蒲團を奪つて行くやうに、天理教の神も又そうした神様なのだ。何んとまあ素朴な無邪氣に腹を立てる神様ではないか。ところがこの神様は八ツ衝りにあたりちらすことがある。たとへそれが神様の爲めになることをするときであつても。頂度これを我々は海外に於いて天理教の爲めに所謂、清き殉教の死を遂げた清水芳雄氏の死によつて知ることが出来る。と同時に、天理教の神の如何に力無きものであるかをも教へられるのである。如何に無慈悲であるかが分るのである。この死に對して天理教内部の人々はどんな解釋を下してゐるか、我々はその考へを見て行くことにしよう。

「清水氏は天理教海外傳導部に勤められてゐた。兵神大教會長の令息で其の境遇は甚だ重要なものであつたのであります。然るに壯圖を抱いて傳導の新境界を南洋に求められ風土病と闘ひつゝも、遂にに神意によりて、永遠に殉教の歴史をパラオの島に留められたのであります。が傳導部としても兵神大教會としてもこの將來あり重責ある有爲の士を海外の地に失ふに到つたことは惜しみて、餘りあることでもあります。」（昭和四年八月發行「みちのとも」八頁上原義彦氏筆）

「上陸後は聞くところによると、物々交換によつて漸く生活を維持する蒙昧の地に深く入り込んで、海外布教の著しき體驗を嘗めつゝあつたそうですが、不幸風土病に犯され、パラオ島に歸つて病を養はれ、再起を念願せられてゐるてふ消息を聞いたのであります。

よるべなき異郷に在りて病床に身を横へてゐる君の意中、蓋し無量なるものがあつたであらませう。お地場を遙拜して南無天理王命と神名を誦する時、我が一命を捧けても南洋における



海外傳道の基礎の樹立を願はぬ事はなかつたでありませう。處が一朝危篤の報は傳へられ、つゞいてかへらぬ旅の悲報が、情なき海底電線によつて、無言のまゝ傳へられて來たのであります。君の嚴父はその數日前、愛嬢を喪い衷心未だ去らざる内、またしても世嗣の計を手にして果して如何なる感に打たれたでありませう。」(同上二二頁小野靖彦氏筆)

「本年の四月若き血汐を躍らし遠大の志を抱いて、單身南洋の一孤島に教線をひろげるために出かけて行つた清水芳雄さんが、七月廿六日いまだ布教四ヶ月に満たず、その雄圖の基礎さへも築かれないうちに、不幸『デング』と稱する風土病に犯されて、山海萬里異國の空に孤姿消然として客死したことは、個人的に見てもまことに痛ましい事實である。

出でよ海外へ、ゆけ未開の地へ、『神は先廻りをして待ち受けてゐる』と仰せられてゐますからは、不思議な靈救は必ずわれ／＼の殉教的精神を手をつかねて歓迎してゐるのであります。」

(同上二四頁、今村英太郎氏筆)

「それはよく分つてゐる。然しこのまゝでは會長になりたくない。一苦勞して實地の經驗を積

ませてもらひ度い。それには今が旬だと思ふ。」

大體目鼻がつくと布教師を呼びたいとおもつてゐる。

頑健だとはおもはれぬが、大丈夫だと思ふ。これまで何んべんも大患にかゝつて生死の間をぬけて來た。さうたやすく死ぬものでないといふ自信を持つてゐる。神様の御思召ならどこにゐても死ぬことは死ぬ、そんなことは氣にはしてゐられぬ、神様がよいやうにして下さる。

聞けば兵神あてに近いうちに布教師を派遣するやうに熱心に依頼して來られたといふ。きつと目鼻が立つてゐたにちがひない。

部員一同打ち揃つてお願ひづとめをさせて頂いた後協議する。」(同上二九—三二頁中山爲信氏筆)

「兵神大教會長の息である清水芳雄氏は、海外傳道部に勤務中であつたが、今年四月南洋視察旁々實地布教のため南洋ハラオ島に出張されてゐたが、本月初旬不幸にも風土病にかゝられ、大神様に祈願を込められ同時病養の手當も十分にされてゐたが、遂に二十六日出直しの電信があつた。若き身であり、亦大教會の息である同氏が單身異郷の南洋に勇ましく出發されたの

も東の間、遂に出直しされた事は誠に御氣の毒な次第である。(同上本部發表)

二六二

天理教が清水氏を失つたと云ふことは正しく一大損失であると云はねばならぬ。信仰そのもの純情そのもの、氏を失つたことは、天理教ばかりでなく宗教界に取りて大なる損失であると云はねばならぬのである。氏の如き人を何故に神は引取つたのだ。然も、南洋なるパラオ島に行きさへしなかつたならば、「デング」と云ふ風土病にかゝりはしなかつたであらう。否、罹る筈がないのである。然も酔興や遊び半分でパラオ島に行つたのではない。神の道を廣める爲めに行つたのではない。安逸を貪ほりに行つたのではない。天理王の教へを布教するに行つたのではないか。安逸を貪ほりに行つたのではない。上述中山氏に對する、「一苦勞して實地の經驗を積んで來たい。」と云ふたことで明らかではないか。それなのに何故に天理王命は、力を貸す爲めか？神は先廻りをして待ち受けてゐると云ひながら何んだつて殺してしまつたのだ。氏には氏ならではの出來ぬ仕事、澤山あつたのに何んだつて神は殺してしまつたのだ。それが、神が前に待ち受けてゐると云ふことになるか？助けるのだとは云はれないではないか。上述の引用文によりても明らかなく、皆氏の死を惜しんでゐる。惜しみてもあまりあるとか、痛ましきことであるとか、本部では誠に御氣の毒な次第である。と

かと云つてゐるが、その次にすぐ、神意によりて永遠に殉教の歴史をパラオ島に留めた。とか神様の御思召した。とかと云つてゐるのはどうしたことであるのだ。然も、神様に、部員一同打ち揃つてお願いづとめをさせて頂いたと云ひ、大神様に祈願を込められ同時に病養の手當も十分にされてゐたと云つてゐる。これを以つて、神様に祈願したけれども、神様は、神様の道をひろめる爲に獻身的になつた人を救つてはくれないのだと云ふことを、知ることが出来るではないか。天理教の神にはこんな天理教の爲めに盡す人までも救はぬ。神には人を助ける積極的の力がないと云ふことが分るではないか。清水はかくて、自らが絶対に信じてゐた神の爲めにあたら前途ある身を、山海幾萬里のパラオの島に故郷の空を眺めながら孤姿消然として客死したのである。余は清水氏の爲めに祈らくば、氏の場合に於いては阿片でもよい、死ぬときに、天理大神に對する反抗意識の爲めに苦しき死に方をせざらむことを。併して又安泰に瞑目せられることを人間として希はしきことである。それにしても天理教の神に對する——若しそれが實在してゐるならば、——余の反對意見は清水氏の死によりて益々深められ、空虚な神少くとも神の爲めに盡す人を救ひ得ぬ神を、無暗み矢鱈に擔ぎ廻る天理教屋に對して、憎惡の念の切なるものを感じざるを得ないのである。斯くの如く神の存在も確かならぬ。確かに存在するとしても斯くの如く力無き神、

二六三

無慈悲な神を、萬能の神、大慈大悲な神として擔ぎ廻つて偶然の一致若しくは人間の本來の力を利用することによりて好結果を收め得たからと云つて、この好結果の元因を神の救に求め、神の爲めと説いて不當な寄進をなさしめてゐるのは明らかに搾取的行爲であり、人を欺き誑らして不勞利益を貪るものである、と云つても何等の言ひ分もないであらう。明らかにそれは欺瞞的行爲であると云はねばならぬのである。

我々は如上の事實から、神が存在するとしても、吾々を救ふ力のないものだ、と判断せざるを得ぬ。こうした、力の無いものをつぎ廻るのを教師と云ふ、即ち、非生産的消費者群が食はんが爲、パンの爲めに神様を喰ひものにしてゐるんだと云ふことが明らかに分るではないか。それでも理解が出来ぬ信者さんよ、神様があなたの苦惱を除いたのではなく、あなたが人間として持つてゐる力があなたの苦(煩悶、病苦)をのぞいたのだと云ふことを、よくよく考へて御覧なさい。神様が本當にゐるのでしたらあなたを教師が願つてくれることをしないまでも、あなたの本當の心、誠心誠意を披瀝したら神とあなたとの直接交通によりてあなたの前にあらはれ、あなたの苦るしみを取り去つてくれる筈ではありませんか。この理をよく考へて御覧なさい。それでも理解の出来ぬ方がお有りでしたら、遠慮なく質問してよければ人間救済をモットーとする私は、

喜んでお答へ致します。このことは固く御約束して置きます。

此節を終るにのぞみ、天理教當局に借問す、清水氏の病氣である「ダンク」によりて、

「カワトミノアヒダニデキモノデキル」

とある如き皮と肉との間に腫物のあるデンクは、どんな因縁でどんな埃によつて生じたものであるか、明らかにせられよと。猶ほ注意して置くが、清水一家の平和を亂すものゝ爲のあらはれ等と、逃げられるやうなことをないやうにすることを要求して置く。

## 第二章

天理教はどうして今日の發展をしたか？

天理教はどういふ風にして金を寄附させるか？

### 天理屋の金儲法の公開

現代の宗教界で佛教の眞宗と對抗する位勢力があると云はれてゐるのは天理教である。とは讀者諸君の既に知られるところであらう。

どこの土地に行つても天理教は大抵ある。然も、見る／＼うちにその教會が新築をしたり、土地を買つたり、擴張したりするのが目だつて見える。外形の發展と比例して、そんなに有難いものであり、そんなに御利益のあるものであるかは、第一章に於いて大體は盡したつもりである。だが事實としては外形の發展は著しいものである。

實にすばらしい發展ぶりだと云つてもよい。あんなに立派なのだから天理教は人の云ふほど悪いものではあるまい。あんなに心切なのだからあの教師はそんな悪い人ではあるまい。あんなに立派な教會に住んでゐるんだからそんなひどいことはしまい。と云ふのが人情である。こゝが従つて人間の弱いところである。風彩、建物、住居、持物、髭の有無、指輪の有無、態度の應揚さの如何、肩書きの有無、財産の有無、地位の高下、こう云つたものに惑はされるのが人間の弱點である。

だから大欺詐師はどこかで如上のことからを利用してゐるのである。

よく人は、そんなに多くの人がやつてゐることなんだから間違はあるまい。と云ふことを口にするが、それとても、群集心理のはたらきあつての故に然らしむるのであつて、大勢集つて決めるからその決めたことは間違ひはないと云ふことは云へぬのである。一人で決めた事柄でもその人は智識あり眞に物事を洞察するの眼識のある人であるならば、百人よらうが、千人よらふが、その一人の人には敵はない筈であるべきである。ところが、人はこの多くの人に和せんとする性向があるもので、多くの人がやるからやつてもよからう式に萬事考へ勝ちである。従つて間違つたことも平氣でやつてゐるやうなことは實に多いのである。このことは、文化文明の進歩の爲め

には實にゆゑなき障礙であつて、こう云ふ考へは是非とも早く取り去らねばならぬのである。本人の爲めにも社會の爲めにもごく／＼必要であるのである。

天理教の信徒は六百萬人と稱する。教會は一萬と云つてゐる。教師は一萬二千人と號して宗教界の一方の分野に豪然と構へてゐる。

そんなに信者があり、そんなに教會があり、そんなに教師がゐるんだもの天理教と云つたところで悪いものではあるまいと云ふのが普通の人の考へである。入信者の一例をあげると、博士(廣池氏)が信者になつてゐるんだもの、博士まで信じてゐるんだから間違はあるまいと云つて入信して財産をすつからかんにした男がゐるが、博士を引つぱつたり外的勢力を張るのはほんとうに、何等思想的に寄與するところのないコケオドシに過ぎない。とは云へこのコケオドシに引つかゝるものゝ如何に多數なるべきかには驚くではないか。これには所謂、策畧があるのである。コケオドシは魚を釣るときに良いえさを見せつけるのと同じことである。このえさにうまく引き寄せられたものは必ずと云つてもよいほど確實に引つかゝるものである、讀者諸君は注意せねばならぬ。反省せねばならぬのである。今日の宗教界がひたすら現状維持にこれ努めてゐるのは、實にみじめな感じを與へるものだ。宗教家よ、どうせ君等は搾取をやる層に生棲してゐるんだ。

取るによいだけとつた方がよいか。天理教はよい雛型だから、余はそれを紹介してその方向をお教へ致しませう。だが、こう云ふことは永續きはしませんぞ。と云ふことをお慈悲につけ加へてをく。

## 一、寄附させる方法の梗概

何よりも、天理教のやり方を先づ窺ふことにしよう。

「信徒への仕込み、

御教理を取次ぐ順序としては先づ第一に借物一條の理をしつかり胸に陥つて理解がつく様にしてやる。次に教祖の御艱難の履歴と並に斯道の信徒たるものは是非とも御教祖の足跡を履ま、さして戴かねばならぬことを諭す。

それから八埃の理は必ず／＼身にかへてもどれ程習慣を捨てる事は苦しくても充分なる勉強を以つて、眞實に立ち戻らせるやうにする。それから因縁の理を諭して眞心から懺悔の心を起させると共に、克くたんのうの精神を修めさせることに力めるのである。

信徒は教會財産である。故に信徒の増加するは教會の財産が豊富になると云ふことである。従つて信徒が熱心で堅固なのは教會の基本が固定して行く譯である。そこで一寸の考へでは、信者は單に精神的の財産に過ぎず、實に教會附屬の不動産こそまことの物質的財産なれと思ふのは全く辟見である。何となれば、それは精神的の財産が、やがて有力なる物質的財産に變化することを知らぬのである。

教費は當分教會では一ヶ年規定三十六錢の教費としては特別には取り立てぬ、但し、それは教會から取り立てぬとしても、充分理を判るやうに仕込んで置けば難有涙で眞實から納め出して來るのである。(第二三九號「道の友」一三三—二五頁)

以上の引用文で明らかである如く、未信者には眞の眞まで滲み込ませるだけ第一章に述べた教理を吹き込むのである。借物の理、教祖の雛型を通れ、八埃の理、因縁の理、さんげの念を起させ、たんのうの理を深くせしめ、それからひのきしんの理を吹き込み、そして教理化された精神にさへなれば、それは教會に取つては精神的な財産であり、その精神的な財産がやがては有力なる物質的な財産になることは引用文の中にも明らかである如く、精神を天理教化することは、ごく

ごく必要であることで、引用文の末行にもある如く、

「充分理を判るやうに仕込んで置けば難有涙で眞實から納め出して来るのである。」

と明瞭に信者が何もかも投げ出して来るものだとその事を判然と示してあるではありませんか。だがそうやすくとはいかなる無學な人間でも何んでもかでも受け入れるものばかりではない。反省とまでは行かぬまでも、多少の頑な、ところは誰れにでもあるものである。斯うした人は天理教々師から見れば實際苦が手であると云はねばならぬ人である。が、天理教は之れに對して誠に巧妙な手段を弄する。勿論、そうした手段にのるのが悪るいかも知れぬ、がとに角その手段は人情の機微にふれ、その弱點を掴られることは確かである。ではどう云ふ風に出るか、も少し詳しく見て行くことに致しませう。順序として先ず梗概の初めの方から述べることにしませう。

## 一、借り物を使ふに利子はきつと要る。

或る人が高利貸しから金を借用に及んだとする。そうすれば、その金を使つてゐる間はその金に對して一日いくらかの利子がつく。お返しするときは利子を添へて返さねばならないのは世間

一般で何にも變んなことはない質屋に衣類書籍その他貴重物を抵當に入れて金を借りるのも同じことである。品物を貸りても返すときにはお禮を添なければならぬ。これ等を世間道德と云ふ。又は、禮儀とも云ふやうなものである。ところが高利貸しから火の車だから無理をして金を借用せんとするとき、足元につけ込んで高い利子を食はる算段をするのが、高利貸しの高利貸したる著目であり、所以である。

こう云つたやうな、世間一般の人が少しも不思議だとも、おかしいとも思はない、當然だ、あたりまへだと思つてゐる考へにうまく貸したんだぞ、お前は借りたんだぞ、お前の體は神様がお造りになつて、お前にお貸しになつたんだぞ、だから一生懸命に利子をお返しする考へをしなければいけないではありませんか、神様からお貸してもらつてだまつてゐるのは、不人情でせう、間違つてゐませう、理窟に合ひますまい、どうです納得が出来ましたか、納得がまだ出来ないんですか、納得が出来なければ、ようく、考へてごらんなさい、一體たれがあなたをお造りになつたんです？それあ勿論御兩親でせう、だが大きくなるには種々なものを食つたり飲んだりしなければなりませんまい、又衣類も着なければなりませんまい「この地が、あの天があるからあなたは生きてゐることが出来るのでせう。日があり月があるから、食物や住宅に必要なものが成り立つて来る

ことが出来るのでせう。よく考へて御覧なさい。とくと考へて御覧なさい。胸に手をあててよく思案して御覧なさい。解りましたか？諒解が出来ますか？ええ、分りましたね。神様が、そうです神様が、あなたにあなたの體を貸して下さつたのです。あなたの食物も飲物もあなたのこの世で掛け換への無いあなたの美しい妻も、あなたの可愛らし子供さんも玉のやうなお嬢さんも、あなたのお家もお仕事も等々、ですから、あなたは、神様からお借りしてゐるその代償つまり利子として神様にお返ししなければなりません。神様に利子をおさめさして頂かねばなりません。せう。そうです、神様に天理王命様に、天理大神様に利息を、こうして毎日使つてゐるこの體、家、衣食、に對してのお禮として神様に御禮するのはあたりまへでせう。貸りたものを使ふのに御禮はあたりまへでせう。ですから神様に御禮をしなければなりません。神様はこれによつて益々あなたが健康であり、繁盛し病氣がなくなるやうに御守護をいよいよよくして下さいのですから、神様の御氣嫌を損せぬやうに致さねばならないのです。ですから神様に御禮を申しなさい。それが當然です。どこに御禮をするのですつて！これは神様にです。そうです神様に御禮をするには御禮を形ではさねばなりません。お金でもよい、あなたの時計でも、奥さんの帯でも何んでも心さへ表はれてゐればよいのですから、それを神様に差し出しなさい。どこへあげるのですつて？それは勿論神様のいらつしやる、人助けの處です。教會にあげれば神様は受け取りますよ。そうです教會は神様の仕事場ですから、神様はそれを又人助けにお使ひなさるのですよ。何お金をね、これをあげるんですか、そうですか、では神様に供へませう。何？そちらの人は神様に對する御禮のつて、あゝそうですか、ではこれも神様にあげませう。何？そちらの人は神様に對する御禮の爲に何かあげたいが、何も神様にあげるものがないから、神様の爲めにはたらかせたいと云ふんですか、そうですか、では向こうの方に仕事がありますからお仕事をして神様に御禮心を盡しなさい。そう／＼結構なことです。それをひのきしんと云ふんです。結構なことです。親様は有難い。神様はんほとうに有り難いですね。

これ等の文句は全く余の創作にかゝるとは云ふものゝ、これ等の思想のあらはれてゐるのは各種天理教の諸書に明らかなるところである。結局儲かるものは神様だかも知れぬが、その教會長が、その受けた金品を自由にする力をもつてゐるのではないか。斯くして教會は見る／＼大きくなり、教師は貧乏より金持へと進んで經濟的な安樂が出来るやうになる。金品を取られたものはそれでも心持つだけよいかも知れぬが、物質的には出しただけの損失はまぬかれぬ。それでゐて必ずよい結果がめぐつて来るかと云ふにそうではない。ないことが多いのである。これに對して又どう



答へるか、それ等は次々に述べて行くが、教師は確かに天理王命が有り難いかも知れぬ。正しく手振足踏み「やしきを拂ふて田賣り給へ、私しのところへあげさせ給へ。天理王命」と踊りたくなるほど嬉しいかも知れぬ、が取られる、それも體よくお返しする禮儀だから御禮の印にと云つたやうな名目で、教會に金品をあげる信者が六百萬とは、何んたる國家の不祥事ではあるまいか。國家の前途に深く濃き暗影を投ずるものであると云はねばならぬ。

宗教は精神的のものである。何をもつて物質に換算さるべきや。誠であればよい。それが誠にかなつてゐればよいのだ。恐れ多くも明治天皇の御製かと記憶してゐるが、

「心さへ誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ」

である。神は物質的の表現を要求しはしない。物質的の要求をするのは、實に游民に等しき天理教々師である。神には誠心誠意で事足る。何も、親にそむき兄弟と争ひ、親類の指弾にあつても天理教にあげる必要はない。近くより遠くに及ぼすのが順序である。自分の近親に對して誠心誠意を盡せばよい。そして餘裕があつたら他人に及ぼせばよい。それでも餘裕と云ふものはそう／＼はないものだ。そこでは自分を作りあげることだ。一家の平和を亂してまでも天理教屋のお先き棒になるにも及ぶまい。物質を要求する神は明らかに邪神であり欲神である。

然るに、物質的の利を得んと底意より天理屋はこう云ふてゐるのだ。

「『親子でも夫婦の中も兄弟もみなめい／＼に心ちがふで』(お筆先第五號八)」

世界一列は皆神の子女であるも、前生の因縁によつて其の天啓の教を信するには早晚がある。是を以て同じ一家の中にあつても前生因縁の善きものは早く入信し、前生因縁の悪しきものは遅れて入信する。或は一生入信することが出来ないものもある。然らば親子兄弟夫婦各々別々にして親が既に信しても其子が未だ信ぜざるものもあり、弟が既に信しても其の兄が未だ信ぜざるものもあり、妻が既に信してもその夫が信ぜざるものもある。因縁の親疎と道の信否とは全く別の事である。イエスが子をしてその父に叛かしめ妻をしてその夫に叛かしめんと云つたのは過激の言に似たりと雖も、實は道の信否によつて家庭の風波を起すも亦止むを得ざるの次第であることを語つてゐるものである。(中西牛郎氏著「神の實現としての天理教」一九八頁)

又、こう云ふのもある。信者がその妻に向ひ、

『お前は私が天理教を信仰するのが嫌で此の家に居たくなかつたら止むを得ない歸れよ。お道(天理教)のお話しを聞いて見ると、夫婦は神様がお糞ぎ下されたとの事だから何事があつても

自分の方から縁切ることにはしないが、お前の方から縁切られれば致し方がない。夫婦の縁は切られても神様との縁は切られない。』(第三十九卷、第十四號「みちのとも」二九頁)

も一つ例を引こう。  
「或る日私の知人が訪れまして本教徒の夫婦間は割合に冷たく、亦兩者共に不足の心が多いやうであり、教外者の方がむしろ、理解し合つて温い家庭を結んでゐる。本教は夫婦和合を非常にやかましく説いてゐながら不思議な現象ではないか。私はこの知人の言葉を聞いて全くそうした事實を見聞する事があるので、全然否定が出来なかつたのであります。(中略)

神様の御言葉に、

『そうほうはたしあひのみち』

と仰せられたのを記憶するのであります。この御言葉を思案させて頂きますと、『はたしあひのみち』つまりお前達夫婦は前生敵同志であつたから今生は夫婦にしてお互様の不満足を取つて、前生の因縁をなつしよう(納消)させるのだとさとして頂くのであります。』(第三十九卷第十二號「みちのとも」五三頁)

以上三例で見ると前生敵き同志が一緒になつたのだから、果し合ひ(何んとおもしろいことでは

ないか)をするのは當然で不思議ではない。いはんや一人が、天理教を信仰する。一人は信仰しないと云つたとき、信仰するのは善い因縁があるからだ、と教へ込まれるものだからたまらない。神様と縁は切られぬ。夫婦の縁は切つてもと云ふほどの熱心さだ。こうして喧嘩するのを、信仰の爲めには、家庭に風波を起すのも又止むを得ないことだと云つてゐる。喧嘩しても何んでもよい、教會で無料で働らき、あるものは何んでも教會へ寄附さへすれば、その人はたとへ今生不幸な目に會つても、來世には非常によいものになるのだと焚きつけるものだからたまらぬ。大抵のものはまいつてしまふのである。

物質をあげる必要はない。神は精神さへ誠であれば充分受け取る。誠のあらはれとして物質をあげる必要はない。神様は作つたかも知れぬが、大事な親にそむいてまでも——自分を作つたと云ふ點では神様と同じだ——天理教を信仰する必要はない。それで、神様が助けて下さらなかつたならそれは邪神である。人類合同して、物質を要求するこうした邪神を打破すべきである。こうした邪神の元に集つてゐる輩を放逐すべきである。

それでも安心がならず、病が癒らず、煩悶の除かれぬものがあつたら、余のもとへ質問してよこし給へ。能ふ限りの助力を與ふることを誓つて斷言して置く次第である。

## 三、雛型を通り終れば無一文

人間の體は神様の貸し物だ、だから御禮はちやんとせねばならぬ。そればかりではない、御教祖は非常に苦勞を爲された。吾々を救はんと思はれて大變な苦勞辛抱をなされた。今日こうしてゐるのも御教祖様の御蔭げだ。だから、我々天理教信者は御教祖様の艱難を嘗めねばならない。御教祖様の足跡を履まさせて戴かねばならない。御教祖様はけつして埃りとなるやうなことはしなかつた。そればかりか、人助けの爲めに自分の全財産まで神様に捧げ助け一條をはげまられた。御教祖様は食ふに困るやうな身分までなり下つた。お生れは財産家の家に生れ、財産家の家に嫁いで然もその財産を悉く困るもの、貧しいもの、苦しめるものに分ち與へた。こんな尊い御教祖様の雛型を結構くと唱へながら通らして戴かねばならぬ。その爲めに他のものゝ反對に出會うともそれは神様のお思召によるものだ。そのお試みにうちかつて助け一條の道をいそしまねばならぬのだ。その爲めに一家の風波が起つても、夫婦和合が破れても、親子反目が出来て來ても信仰の爲めだ、神様がよう知つてゐる。信仰の爲めに一身を捨て、助け一條を爲さねばならぬ。御教祖の雛型即ち、全財産を投げ出して助け一條に進まねば天理教徒としての價値なく、又神の子と云

ふことも出来ないのだ。こうした御教祖の足跡を履ましてもらうのは嬉しいことであり、喜ばしいことであり、心に満足があり、身にゆとりが出来て來るものだ、みなさんも「お道」一つの道を通らしてもらうには是非御教祖の雛型に従はねばならぬのですよ。それでは、御教祖を雛型として御教祖の足跡を履ませてもらうにはどうすればよいかと云ふに、助け一條、つとめ一條であります。助け一條とは人の不幸や、煩悶、病苦を軽くしてやることでありまして、これを行ふ法としては「つくす」と「はこび」の二通りの行き方があります。「つくす」は自分が直接人を助け得ないとき人をして助けせしめる爲にその人に金をやるのが「つくし」であります。「はこび」とは自身が直接人を救ふことを云ふのであります。そして「はこび」の場合は自分は教會のおさとしをする人となり、匂ひ掛け（教會の宣傳のやうなもの）をする助け人衆になることであります。「つくす」方はお金や物品を助け人衆のある教會にやるのであります。こうして教祖の雛型を通じて無一文になつたときにあなたは救はれ、あなたの悪因縁、前生持ち越しのいんねんは切らしてもらうことが出来るのです。だからいんねんの深い人は深いだけ御教祖の雛型を手本としてその足跡を履まして戴くやうにせねば救はれず、ひどいものになると、來生は馬や牛になつて苦勞せねばならぬのでありますぞ。と説く、そしてこう云ふ實例がある。

「昨日まで蝶よ花よと育てた娘文子を十二で奉公させ。自分は教界生活に身を投じ、教祖様の御遺蹟を體して實財一切を靈救の糧とし、三瓶支教會役員山岡庄松氏方に六ヶ年の間同居したのである。」(道の友。二三四號六五頁)

とある如く、教祖の足跡を通れと云ふことは全財産を投げ出せと云ふことであることは既に分明のことであらう。そこで、その人助けの爲に投げ出された金は一體どうなるかと云へば、教會は神の仕事場であり、人を助けるところであるからと云ふ理由で教會に寄進させるのである。故に教會はだん／＼個人の財産を集めると云ふことになるのである。實にうまく説教するものではないか。教祖を慕ふの念は信徒たるものゝ必然の心理的狀態であつて、慕ふと云ふことから教祖の一言一行に模して自分を完成せんと欲望を越すのは人間の至高なる本能である。人間たるものはたれでもこうした心持はもつてゐるものである。が、天理教の場合には如何せん相手が悪い。相手が悪いばかりでなく、それを擔いでゐるものが悪い。下手をすると財産は皆とられ、一家離散互に苦勞のどんそこに陥落するであらう。よくいつて教師の卵にでもなり、どうにかこうにか食つて行くとは雖ども、生業を捨てて前よりも悪いに決つてゐるし、又、よいにしたところで、自分が取られたと同じやうな方法で個人々々から財力を集めなければならぬのである。然も

集めることにのみ力を入れ遂に豪然たる不用の建築を起すの愚を爲すに終れば幸ひであらうが、幸ひはその人一人の幸ひであつて、他の人はその幸となつた人が多くなればなるだけ、貧乏し不幸になるのである。今日天理教があの大を有して眞宗を驅逐して、世界に覇を争はんとするまでの意氣の存するは、年收一億でふ莫大なる額の寄附金があるからである。天理教が大きくなれば大きくなるだけ、どれだけの人数の人々が貧乏し苦しみに不幸に沈淪するか！思ひをこゝに至らすときは卒然として長嘆息の無きもの幾人かある？恒産無きものは恒心無し、天理教内部にも少しはもう既に、奸手段的方法の弊害を指適するものが出るやうになつた。たとへそれが、月明の星の如くであつても、人類の爲めには喜ぶべきことである。

乞ふ御身等の爲めに、天理教のかゝる奸手段にあざむかれる勿れ！病疾、煩悶、苦痛があれば余は一臂の力をお貸しすることを躊躇しないつもりである。故に遠慮なく御相談あれ。人類愛の爲余はこゝろよく引き受けるのであらう。

#### 四、埃りをば掃除するの、お金、金、 天理の神もお金次第で。

事業が面白くうまく行かぬ。身上即ち體に異狀が出来て来た。災難に會つた。一家がうまくおさまらぬ。手を出すもの總くが失敗だ。病氣になつて癒らぬ。こまつたものだ。こう云つたやうなものは皆今生か前生の埃りなのだ。毎日く我々は一日たりとも埃りを積まぬときはない。その積んだ埃りは、だん／＼と我々の事上身上に表はれて来る。それが神のお叱りを受ける事である。病氣は神の御手入れであり、立腹である。だから神の御手入れに従つて神の道即ち天理教信仰に入つて神の立腹をやわらげねばならぬ。神の立腹を柔らげるには、自分が事上身上で苦しむのを除くにはどうしたらよいか、事上身上の障りの元因である埃りを拂ふにはどうしたらよいかと申しますと、それは人を助けねばならぬ。たんのう、してひのき、しんせねばならぬ。もうく埃となるやうなことをやつてはいかぬ、神のお道にいそしまねばならぬ。神のお道をいそすむには教祖のこのこされたる雛型を通して戴かねばならぬ。それにしても教祖様は、

「人を助けたら我身助かる。」

「何んじう救ひ上ぐれば八ツ病の根を切る。」

と言つてゐる。だから人を助けねば埃が根切れにならぬ。従つて事業が思はしく神様の守護を受けることは出来ぬ。身上の障りははかばかしく癒らぬ。だからどうしても人を助けることをせ

ねばならぬ。人を助けるには、「つくす」と「はこび」とがある。助け一條の道とは「つくす」と「はこび」の二つの道である。「はこび」の出来ない人は、お金を教會に寄進せねばならぬ。そしてそれによつて、その金によつてお助け人衆が他人を助けたとき、初めてそのお金を出した人の埃は消え、従つて病氣は癒り、事上のお障りは取れるのである。又、病氣をお與へ下された神様の御立腹もやはらぐのであります。そしてその人は家業繁盛、長生し事柄がうまく運ぶのである。と天理屋は云ふのである。又こう云ふことも云ふ。これはある立派な教育があり又相當の人なのでが次のやうなことを云ふ。

「金を出さねばならぬと云ふ點が天理教が嫌はれるところの元因だが、世間の人は金を數量で數へてゐる。それより深い根本的問題にはふれぬ。これを天理教は究めてゐるのである。この點に即ち數量でなく因縁を究めたところに天理教は普通世間の人の知らないものがある。一體人間は何んでも心がらである。金持も、貧乏も心がらである。心以外に我はない。神は我れに我れの境遇を借したものだ。これは因縁の理によるものだ。例へば甲のたのみを乙の心が引受けて身體に命ずる。甲の爲めに、甲を助ける爲めに身體を使ふ。そうすれば、お爲になつた。利益を與へた。功勞を與へた。ことになる。そこで甲は乙より受けたお爲めになつたと云ふこ

とに對して一金五圓を呉れたとする。そうすれば、心が身體に働らかせて一日中働らいてお金を五圓もらつたとすることが出来る。そこで、身體が行つたからとて金になるのではない。心からであつたから金になつたのだ。身體が行つて遊んでゐたら、困つたなあと云はれるのだ。ころしたときに、お爲めになり、功勞し、助けるとしたときこの姿がお金に爲つたのであつて、その時の金の質は善だ。が、

或る料理屋が金を儲けたい、そこで金持の息子を誘惑して酒と女でさんさん金を絞り取つた。その息子は親からは勘當され世間からは爪弾きされたとする。と、心が金を欲しがつて、人を墮落させ一人の人間をして、社會を害せしめ、本人は滅び、親兄弟を泣かしたとしたら、心に入るだけの金は入つたが、その金の質は悪だ。

お金を遺してやると云ふがよく／＼考へると親は子を仕合幸福にしようと思つてゐる。だから仕合幸福な生活をさせるには、お金が無ければならぬ。それだから、お金が即ち仕合幸福であると云ふやうになつたのである。その金だ金だと云ふのは金では無い親の心の姿なのである。その金が天理に逆行したところの心の姿としての金ならば、その金は悪質の金であると云はねばならぬ。そして、質の悪い金でもつて、親が子を仕合せ幸福にせんと思つてゐるのはあや

まりである。天理教は境遇を心一つの意の姿とながめるのである。一日十時間働くとする。そして二時間は普通な生活をしたとする。即ちおこる、泣く、悪口を云ふと云つたやうなことをする。働いた十時間は功勞を積んだことになる。その結果として報酬五圓もらつたとすれば、その報酬は仕合せを與へるよい質の金である。普通の生活をしたときに積んだものは埃りである。埃りは亡び行かねばならぬ。これが少しでもあれば、全體が亡びねばならぬ。功勞も消えて終ふのである埃りを拂ふことは、拂ふことが人間に出来ねばならぬ。拂ふことが出来ないとしたら亡び行かねばならない。それを亡びないやうに神は仕事場を作つた。神は功勞を積んで得た働きから埃で積んだ分を補つてくれるのである。その順序はと云ふに、

心の結晶である善質の金を神の仕事場たる教會へ寄附する——教會は——教師に與へる——教師は人を助ける。このときつまり、教師が人を助けたときに埃りを積んで悪を爲した悪が納消されるのである。そして助かるのである。埃りを消すには盡さねばならぬ。又は、こばねばならぬ。そして二時間に積んだ埃を何圓かで賣ることゝなるのである。」

と云つてゐる。余はこれに對して何も云ふまい。ただ、最後は金を教會へ納めさせると云ふことだけをばつきり分つてゐてもらひたいのである。人の悪口、泣く、等と云ふことは人間のたれ

でもやることだ。して見れば總べての人が埃りを積んでゐることとなり、一切の人が埃りの納消の場所であると稱せられる天理教會にお金を納めねばならぬのである。お金を納め金を寄附することによつて、吾人の罪が消えるのである。さながら、ルーテルが當時のローマ法王に對して罪九十五ヶ條を數へてつきつけた、當の相手たるローマ法王式な匂ひがするではないか。斯かる埃りを納消するには金だ。金を出せ出さなかつたならば、お前の罪は消えぬ。そして亡びるのだと云ふのは明らかに詭辯であり、おどかしであると云つても過論ではあるまい。地獄の沙汰も金次第とはよく耳にするが、それより吾々は天理の神も金次第なる一命題を作り得るものと思考するものである。

而して、金を取るに至る言葉の綾こそ誠に手際よくあざやかなものではないか。信者諸君君等が金を出すゆとりがあるなら、何も天理教々會ばかりに出すに及ばぬ。いかに心がらとは云へ、茅屋に住せるものや、又は雨露をしのぐにも處を得ぬ、幾多の働らかんとする意志ある人々の爲めに、働くべき仕事を作ることでも考へたまへ、三年越し、五年越しの今にも死にそうな病人のところへでも送つてやりたまへ。それがどれだけ功德になり、直接人を救ふことになるかは甚大なものである。何も君等の淨財を遊民階級の天理教々會にやる必要はない。君等がやつた金か

ら教師が食ふだけ餘分に多く直接貧民に與へるによいのだ。天理教の教師つまり天理屋の手代どもは、ウマイことを云つたりやつて見せたりして、君等からもらつて食つて行くヤクザな人間の集りだと見てもよいのだ。君等の教祖は互ひ助け合ひ、人を助けよとは云つたが、教師を食はせろとは云はなかつた。教會に寄附して教師の米代にするよりも、直接貧民にやつた方がどれだけ教祖を喜ばせ、それこそ埃りが納消するか分からぬのである。よし貧民まで手を下されぬまでも、君等の縁續きの中にたれかが何かの爲めに悩んでゐるものがあるだらう。それが、身上事上ばかりでなくとも、何か他の事で煩悶したり苦しんだりしてゐる人があるに違ひないものだ。そうした人を先づ救ひたまへ。それが君に取りて何よりの善を積むことになるのである。救済は近くより遠くへ行なはるべきものでなければ、それこそ天理に逆行する行爲にして、教祖の胸に合せず、神の思召に合はぬのは分り切つてゐるではないか。

くれぐれも云ふ惑はされる勿れ！迷ふなかれ解決難であつたら余に相談あれ。

五、因縁と足納の理の含む阿片性に最も注意せよ。  
下手すると財産を引つくり返すぞ。

因縁だ因縁だと天理教は云ふ。生れ落つたのも因縁、境遇もいんねん、不幸もいんねん、病氣もいんねん、苦しみもいんねん、いんねんは心の影で心のあらはれであると説く。これに對して不足心を生ずるのは益々不足することであつて、その結果としての不平は埃となるのだ。こう云ふ理由があるから、

「地震とか落雷とか海嘯とか噴火とか、洪水とか饑饉とか旱魃とか疫病とかは團體の爲めに下された神の異見立腹である。」(大平良平氏著同上七七頁)

と云つてゐる如く、埃りをつむからその結果にあらはれる不幸災難は個人にとりても、團體に取りてもそれ等が積んだ埃りのあらはれなのだと云ふことになる。今生でやつたことでなくとも前生でやつたことの結果が今あらはれたのだと云ふことになる。だから、自分の境遇を自覺してたんのうし(我慢すること)神の道をひたしに進まねばならぬ。そして埃りを納消することを努むべきである。それには、ひのきしん(つくし、はこぶ)をせなければならぬ。そして教會に金ををさめ自分の埃を拂つてもらはなければならぬのだと云ふのが天理屋のいつもの口唇なのだ。結局金を又とられることになるのだ。前節にも述べたやうに注意に注意を重ねなくてはならぬ。よくよく氣をつけるやうにするがよい。

そして、因縁とあきらめることは、あきらめぬまでもいんねんと自分の境遇を見つめて、この元因を自分の行爲即ち前生、今生の行爲にばかり求むることは大なる誤りであつて、決してそう云つたものばかりでなく、前生なんて云ふものは分りつことがないのだから、自己及社會の元因の儼存することを注意すべきである。他による元因を以つて果を生ずることはないまでも他の元因のあることはどうしても知つてゐねばならぬ。たんのうにしてもその通りである。

我慢せよ、いんねんとあきらめろ、と云ひながら埃りを納消せねばならぬ。寄納金を出さねばならぬ。それがひのきしんで、埃りを消すに最も爲になるものだからと云ふ。こゝに大なる詭辯と憎むべき搾取とがある。諸君よ、前生のいんねんは分るはずがないのだ。前生のいんねんがあるとしたら、はつきり現在の我々が前生にやつたことを覚えてゐねばならぬのではないか。諸君のたれが、前生に、牛であつたの、鳥であつたの、豚であつたのと知つてゐる人間がいますか？諸君どうです知つてゐますか？知つてゐる道理がありませんでせう。それでもこの間の事柄を疑問にするものがありましたらば著者は其の問ひに應じませう。

前生のいんねんなどは分らぬのだ。と云ふことをはつきり知つてゐねばならぬのである。天理教的精神に觸れることを希む人があるなら宗教の本をよめ！何も天理教々師に多額の金をつぎ



込む必要はないのだと云ふことをも銘記されたい。

## 六、天理屋の教理をナルホドと合點したときから 有形のものは取られるものと思へ。

梗概のところて述べたやうに、精神的の財産は、やがて有力なる物質的財産に變化すると云ふことを知らねばならぬ。そして又、充分に理を分るやうに仕込んで置けば有難、涙、で眞實から納め出して來ると云つてゐるのは實際なのだ。それほど一般民衆は無知であり、それほど、天理教屋には口のウマイものが多いのだ。何かの遇然でか事上がよくなり、又、心理現象の必然として病氣がよくなつた、でもすれば、教理自體の性質上早速次のやうなことを云ひ出すものがあるのである。

「お道の信仰さして頂いているお互の如く、もはや、既にこの世のものでないといふ眞に助からぬところを助けて頂き、通るに通られない處も通らせて頂いたといふ、特殊の有難い御恩寵に浴し御靈救を惠まれたものは、その重ね重ねの鴻大無邊なる御神恩に對して、果してどんなにさせて頂いたらよいのでせうか。どう云ふ道を通らして頂いたならばたとへ萬一のお酬ひにでも、お受取り願ひるでせうか。私はこふいふことを思ひ浮べる度に「神業第一」吾が身の働きを捨て、神様のお仕事に清き奉仕の誠を捧げさせて頂く、この信念この信仰これを定規とした今後を通うじて頂くといふ事より外に道はないと、いつも、私の胸の奥底にピンとひびいて來るのであります。勿論これは私一人の胸に浮んでくる感じではありますまい。」(五頁)

そして『みんなそろふてつとめまつなり』

と仰せ下さいました神様の御言葉通り、擧家總動員人様を助けさせて頂くこの聖業に、いそしみ勤めさせて頂いたならば、どんなにか、愉快でありませう。どんなにか楽しい事でありませう。又神様御教祖様もどんなにかお喜び下され、御満足にお思召し下さることでありませう。又かくてこそ家の因縁も身の因縁も、奇麗サツパリと、お切り替へをして頂けてそれこそ一身一家子孫末代まで甘露の喜びに満ちた、眞に幸福なる人生の旅をさせて頂けるのでございます。」(第三十九卷第十九號「みちのとも」)

上述の引用文は如何にもパラノイア式ではないか。もうこうなつては、財産もなにも投げ出してかかつてゐることが分る。これが、天理教のねらひどこである。然も、彼は又非生産的消費者

群の仲間に入るものであつて、神の目より見ればこれほど悪いことはない、然も、こゝにも、功利主義的な、自分等ばかり喜んでゐる一人よがりのタイプを見ることが出来るではないか、引用文の末の方にはそれが明瞭に出てゐると云つてもよろしいのである。

諸君、こうなつては大變だ、君等は天理教々理を詭辯的に、まことしやかに説くのを、ナルホドと合點してそれを信じたらもう終りだ。それからそれと投げ出させる思想は吹き込まれ、財産でも何んでも寄附するのにそれこそ、これをやれば罪が消えるのだ等と考へるやうになり、それこそ、有難涙をながしてお金をいくらでも出すやうになるのだ。

噫こうして何もかも投げ出してゐるものが六百萬もゐるとは誰かよく我國民の前途に一大暗影を見ることが出来得やうや、具眼の識者の批判を乞ふとともに、宗教改革、社會改革の時既に熟せりと大聲せざるを得ないのである。

以上の如くにして天理教は信者より金を捲き上げ今日の大を爲してゐる。猶ほまだく研究すべきところはザラにあるし又入信の動機その後の信仰状態等につき余の手元にまとまつた統計等があるがあまりに學的に渡るを以つて以上で一先づ擱筆して置くことゝしよう。

## 附 録

### 一、貧乏してもそれが因縁。これが天理教の不景氣挽回策とはアキレル。

不景氣は、つゝの暴風のやうに、段々と勢ひを増して来る。中小商工業者の經營難、農民の窮狀、失業者群の増大、斯くして、財界は窮迫し來つてゐる。實にこの不景氣を如何に打開すべきかは、何人を問はず焦眉の死活命題となつた。日々報ぜられる新聞の犯罪はこうした不景氣の齎す必然の結果である。強盜、掏摸、殺人の件數が減じてコソドロ、小犯罪が増加して來たことから見ても、犯罪發生の元因が何の層から多く出てゐるか、どんな動機で行はれてゐるか、等は容易く知ることが出来得よう。夫の失業の爲めに妻の板の間稼、親の病氣にて子の剽盜等は涙ぐましい思ひが湧くではないか。失業は打續くばかりでなく、事業縮小の爲めに失業するものも又漸次多數になる。學校を出ても就職口なく浪々のうちに惡心を起すのも食はんが爲めときかば、

「武士は食はねど高揚子。」とか、

「渴しても盗泉の水は飲まず。」とか、又は天理教で云ふ神言たる、

「水を飲んでも死ぬことあるまい。」

等の見榮を張つてゐることが出来れば幸ひである。ところが、金のあるものゝ味ふことの出来ぬ貧困が金の無いものゝ實狀なのです。少しでも金があれば、すぐご飯に換へたい、がご飯に換へる金もない。十銭あれば、白いおいしい御飯が一杯とお新香とを腹に入れることが出来る。それが無かつたら三銭でもよい。三銭あれば、小飯一杯を腹に入れることが出来る。それがなかつたら一銭でもよい、その一銭でもあれば、恥も外聞もない堅パンの一個でも口に入れることが出来る。だが一銭も無いものにはそれさへも不可能な注文なのが本當のことだ。道徳心の強いものは二日や三日は、水を飲んでも我慢も出来やう、その水もどこにもあると云ふものではない。水を捜すにしても大變な苦勞が要る。これまではよいとして、こうまでひつぱくした上に人間は一體何をすればよいと云ふのか？氣心の弱いものは失望落膽の結果自殺への道を選びはしまいか。自らを己が手で殺さずとも行き倒れとなりて路頭に倒れねばならぬ運命を荷ふものである。こうした失望落膽から、夫婦心中、一家心中等が行はれるのであらう。氣心の強いものは反抗意識を亢

進させて、人を怨み世を呪ふに至る。こうした方面からは強盜も出やう、剽盜も出やう、コソドロも出る。女の犯罪としては、萬引、板の間稼等の犯罪が生れ出でるのは、人間として、生きて行く人間としてそうした境遇に置かれた人間として無理だらうか？必然だらうか？賢明な讀者諸君の判斷に移しませう。

如上の記事を読み諸君の或る人は次のやうな意見を漏す人もあるであらう。  
「職業紹介所もある。又日日新聞の就職案内又求職案内等があるではありませんか。私立のばかりでなく、立派な市設のがあるではありませんか。本當に働く氣があるなら、そうしたところへ行つて見たらどうです。きつと職を得ることが出来ませう。」

とお仰になるかも知れません。この現代に生活してゐる人で而もこうした考へをもつてゐる人はブルヂユアでないまでも甚だ幸福な經濟的生活を營んでゐる人と云はねばなりません。と、云ふことを知つて置く必要があります。私設の職業紹介は申すに及ばず。市設の職業紹介所等も、それはひどいものです。私設の職業紹介所では先づてんづけ六十錢を手數料として取られます。そして紹介されて行く行き先きは確實かと云ふに甚だ不確實なものです。あるひは、確實らしいが一定の金がなければ出来ない仕事ばかりであつたり。保證金を出さねばならぬと云は

れたり。それは／＼金の無いものには出来ぬことばかりです。それに使ふ金があれば何もあぐせくはしないものを。無いからこそ、方々あるのです。それ等困つてゐる人々から只取りをしようとするものが多いのです。新聞にしても又そうです。市設の職業紹介所でも、入つて試みに何んでもよいから、仕事はないかと問ふて見給へ年はいくつですか？ときかれる。二十二歳以上でもあればもう就職の望みは無いものと見てもよろしい。それほど、ひつぱくしてゐるのが實相なのです。そして働かむとする意志のある人々から如何に多くの欺詐屋がその人々のなけなしの金を搾つてゐるか。粒々辛苦して蓄めた金を捲き上げてゐるかは全く想像以上であるのであります。これ等の状況を知らぬ人々は全く幸福な世間の裏を知らぬ、又は知る必要に迫られない恵まれた人々であります。こうした失業苦、生活苦の公開されたものゝ二三を紹介致しませう。少し長いが同じく困つてゐる人々には確固とした決心を、又は、こうした経験の幸ひにして無かつた人にはこうした社會苦が華やかな都會の裏にあると云ふことの考へを把持させる爲に紹介するのでありますから、よく讀んで味識して下さいることを希望する次第であります。

『かう落ちぶれたら、僻みもしよう。』

大學終へて新婚間もなく失業地獄の洗禮。津山守一さん（御本人の希望で匿名）は、明大の商科出で今年卅二歳、奥さんの絹子さんは廿六歳、子供さんは坊つちやんで今年二つになるのが一人。お住居は府下の池上村、

X

「僕の失業も長いですよ、もうまる二年になりますよ、津山さんは、日に焼けた黒い顔に苦笑を浮べ乍ら、でも、割りに元氣のいゝ聲でさうおつしやる。

「すると、一昨年からですね？」

「さうなんですよ、ある建築會社に勤めてゐたんですがね、そこがつぶれたも同様になつちまひましたのでねえ。それから實際苦勞しました。」

「その頃、奥さんは無論おありだつたんでせう。」

「ありました。しかも貰つてから一年もたないうちですからね。實際僕はそんなことを考へると何んと云つたらいゝか憂鬱以上ですよ。」

「仕事を無くしてからは、どうしていらつしたんです。お國からでも仕送つてもらつてたんですか？」

「そりア、三ヶ月はさうしても貰ひましたよ。と云つて、僕の實家はだめですが、家内の實家が少しいゝのでね。けれども貴方、一年も二年も、そんなことが出来ますか？」

「そりアさうですな」

「きまりが悪いから話したくはないが、僕はソラ神宮野球場へ行く道で、キヤラメルや何かを賣つてゐるでせう。ある時なんか、あれをやりましたよ。ねえ、僕だつて大學出ですよ、その男が大道のキヤラメル賣り……」

「仕事は捜してあるかなかつたんですか？」

「冗談云つちやいけません。歩きましたとも、足をスリ、コギのやうにしてね。そして、色んなこともやりましたよ。藥屋の外交、鏡屋の外交……。しまひには電車の車掌にならうと思つたんですが、それだけはやめてくれ、亭主に電車の車掌になれる位なら、死んだ方がいつて家内が云ふものでね。」

「おやめになつたんですか？」

「やめましたよ、やつぱりためですね。僕等にはまだ見榮や外聞があつて……」

「でも、見榮や外聞のあるうちはようござんすわ。もう今となつちや、それどころぢやござ

「いませんのよ。」

「……………とこれは奥さん。」

「さうなんです。そりア、こゝにかうしてダンスや本箱もありますけれどね。中はガラ／＼ですよ。」

「今までが今迄だつたでせう。ですから、急にみじめな有様を近所に見られたくはありませんしねえ。——お湯へ行く五錢さへこの頃では十日に一度位づゝにしてゐても、まさか、着物を急にポロ／＼のつぎだらけのものも着られませんし、妾どこかへ越したいと思ひますのよ。」

「所が、それが出来ないんです。家賃がたまつてるし、拂ひがたまつてるしでね。」

「ですから、本當に辛いんです。妾、こゝさへ越せたら、それこそ本當に近所の人すゝぎ洗濯だつて、何んだつてするつて云ふんですけれど、こゝにゐたんではねえ。それでなくつたつて、近所の人からあそこでは旦那が遊んでゐるけれど、何してゐるんだらう？……なん

て云はれてゐるんですもの。」

「さうでせう、それアありませう、しかしひがまずにゐられますか？ 貴方なんぞ経験がないからそんなことが云へるんだ。」

と津山さんは記者をにらみつける。記者は危く話をかへた。

「現在は？」

「保険の勧誘員をやつてます。が、だめですから、僕はいつそ巡査にならうと思つてるんです。」

「巡査に？」

「巡査なら口があるつて、この間友達があつてましたからね。」

「奥さんはどうなんです。賛成ですか？」

「え、妾、もう何も云ひませんわ、食べられなくてヒ、ポシになるより巡査になつてもらつたほうが、どの位いゝか知れませんもの。」

とちつと奥さんは下をむかれる――

「さうだ、さうだ。」

と津山さんは、ヒステリーのやうに急に笑ひ出した。「昭和五年五月十九日」

以上第一例で、職業紹介の不信、僻みの起る必然の心持、見榮外聞のあるうちがよいがこれが取れたらどうなる？と云つたやうなことが考へられるでせう。これ等は一括して後に述べることにする。

『栄養不良と心配で、妻は乳がとまる。血の出る様な電車賃も空し、天を怨む兄弟二人。』

東京市外、戸塚町諏訪の窪地。恐らくは、一年中地面の乾いたことのないであらうやうな、ジメジメした所。そこに建てられた三疊と四疊半、二間の家を借りて住んでゐる榎田吉次郎氏は卅五歳、學歴は早大中途退學、家族は卅歳になられる奥さんのよしえさんと、今年早大を出た弟さんと、それから二つの子供さんが一人の四人暮し。失業されてから、もう一年になるのだと云ふ。

「何からお話ませう？ 何から申上げてても、口惜しいこと、癪にさはること、悲しいことで胸が一杯です。」

と榎田さんはおつしやる。

「何からでも結構です。その口惜しいこと癪にさはることからでも……」

「かうして失業してから、一番腹か立つてならないことは、新聞の案内欄に出てゐる求人廣告です。あんな出鱈目な、ひどいものはありません。こつちは明日家族に食べさせるお米さへない有様ですから、溺れる者は藁でも掴むやうにそれを目當てに出かけて行きます出かけて行くつたつてたゞちやありません。血の出るやうな電車賃を使つて行くんです。すると、どうですか。けふは都合が悪いから明日来い。けふは主人がゐないから駄目だ、やれ保証金がある。自轉車を買へ。一つだつて満足にスラストラと雇つてくれる所なんぞありアしません。自轉車が買へたり、保証金が納められる位なら、誰が新聞廣告の求人案内を目あてに、訪ねてなんぞ行くもんですか。こつちは明日の米さへないんです。」

「そんなにあてにならないのですかねえ？」

「そりア、何パーセントかは確實なものもあるでせう。私はこの一年間歩いて見たんですが、結局は現在ご覧の通りです。いゝ加減いやになるぢアありませんか？ありア、まるで首つりの足を持つて、却つて引つばるやうなものですよ。」

「職業紹介所は？」

「無論行きました。けれど、あそこだつて當てになりアしません。始終いつて新たに頼み直さ

なきアならないんです。この困つてゐる人間にとつて、その足代を考へて見て下さい。」

「でもそれは僅かなものぢやありませんか？」

「僅かなもの？、ごらんの通り持つてるものを片ツ端から賣つたり、質に入れたりして食つてゐるんです。いや食つてゐるんぢやない、食つたり、食はなかつたりです。その人間にとつちや七錢だつて五錢だつて大金ですよ。見て下さい、可愛さうに、心配と恐らくは榮養不良からせう嬢の乳が急にあがつちまつたんです。」

「お乳が？」

「この頃こそは、馴れてしまひましたが。その當時、乳を欲しがつて泣く子供の聲は、父親であり、夫である私に、どんなに悲しく響いたでせう？そんなことは職のある貴方がたには、お分りになりますまい。」

「弟さんは何をしていらつしやるんです？」

「この弟も失業です。幼い時両親をなくしましたので、親代りになつて學校を出してはやりましたが。いや、それも去年私が失職してからは、弟はいろ／＼なこと——半勞働をして、漸く學校を出たんです。すると、これも仕事がないんです。職業紹介所へいつたら、貴方がたのや

うな人はあと廻しにしてくれと云はれたさうです。」

「つまり學校を出たばかりだからですか。」

「さうでせう。けれど、兄弟揃つて一家が食へないんです。それでも後廻しにされるんでせうか？」

「さうですなあ。」

「この頃ちやもう賣るものも、質へ持つて行くものもありません。嬢も、もう、質屋へ行くのはいやだと云つてゐます。持つて行くものがあんまり哀れだからです。無理もありませんや。」

「家庭の中で喧嘩なんかしませんか。」

「しません。それ所か嬢は、私が仕事をさがして歩いて歸つてくると云ふので、自分の食べる分をさいて私にくれるんです。——私はその嬢の氣持が不ひんで、忘れられないんです。だがさう云つてもやはりうちの中は暗いですよ。私はもういつでも、心から子供をあやしたことなくありません。」(昭和五年五月二十二日)

第二例に於いて我々は如實に職業紹介所の何んたるかを知ることが出来るではないか。案内廣告の何んたるかも知ることが出来得やう。更にこうした人々の抱く考へで、よしそれが漠然とし

たものであつても、口惜しいとか、癪にさわるとか、悲しいとかとの感情はどう成長して行くものであるか？それは云ふまでもなく轉向の成行きを來すものではあるまいか。

『ゆく手は眞つ暗ら、

氣も狂ひさう！

廿年を囚人教化に盡し、失業から世を呪ふ。清水芳山(假名)さんは、今年四十六歳で十六のお嬢さんを頭に六人の子の父親だ。奥さんは三十九歳——男の四十六と云へばまだく働き盛りなのに、失業してもう四年になると云ふ。しかも學歴は東洋大學卒業。

「御承知ないかも知れませんが、監獄で囚人にだけ讀ませる、窓の光、と云ふ月三回の新聞を一人で編輯してをつたのです。初めはその新聞も小さなものでしたが、一生懸命私が廿年の間欲得を離れて働いたので評判もよく、この頃では儲かつてゐたのでした。するとまさか儲かつてゐたからでもありますまいが、四年前、その新聞を政府の手にとり上げられてしまつたんです。そして私はお拂ひ箱………」

「一文も手當なしですか？」



「いや百五十圓もらひました。詳しくお話すればいろ／＼いきさつもあつたのですが、結局まあ私は百五十圓でお拂ひ箱でさあ。——それからですよ失業の振り出しは……」

「しかし、政府でとり上げたのに廿年もた貴方に、たつた百五十圓とはひどいですね。」

「政府なんて人間一人や、その家族のことなんか考へちやぬないんでせう。しかし、實際困りました。何しろ家族がうようよゐるでせう。どんなに險約したつて三度のご飯を満足に食べたら七十圓や、八十圓はかゝるんです。そんなお金が何處から出ませう。仕方がないから學生時代から世話になつた先生の紹介で、ソリア飛び廻つて見たんです。けれど駄目です。雑誌や新聞は無論のこと、事務員だつて雇つてくれやしません。——いくらでもいゝ、月給の高は決して不平を云はないからと云つても、まあ、それだけの御家族があつちややつて行けないでせうから——とかうです。——實際考へましたなあ。廿年もの間、暗い生活をしてゐる人人のために、自分の生活のこと等忘れて、また自分の老ひ朽ちることなども忘れてどれだけでも暖い明るい光りにふれさせて上げたいと云ふ一心で働いて來たあげくが、自分は愚か妻子まで路頭に迷はせる有様なんですからねえ。」

「ですから、この間もね、私主人にくつてかゝりましたの。こんな不合理な世の中つてあるものか私たちのやうに清い心をもつていつも人の爲人の爲と思つてやつて來たのに、こんなに困るなんて、そんな不合理な世の中なら叩き潰しちまつたはうがよつぽどいゝつて、さう云つてかゝりましたの。」

これは奥さんのお言葉だ。

「しかし暮しのはうは、どうして來たんですか？」

「仕方がありません。原稿でも書いて賣らうと思ひました。安い原稿を、そして博文館や講談社へ持つていつたんです。けれど、無論賣れやしません。私の書くやうな文章では古くてだめださうです。」

「それでもね昔の先生方が氣の毒だつて御自分の本の仕事や校正を時々廻して下さいますの。それから昔拂ひ込んでおいた保険の解約をしてその金をとつたり。それから持つてるものはそれこそ子供の帯までも質屋へ持つてくんです。——見て下さい私はこの浴衣一枚きり。ですからいつもエプロンをかけるんです。主人もさうですから、家にゐる時はごらんの通りの寝巻でゐるんですの。」

「奥さんもお働きになりましたら……」

「無論働いて見ましたわ。ついこの間まではツムギを背負つて歩きましたの。けれど重いばかりで賣れません。そのため胸と肩を痛めてかへつて醫者がよりです——けれど私貧乏は何んでもございませぬのよ。結婚して一週間目に質屋にいつた位なんですもの。しかし一體このさきどうなるんだらう、と云ふこの不安がたまらないんですの。まるで暗闇を手さぐりで行くやうです。せめてあとどれ位辛抱したらかうなるつて分かつておれば、それを楽しみにそれこそ一度の御飯でもよござんすわ。けれどさうぢやないんですもの。こんな氣持ちがもう半年もつゞいたらきつと氣違ひになりますわ。」

「それです。その不安です。この不安をこのまゝにしておいて政府の思想善導も國民教化もあるものですか。——それにかうして貧乏して失業してゐると、親類まで馬鹿にします。——そんなキタナイなりをしてゐる惨めな親子は自分の親類ぢやないと云ふやうな顔をします。それが實に口惜しいですよ。」(昭和五年六月六日)

以上のことがらによつて我等は何を見たか人の爲になつてゐても、つまり、善因を蒔いてゐても善果は如實の世界では結ばぬものだと言ふことが知られる。それと同時に、清水氏の云はれ如く、改符當局者は人間一人がどうならうと、その家族がどうならうと、かまわぬ。そして漠然

とした不安暗黒の世界へと追放する。かくて失業界に放浪する人々に對して不合理な社會の實相を見せつける。失業の勞苦と不合理な社會組織を味つたり、見せつけられたりしたものは極度の不安に襲はれる。この不安は政府の思想善導も國民教化も何かの爲にする芝居でしかないことを見破らせ、それ等を叩な潰さんとの心持を惹き起こさせる。實にこの不安をのぞくことなしには、どうにもなるまい。——と云ふことを我々は教へられた。以上は讀賣新聞の「どうしてゐる？失業者の家庭欄」より得た資料だがこれはまだよい方だ、食はれずして、保険欺詐をして刑務所に囚はれるのも——それも妻子が可愛いゆえから出るものが多い。だからその妻が、

「あの人も、元から決して悪むい人ではなかつたんでございます。え、え、え、そりアもう私がつよう知つてをります。けれども食へなかつたからでございませぬ。」

と云つて世の爪ハジキを忍び、罪せる夫をかばつてゐる、罪せる——何がそうさせた？——父を持つた子がこう云つてゐる。

「お父うさんは可愛さうだ、お父さんは悪い人ぢやない。」

と云つてゐるのを見ても子に及ぼしてゐる彼女の父の慈愛の程が解るではないか。世の宗教家は一體これをどうすればよいと云ふのですか。どう一體これを解決すればよいとの腹案があるの

ですか？曾つて高島米峰氏がこう云つたことがある。

『殺人的不景氣』

虫がよすぎると云へば佛敎僧侶の中にも、かうした連中が少くないやうだ。食へないで困つてゐる人、一家離散を餘儀なくしてゐる人、親子心中、夫婦心中、さては強盜から追剝ぎ、殺されるもの、殺すもの世は誠に一幅の修羅道繪卷を見るやうではないか。大きな寺に納まり澤山な檀家の信施に生き窶かに酒色の快を貪つてゐる僧侶達の眼にはこれが見えないのだらうか。こうした言葉を聴くにつけ、我々は所謂伽藍佛敎の何んたるかを窺ふことが出来るだらう。この間に處して、天理敎は、ダメの敎、實の敎、終りの敎、として敎界に君臨した。そして、その敎理からこれ等を一體どう説明しようとしてゐるのか。一體どう救済しようとするのか、その主張を聞こう。

「トントン拍子で出世するのも、人から賞められるのも、敬はれるのも、不自由なく面白く此世をいさんで通らして頂くのも、又身上なやみで苦しむのも、不時の災難に出合ひますのも、これ皆この世でなした因縁か、さもなくば此世へもちこした因縁に外ならぬので御座います。

少しも自己の心事行爲に心附かず世を咒ひ不運をかこつは全く愚の至りと申さねばなりません。

ん。(天理敎とは如何なる宗教か)

『例へば大震災があつたとする、これによりて貧乏した。そうすれば、震災で貧乏したと思つてゐる、が震災で家運を挽回した人がある。だから、震災で貧乏したとは云はれない。不景氣は事實である。がこれによりて自己の景氣を挽回したものがあつた。だから不景氣によつては貧乏になるのだとは云はれない。して見れば、景氣も不景氣も心からである。不景氣を味はない心が必要である。國狹土命様(金錢縁談萬づ繼ぐ神様としてゐる。)の心になつた人だけがよいのである。人間の心持も切れないで長い心をもつのが國狹土命になつた人なのである。生きても死んでも魂がついて切れない爲には、繼いで行けば、切れない心を持つことが出来るのである。これには不景氣が無い。不景氣を感じる人々はとどかない、足らないのだ。それは國狹土命様の旨にかなはないのだ。だからつねに切れ／＼になるのだ。』

「病難にかゝるも、大難に罹るも、水難に罹るも、風害にあふも、虫害にあふも、水害にあふも、盗難にあふも、男難にあふも、結婚難にあふも、職業難にあふも、生活難にあふも、過去もしくば現在に於て、凡て皆其れに相當する因縁が積まれてあるのである。」(大平良平氏著「天

以上三例の天理教側の主張を見るに一體どう云ふ結論になるか。詮するところ、現在の社會組織に於いて仕たい放題をしてゐるものはそれ相當な因縁があつてそうしてよい境遇にあるのだ。生活難、職業難、病難、災難はそれに相當した因縁の種を前世か今世に蒔いて置いた結果である。若しくは、國狹土命と云ふ繼ぐことを仕事とする神様の意に反した爲めに切れぬの生活をやるやうになつたのだと説く。或は又、不景氣と感ぜない心の持主には不景氣はない。天災地變が不景氣や病難災難の原因となるとは云はれぬ。何故ならば、それ等によつて儲かつたものもあるからと説く。こゝで我々はよく考へて見なければならぬ。幸福は今間はぬこととするが、或る人の不幸、病難は、或る人の作つてをいた因縁のあらはれであると云ふことを斷言することは、よく考へてせねばならぬ事柄ではあるまいか。そうしたことを斷言するには、その人の因縁が判然と分つてをらなければならぬ筈である。具體的なものとして、前掲、清水氏の例を引くが清水氏は廿年の間氏の言はれるやうに囚人ばかりに讀ませる「窓の光」を編輯し、慾得を離れて、囚人教化に働らかれた。それが一端お拂ひ箱となるや随分の苦勞を嘗められてゐると御本人も云はれ

ゐる。我々は此記事を見て、氏が慾得を離れて、囚人教化に盡されたことを知ることが出来る。何故なれば、慾得を離れなかつたならば換言すれば、氏の事業中に慾心があつたならば随分の貯へがあることを得たらう。ところが氏に於いてはそれがなかつた。と云ふことは氏が四十六歳の現在失業苦にせめられパンにおびやかされてゐると云ふ一事で知ることが出来るではないか。天理教はこうした失業苦にせめられてゐる氏の如き境遇を、氏の因縁によると爲し、氏の埃りの結果だと云ふのである。今一步を譲つて、天理教のこうした主張を受け入れるとする。そして天理王命が手入れを爲したものであるとする。こうしたことを許してをいて余は次の問題を提出する。

これに對しては當然天理教當局並に天理教學者の責任ある回答があることと思ふ。これは、

1、天理王命は清水氏が廿年間囚人教化てふ人助けの事業に専心して來たのに氏の埃りを切り換へて下さらなかつたことはどうしてあるか？「たんのう」は前世の懺悔と受け取ると云つた天理王命である。「たんのう」と云ふ一行爲に對しても尙ほ前世の惡因縁を斷絶すると教へてゐる。更に、「人を助けて我身助かる」と云つてゐる。それがどうして清水氏の場合に於いて、助からぬ失業苦におびやかされるやうになつたのか？清水氏の囚人教化事業が人助けにはならぬとでも云ふのか？

2、清水氏の囚人教化が人助けなりとしても清水氏の積まれた、埃りなり、因縁なりが廿年間の長い人助けによつても切り換へてもらうことが出来なかつたのか？もし然りとすれば、人の因縁のつもつてゐる度合ひをどうして一體計算することが出来るのであるか？

3、『たんのう、たんのう、たんのうは前世の懺悔と受け取る』と主張して置いてある。『たんのう』よりも層一倍大切な人助けをした氏を何故に助けずに失業苦、生活苦てふ苦惱に陥し入れたか？（たんのうは消極的であり。人助けは積極的であるから、たんのうよりも人助けの方が價值がある筈なのに。）」

以上の設問を天理教は如何に解答するか。誠に興味ある問題ではあるまいか。

こうした人々に對して、社會正義は當然の幸福を與ふべきものだと言張する。だが然し、事實は幸福を與へることは出来ないのである。社會正義の必然として當然幸福を受くべきものが、幸福を受け得ないと云ふことは、そこに何等かの支障があるからであると云ふことは、説明するまでもなく明らかなことではないか。その支障となるべきものはなんであるか？それは社會正義とソリの合はない、不合理な現代の社會組織ではあるまいか。合理的な社會組織であるならば、合理的な社會正義の標準にピタリと合致すべき筈である。こうして、ピタリと合理的な社會正義の

尺度に合致する社會制度であるならば、當然清水氏の如きは、氏が今舐つゝある如き失業苦も生活苦も知らずに過ぎ得るであらう。だのに、氏に對して現實の如き辻褄の合はない結果を招來せしめたと言ふことは、最も明瞭に現代の社會組織が人類の理想とせる、社會正義に合致せざる組織形態を取つてゐると云ふことでなければならぬ。こうした事情のあることを度外視して、清水氏の如き結果に終つたものに對して口を揃へて、

「過去もしくは現在に於いて凡て皆其れに相當する因縁が積まれてあるのである。だから表はるべくして表はれて來たものだ。」

とか、

「それは、萬事を繼ぐ神様たる國狹土命の意にかなはなかつたからだ。そして又、不景氣を感じるから不景氣なのだ。苦と感じてゐるから苦なのだ。」

と云つて見たり、

「身上惱みて苦しむのも、不時の災難に出合ひますのも（清水氏の如く）、これ皆この世でなした因縁かさもなくば此世へ持越した因縁に外ならぬので御座います。」

と答へてゐるが、吾人は清水氏の如き人に對して、こうした、解釋で氏の苦境を片附けること

が出来るとせうか？出来るとすればそれは天理教屋位のもではあるまいか。何んでもかでも因縁だと云ふことは、絶對的の宿命論であり、運命觀であることが分るではないか。更に、「たんのう」の眞意義が喜び、勇みのないものはダメだと云ひながら、明らかに「たんのう」は「あきらめ」の思想があることを認めてゐることゝなるのではないか。「たんのう」を進めながら、「あきらめ」を「たんのう」に加ふるべからずと云ふのは、阿片をすゝめてをきながら阿片に酔つてはいけな、いと云ふのと同じではないか。起きてゐなければイケナイと云ひながら睡眠劑を飲ませ、眠むつてはイケナイと云ふのと同じ事ではないか。實に恐るべきはこうした天理教の口上ではないか。或る論者が云ふまでもなく明らかに邪教の色調を帯びてゐるものであるといはねばなりませんまい。邪教なりと斷するのが本當ではあるまいか！

上掲三例の不景氣に對する解答は一體不景氣に對する返事となつてゐるのか？不景氣だ〜と云ふ。食ふに困る、暮すに困る、仕事が出来ない、だが無い、——失業苦が来る、内職でもよい——それでは一家終日かセイデモ充分腹を満すに足る賃金を得ることは出来ぬ。失業するものが多い——内職するものが増加して行く——内職もなくなる。——勞賃が前よりも安くなる。益々食つて行くことが出来ぬ。

○仕事が出来ない——だが仕事がない。

○内職でもよい——だが内職もない。

○内職にありついた——だが一家が充分に食つて行くことが出来ぬ。

○何んでもよい働らかしてくれ——だが働く口がない。

○食はなければ死んでしまふんだ——仕事が無いが、仕事がないのか。が、仕事はない

○不景氣だ〜子供が少し位泣いても出来るだけ小使ひを使かはせるな、ブツテモよい金を出

さぬやうにしる？

コウシタ世相を天理教は因縁だ、各自の心がらだと説く。

○やり切れない。長男を仕方ないから小僧にやれ學校等はどうでもよい、次女は田舎の兄のところへ、三男は貰ふ人があつたら可愛い、がやつてしまへ。嫌お前は女中にでも入れ。俺あ庭掃除でも捜そう、あるかな。——一家離散だ。

○が女中も庭掃除もないんだ。——人がアマツテゐる。——田舎へ行つて百姓でもしよう——が農業失業者がウヨウヨしてゐる。

○働きたくとも仕事がない！——親子心中、夫婦心中、一家心中、狂氣、自望自棄、放浪、追剥

欺詐、強盜、人殺し、

コウシク世相を天理教は因縁だ、各自の心がらだと説く。

イクラ此の世の苦に絶え兼ねて自殺しても生き通しの理で又來世は現世に受けた如き苦しみを受けるのだ——と天理教は説く。

自望自棄、放浪、追剝、欺詐、強盜——これ等は大きな罪となるのだ。大きい埃りだ。悪因縁だ。悪果は必ず來るぞ——と天理教はウソブク。

以上の如き社會苦に對して、以上の如き解釋が天理教の態度であり、天理教の不景氣挽回に對する意見であるのだ。

その前提より必然に來るものは何か？いんねんを切ることであり。いんねんを切るにはどうすればよいか。いんねんを自覺し（自覺とは現在こうして苦しむのは前世に悪い埃りを積んだからだらうと思ふことである。）「たんのう」（我慢、忍耐、あきらめ、勇み、現在の境遇を喜ぶこと）して、いんねんを發散し（クヨクヨせざることを）、つくし（天理教會に金を納めることを、喜納金をあげると云ふ）、はこび（教會の爲めに無料で働らくこと）をする。そして、これが人助けになり、こゝで、自分も助かり自分が不景氣と思つてゐたのがなくなる。不景氣は全くなくなるの

である。と説くのが天理教の不景氣挽回策なのである。

余は敢へて云ふ。つくし、はこびをする人々はコマラヌ手合なのだ。それ等からは金を捲き上げることも出来る、又無料で教會の爲に働らくことも出来る。が、金も一文もなく、食はぬ爲にやせて、水腹ガブガブで力がないものから、金を取ることも出来ず、無料で働らかすことも出来ない。——だから、天理教はこれを救はむとしないのかと問ふのである。若し、これ等最下層に屬する人々を救はぬものとするならば、谷底せり上げの教だナンドのオタク言は止めてもらいたい。そして、公々然と欺詐屋の看板を出してもらいたい。そして國家に重税を拂ふべきことを、余は要求する。

若し、眞に教祖の眞意を繼承して、谷底せり上げを理想とするならば、搾取を目的とする説教は止めて、橋下に寝るもの、小路道路上に横はるもの、貧困と病苦の爲めに喘えぐものを一刻も早く救濟實行隊を作つて救ひ給へ！それ等の不遇の人々を教會に收容し給へ！神の殿を開放し給へ！ありたけの金を投げだして之れが、救濟戦上に立て！然らば、余とても又天理教の眞實の宗教なることを認むるであらう。

だがこれを爲さざるものとせば、余は、

天理教は大山師だ！

天理教は大欺詐屋だ！

天理教は金儲の團體だ！

天理教は宗教の假面を被る最も醜き搾取屋だ！

天理教は阿片押し賣の商賣人だ！

天理教はお爲ゴカスに人の懐を狙ふ大掏摸だ！

と絶叫する。その叫びは確かだと大鼓印を押すことを辭せぬものである。

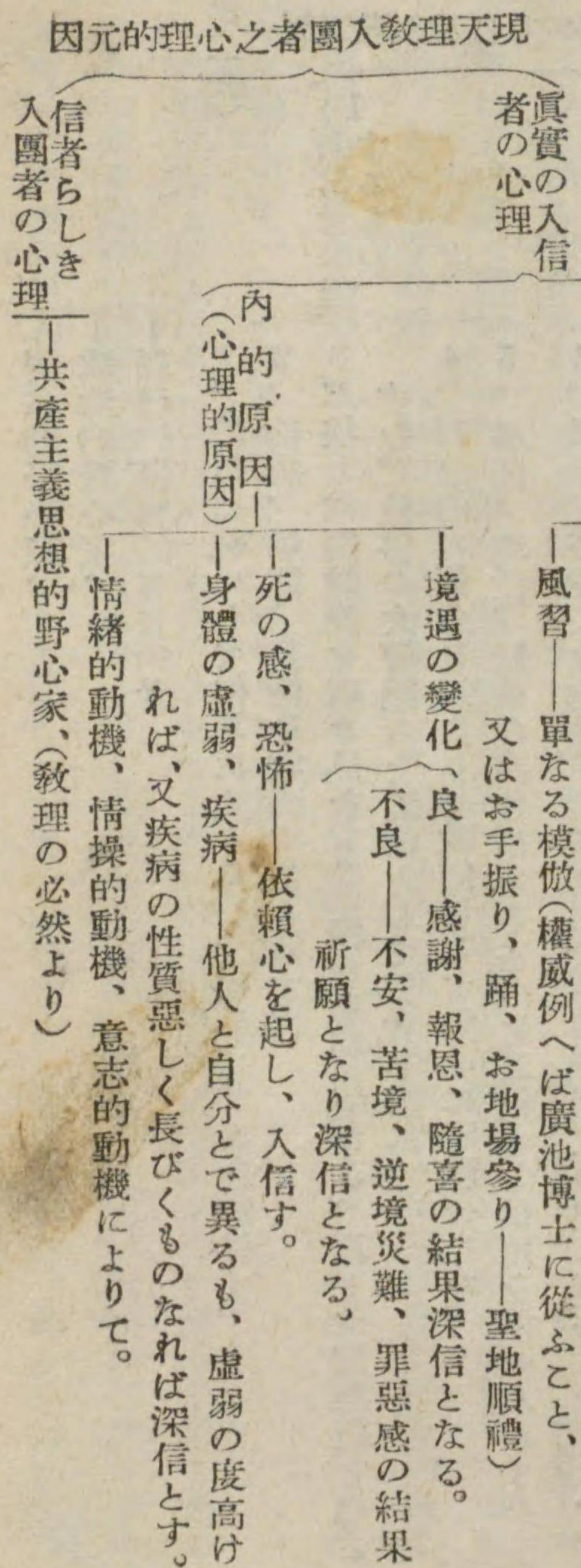
實に天理教の不景氣挽回策にはアキレザルを得ないものである。噫教祖は現狀を如何に見るか墓下に涙さんぜんたるものがあるだらう。

### 一、天理教の未信者、信者、下級教師に忠告す。

天理教は何故に今日の大を爲したか。と、云ふことについて縷々述べて來た。が前述のものは天理教側の方法手段であつた、方法手段が精巧を極めてゐても、その方法手段を受ける信者なるものが相應してゐなかつたならば、物事は成就せぬ。然らば必然問題となるべきは、今日の如き

六百萬と號する信者が如何にして、組織せられ、如何にして天理教の信者となつたか？入信の動機はどうであつたか、と云ふことを考へねばならぬ。そこで、余はこれ等入信の動機に對して詳細なる叙述を必要とするものであるが、余の都合によりて、これ等の詳細なる記述及びその證據は他日に譲ることとする。然れども余の研究の一斑を示す爲、次に入信の原因並に現勢維持の方法について之れを表示してほんの暗示を與へるにとどめて置く。

#### (第一表)





(第二表)

賣名の野心家、  
政治的野心家、  
利己的獲利的有目的者

(1) 未信者に對するもの

- 1、教理單純にして俗耳に入り易し、而して甘きを香はす。
- 2、治病、煩悶、災難を救済すると稱す。
- 3、埃り、因縁觀を吹き込む(2の機會を利用して)、而して罪惡觀を起さすむ。教勢の大智識者を看板として信者を誘ふ。
- 4、利己的の觀念を起さしめ教師をして熱心に説教せしむ。
- 5、學問、地位、財産の高位にあるものを看板とし信用を博せんとす。

(2) 信者に對するもの

- 1、積極的方法  
イ修練——情緒形式を情操形式の型に變ずるやうにす。  
これは信仰の永續上ごく必要な事である。  
ロ自己教理に合する智識を授ける——深信たらずむる爲ハ境遇に合はせるやうに教理を説く、お地場參りをすむ(本部に金が落つるから)
- 2 消極的方法——禁止、抑制——天理教團に對して不利なるものに用ふ。  
轉換——天理教團に不利なるものは之を有利なるものに轉ずる。

他教との比較——自己の教理の優れることを示す爲他教と比較す。

(3) 教師に對して

- 1、智識程度低きもの多し、故に反省思惟なく信ぜんとする意志のみ強し、従つて、理非分別のわからぬ盲信者を作り、宣傳に際して都合よし。
- 2、信者として教會にあげつ切りであつたため生活に支障を來し、生活法として教師になるより外無く従つて生活意慾強く布教に熱心となる。

以上第一表に示したる如きものに對して、どんなにか、天理教々理が便利であるかと云ふことは、さうと讀んで來られた人々には、さう背づかれることであらう。境遇の變化の良、不良なるものに對して、又、恐怖、身體の虚弱、病氣等に對してこれを自教に導びくに至極便利な、いんねんの理、たんのうの理、八埃の理、ひのきしんの理、助け一條の理があることは誰れでも知ることが出来るではないか。萬事が神様のすることだと云ふ教理の根本問題より、喜びに對しても悲しみに對しても、ツケ込み得るやうに出來てゐるからである。

「天理王命と云ふ神名は古事記にも日本書紀にもないので國學者連中はそんな神は無いと信じなかつたが如何に知識學問があつても身上事上の惱みの時は(病氣、虚弱、境遇の不良化等のときは)至極心が弱くなつて醫者から見限られた場合はひたすら神にすがる、助けを神に乞ふ

を見るとこれは上述の余の提言の裏打ちをなすことが知られよう。弱處病處につけ込む、と云ふことは明らかに人間の弱點につけ込むことであり、不健康な心理的狀態に乗じて事を爲さんとする意圖を含むものである。

さて此處で注意せねばならぬことは、不健康な心理的狀態と云ふことである。この状態は一口で云ふならば、言はゞ理性の滅却を意味するものである。元來吾々が理性の動きを考慮に入れな  
いとき、換言すれば感情で動くときほど、前後の見さかひもなく、反省意識が消えて、信ぜんと  
する意志が強くなり殊に自分の利害に關するときは利益の方を信じやうとする心持が強いもので  
ある。であるから、病氣のとき何かの治療をするにせよ、この治療で全治したいといふ念が、要  
請の必然として全治するといふ心持になり、この持續が全治したとの考へとなることが屢々であ  
る。こんなことは例へば機質的疾患であつて、解剖的に病的であることを明瞭に示してゐながら  
當の本人が病氣ぢやア無いといふやうなものであります。これと同じやうに、以上のやうな心理  
的作用から同じやうな理窟で次の事もいふことが出来ます。それは、病氣で無いものでも——病  
理學の對象とならぬ體をもつてゐるものでも——病氣であると自分一人ぎめにきめて考へ込んで

ゐるものがある。これには、ヒステリー、ヒポコンデリー等の病的傾向のあるものに多く、面白い  
ことには、想像妊娠といふ病氣もあり得るといふことである。これ等は心理性生理的な理由から  
當然あり得ること、その程度は、人々の特異性によりて差異があるだけである。これを見ても如  
何に精神的即ち心理性生理的影響が解剖性生理的作用に甚大なる作用を及ぼすものであるかと  
いふことを知ることが出来ますけれども、我々はすつかりと、次の事を知つてをらねばならぬ。  
それはあると思はれたものは、必ずしも、あるものではない、といふことである。つまり自分は  
病氣だなあと思ふから、又は病氣であると思はれたから——自分は病氣であるとはいはれぬので  
ある。と同時に、自分が癒つたと思ふから、癒つたんだとは云はれぬと云ふことである。こう云  
ふことは、彼が考へてゐることの病氣が眞に病氣かどうかを決める前に彼が病氣に對して抱いて  
ゐる考へが先づ病的だと云ふことであると云ふに過ぎないのである。そして、こうした、物事に  
對する病的な考へは多く理性的考慮から生れないで、感情的利益關係から生れることが多くある  
と云ふことを銘記されたい。従つて、病氣になり、災難になると云ふやうな場合にはよく自分の  
弱處、病處を知つて置く必要がある。そして、それにツケ込むものがどこをネラツテ自分にハタ  
ラキカケルかを知ること努めねば大變損をするし、又無駄骨を折ると云ふ結果になるのであり

ます。

以上は病氣のときの心理状態に觸れて見たのでありますが、人間の弱點——病氣の原因と見てもよい所のもの——と見てもよいものに單なる模倣と云ふのがある。元來人間の行爲はタルド(an Gabriel Tarde, 佛蘭西の社會學者、一八四三——一九〇四)も言つてゐるやうに、模倣から生ずることが大部分だと云つてよいのであります。普通は主觀的な範例が客觀的な範例よりも先に模倣されるし、優越的な地位にある人の範例は貧弱なそれにある人の範例よりも先きに模倣されるものであります。又、保守的なものは嫌新性を有し因習模倣に陥るものであり。進歩的なものは愛新性を有し流行模倣に墮しがちである。これ等はいつも誤つた行き方であつて、まづ模倣せんにはその模倣せんとするものが自己に取りて、又社會的に見て、或は文化的に見て、價値があるかどうかを、よくよく考へた末に模倣することをせねばならぬのである。これを爲さずして單に模倣するものありとせば、これ又、病的なものであり盲信的なものであると評せねばならぬのである。これ等を決定する標準として、余は宗教學、心理學、生理學等の研究を懲慙して置きたいのである。

而して我々が社會生活を爲すに最も注意せねばならぬことは——若し注意しなければ、人生に

於いて精神的にも物質的にも大變損をすることは——風俗習慣による一般的優生優位階級をそのまま無反省に或る特殊の優位なるものにアテハマやうとする性向のあることである。例へば、口を酔ッ、バクする程述べて來たやうに、建物が大きいから立派なんだ。とかあの人は偉いから、あの人のすることは何んでも偉らいたとか。博士だから物識りだとかあんなに信者があるからキ、クに相違ないとか。あの人は堂々たる風彩をしてゐるからキツト偉らいたらう等の類いである。これ等はキ、ソ、ウだから確かにキ、クと斷する様なものであつて、こんな態度で世渡りを仕様なんて思ふと、それこそ損のし通しをせねばなりません。現代のやうな時代は殊にそうであるから充分注意せねばならないのに、人はよくこんなことを云ひもすれば又信するものもある。天理教が官許であるし、信者は六百萬人もある。教師が一萬二千人もある。教會が一萬も全國並に外國に分布してゐる。年收が一億だと云はれてゐる。ナントマア！大したものではないか。六百萬の信者には上流階級の人もある。博士もある。學者もある。富豪もある。これからしても、きつと偉いものに違ひない。だから、キツト効くに相違無い。確かに効くだらう。確かに効くに違ひない。と云ふに至る。これが普通人の考へ方なのであります。こうした考へ方が絶對的のものでありますれば、讀者諸君のとつ、くの昔しに知つてゐる通り、大本教のあゝ云ふ事件もあります

まいし、國務大臣の瀆職事件や、背任云々等の醜事件もありませんだらうし、又、同じ天理畠から出た、大西愛次郎の天理教研究會事件も起りはしないのだ。ところが、以上の事は絶対的のものでないからこうした何々事件と云つたやうなものが起るのです。

俚言に、

「虎の威を借る狐」

と云ふことがあります。これは單に狐が虎の威嚴を借りると云ふばかりでなく狐が虎と同じ威嚴をもつかのやうに見せかける、と云ふことも含まれてゐるかのやうに思はれます。つまり、力なきものが力あるかのやうに思はせ。眞ならざるものを眞なるかのやうに思はせ。善ならざるものを善なるかのやうに思はせ。効かぬものを効くかのやうに思はせ。不明不可知のものを明瞭なもの、悉知のことであるかのやうに思はせる、と云ふ事の寓意もあるやうにも思はれるのであります。このかのやうにが物を言ふのであり、このかのやうにが人をタブラカス道具立てなのであります。だから、このかのやうにが欺詐的の口上を進める最も大切な基礎工事であると云ふこと、極く必要な道案内であると云ふことを知つてゐねばなりません。これと同時に、こう云ふものを使ふものに對しては十分に注意することを極はめて必要であることをも知つてゐねばならぬのであります。

す。だから、カントの後に、かのやうにの哲學を主張するものがあつて、かのやうに考へられてゐるものは存在するのではないと警告を發してゐる。殊に天理教に對しては深甚の注意を拂はねばならぬのである。今日の天理教は確かに世評の如く偉いことは偉い、がそれは組織と人をよせる、かのやうなものを、であるとする欺術師方面に於いて偉いのであつて、それ等に集る人々が希望してゐるやうな點では偉いのではないのである。こう云つたことをよく考へ合はせなければならぬのであります。即ち御利益が決定的にあると云ふのではなくて、人により性質によつて異なるのであります。全然、どんなに熱心に拜んでも御利益の無い人もある。又、何も天理教を拜がまんでも御利益の有る人もある。天理教は前者を「いんねん深き人」と云ひ、後者を「よいいんねんの人」と云ふのは決まり切つてゐる。若しそうであるなら何も神様を拜んだり、なけなしの喜納金を天理屋さんに納めて「人を助ければ我身助かる」等と考へる必要はあるまい。悪因縁の爲めに不幸が續き、災難が絶えず、病氣で苦しむから、人間の力ではどうにもならむ。だから、神様——萬能の力をもつてゐると思はれる神様——を拜みもすれば、頼みもするのだ。これを、いんねんだと云はれ。いくら拜んでも頼んでも、前世の約束だと云はれ。「たんのう」がなければと云はれ。「たんのう」しても、それでもよくならぬ。と「埃りがあるから」と云はれる。一體

結局どうすればいいのか。何んと云ふ面倒な神様だ。何んと云はれても助かりつこはないんだ。コナ神様は蹴飛ばしてしまひと言ひたくなるではないか。

諸君、タブラカサレないやうにすることだ。御注意、御注意。

第二表に於いても、(1)、(2)については以上の説明で明らかであらう。が(3)について少し述べる(3)の1、については既述したからこゝでは詳細に言はぬが、考へると云ふ思想がないから——宗教心理、生理學的に——むやみやたらに信仰々々と叫ぶ。理性で行こうとする信仰に反すると云ふ理非分別を説いて聽かせても馬耳東風でキカザル式態度をキメツケル。これこそ箸にも棒にもかゝらぬものと云ふのだらう。

更に教師諸君に御反省を願はねばならぬことは、貴方等は貴方等の商賣をやりながら人を助けることが出来ないか？つまり、天理教々會の中に立て籠つてではなく、商業に、工業に言はゞ堅氣な商賣に従事してゐて且つ人助けをすることが出来ぬものか？を余は貴方等に聞きたいのである。貴方等は商賣をし、工業に従事しながらでも、貴方等の奉ずる天理主義を貴方等の手近な人々から廣げることが出来ぬのであるか。反對するものがあつてもこれを一人々々説伏して行き天理主義を一家から隣家から一村から一町へ一市へと云ふ都合に廣めて行くのが、所謂教祖の言つ

た、『里の仙人』てふ理想的な救濟法であるのではあるまいか？

余は教祖の遺訓の特殊態とも見るべき、『里の仙人』なることばを天理教々徒總べてが遵奉すべき理想態だと思ふ。これが當然であるべきだと思ふ。而して、商賣的ならざる救濟を爲すべきものだと思ふ。これが眞の『里の仙人』的理想であると思ふのである。これを無視して、徒らに教會を作り、神殿を造營するは無益の工を起すものであると云はねばならぬ。現在、小教會又は宣教會をもつてゐる。會長、所長殿はどんなに苦しい經濟的生活をしてゐるか。それなのに、その上猶上級教會からの擄取に出會つてゐるのではないか。その證據を示そう。

「或る教會では新築移轉の計畫を樹て、再三資金の積立をしたのであるが、教祖四十年祭、又は上級教會の理立ての爲め次から次へと吐き出してしまはねばならなかつた。其後新築移轉の話しが持ち上つた時その上級の會長より、

『お前等はチビ／＼出す氣なら到底神様から大きな御守護は頂けぬぞ。神様は心通しの理を受け取ると仰有るのだからお前等の教會も旬刻限が來たら神様から大きな教會所を與へて貰へるのだ。そんな小さい心でチビ／＼積立てすんな貯へて置く金があるなら皆神様にあげてしまつたらどうだ。お前達の様な汚い小さい根性なら到底この教會には神様の大きな御守護は頂け

す千年萬年經つても新築移轉等とは思ひもよらぬことだ。』

と厳しいお叱りを受けたのであつた。〔「みちのとも」第三十九卷第十四號四六頁〕

これを讀んで諸君はどう思ふか、次の事を知ることが出来る。

- 1、上級教會が小下級教會又は宣教所より理立ての爲めと云つて金を沒收すること、
- 2、貯蓄は汚い小さい心で神様の意に反すること、
- 3、上級教會にチビく出すのは到底神様の御氣にめさず従つて御守護は頂けない、と云ふこと（これは取りもなほさすありたけの金をあげろと云ふこと）
- 4、貯へて置く金があるなら神様にあげてしまへ（實は上級教會長の懐に入る金だ）と云ふこと。

の四ヶ條である。余はこれ等がどんなものであるかを諸君の判断に任すこととする。ただこれ等を通じて、「いんねん」の理より如何に強く宿命觀的アキラメ主義又は投機的な考へが出てゐるか云ふことだけを述べて置く。

だから小教會、宣教所は實に塗炭の苦るしみである。嘗つて、讀賣新聞が新興宗教を紹介し次のやうな實狀を物語つてゐる。

「灰聞するところによれば現在五百萬人の信徒を擁する同教は年一億萬圓の財政を左右してゐるといふことである。その財源は一萬に近い支教會が本部に寄附する淨財からである。これを現在は學校圖書館などに用ゐてゐるが、この費途も同教の成立が大衆の宗教運動としては如何なものか。それよりも支へ切れずして血を流してゐる。可憐の小教會や大衆の貧困窮乏に對して用ゐられたならば意味も出て來るであらう。」（昭和五年六月三日四面）

これほど苦しんでまで君等は上級教會のキゲンを取る必要はどこにあるのか。これよりも何かの官許ある治療法を修め、治療に加味するに宗教的天理主義的行爲を以て谷底に對したならばどれほど教祖も喜ばせることが出来るか知れないではないか。（治療を覺え官許を得る方法は紹介すれば回答す。）

君等がやつてゐる祈禱、おさしけ、おさとしは、實は非醫師的狀態であり、言はゞ法網をくぐつてゐるものである道徳的行爲に反するものであることを知られたい。君等が病氣を癒しに際して、心を癒すのだと云ふて辯解したにしてもこれは詭辯以外に何んの効も奏さぬのだ、君等が疾病を癒さんとすることは所謂、規則外疾病治療の範圍に入るものであるが、これ等は當然取締らるゝものである。現に、大阪では、精神治療、加持祈禱に對して取締規則を制定しようとする意



(イ) 信仰療法で病氣は癒るものか？

先づ余はこの問ひから答へて行くことゝしよう。余等は天理教本部より出る天理教の機關雜誌たる『みちのとも』誌に於いて、おびただしい神祐の記事を見ることが出来る。勿論それには矛盾もあり擡着もある。針小棒大は無論のこと熱病的心理状態からの必然の湧出物であるものも仲々澤山ある。仲には事實無根かと疑はれる多くの節々を有する單なる宣傳の爲めの宣傳的文章に接することも少なからずある。だがそれをもつて、余等は信仰療法で病氣は癒らぬと云ふことは出来ないし、一概にこれを否定することも出来ない。と云つて、これの全部を認容することはもとより出来ない相談である。

で余等は如上の問に對する答へとしてこう答へようとする。

信仰療法が病を癒すことは確かであると余は先づ斷ずる。が、その病狀、病氣の種別性質、病人の差異、病人の性質等に制約せられてであると云ふ條件を前置きにしてである。

さて余は(イ)問に對してこれに條件付きの肯定を與へた。然らば、次に問題となるのは、その條件付きの疾病が何故癒るものであるかを究めて行かねばならぬ段取りとなつて来る。

そこで更に(ロ)問を提出する。

(ロ) 何故に信仰で疾病が癒るものか？

先づ余はこの問に答へるには少くとも生理學と心理學の基礎工事を必要とする。で余はその必要な基礎工事から説明して行くことゝしよう。

元來教養ある人々でも、醫學に昏い人は醫者が病氣を治し藥が疾病を癒すものと考へてゐるのが常識である。ところで藥が病氣を癒すものであるならば、或る疾病に對する或る適應の藥さへ分つてをれば、病として癒らぬものはないと云ふ結論に到達せざるを得なくなる。それなのに分明の病氣に對し分つてゐる藥品を以つてしても病氣が癒らぬときがある。斯る場合には天壽であり壽命であると決めてしまふのである。こう云ふことから、我々は病人に對して働らきかける重要な力の二種ある事を知る。これは藥の力であり、天壽を維持する力である。こゝで生理學の基礎に觸れねばならぬ。天壽を維持する力、健康を持續せしめる力を判然たらしめねばならぬ。さて病氣と云ふのは健康状態(生理的状态)でない、と云ふことである。といふ状態を二大別す



るのが普通である。その二大別とは進行性病變の型に屬するものと退行性病變に屬するものである。前者は痙攣とか、神経痛、炎症狀、その他生理的状態の亢進せることによつて疾病となつたものを云ふのである。後者は麻痺とか、鈍麻、知覺脱失、その他生理的状態の衰退に因りて生ずる疾病を稱するのである。病氣がこう分類される（大體であるが）ならば、治療はこれ等異常の状态を正調の状态に復歸せしむる方法を取ればよろしいのである。この復歸せしめる操作が治療一般である。さてこの治療一般は何に作用するかと云ふに病的現象そのものに直接に作用するものではない。然らば何に對してであるか、と云ふに、これは吾人の體内に自然に具有するところの抵抗力、自然治癒力である。この自然治癒力と抵抗力とに作用してこれらを旺盛にし疾病に對して抗争せしむるに至るものである。それでは、この二力をして旺盛にせしめるのは何んであるかと云ふにこれこそ前記治療一般を指示せねばならぬのである。さてこゝで我等は次のことを知る。

疾病に對しては、自然治癒力及抵抗力を旺盛にする必要がある。その爲めには治療一般を以つて前記二力の旺盛を計らねばならぬと云ふことが理解されるのである。今より二千五百年前既に現代の泰西醫學の殿堂の基礎工事を爲せる醫聖ピポクラテースはかく言つた。

『自然が病氣を癒し、醫師が謝禮を受く。』

と、以つて醫聖の醫聖たる所以を窺ふに足るではないか。昔しよりの箴言に、

『自然は賢なり。』

との傳誦があるがこれ又眞理を洞察せるものゝ言と云ふことが出来る。斯の如く古來より自然力即ち自然治癒力及抵抗力の二力が直接に病氣退治の任にあたるもので治療一般はただこの二力をして補佐するの役目をつとめるに過ぎぬのである。これ故にいくら補佐役が口を酢つばくして諫言すればとて、提言すればとて、主君たる二力の力弱ければこれ又如何とも挽回の仕様なく遂ひに黄泉の客とならざるを得ないのである。さはあれ愚臣に取りまかれてゐても、主君の力だに強固なればある程度までもちこたへることが出来るのである。これほど二力の平衡状態を必要とするものである。而してこれが緊張を計るは病態にありては治療一般である。然らばその治療一般とは何んであるかと云へば人間に對する刺戟であると云ふことに歸せねばならぬ。この刺戟と云ふのは何んであるかと云ふに普通次の如く定義づけられてゐるところのものである。

『一般に生活體に作用してその生活現象、即ち物質代謝を變化せしめるものを云ふ。これを又

は刺戟物とも云ふ。』

と云はれてゐる。この刺戟を普通五種に區別してゐる。即ち、

- 1、温熱的刺戟、
- 2、器械的刺戟、
- 3、化學的刺戟。(藥物的刺戟)
- 4、電氣的刺戟、
- 5、生理的刺戟、(精神的刺戟。心理的刺戟)

の五種である。よつて我々は次にこう云ふことを知る事が出来る、治療一般とは以上の五種の刺戟物で生體を刺戟することであることを知り得るのである。さてこれ等が刺戟物となつて吾人生體に作用するとき平衡を失した非生理的狀態(病態)は平衡に近づかんとして運動を起すものである。斯くて我々は藥物が病氣に效あるとともに精神的作用が病氣に效あることを認めねばならぬのである。然もこれ等が刺戟部位を異にすると雖も、要は腦脊髓神經系統及交感神經系統に對する刺戟交附に過ぎぬのである。この故に生理的と心理的の密接なる關係のある生體に於いては心理的刺戟が生理的狀態に影響を及ぼすことを理解することは如上の様にして出来ると思ふ。

詳細は他日に譲らんも想像を以つて唾液腺を刺戟して唾液を分泌せしめることが出来たり。食物を前にするとき、これに對する食欲の起るとせんか、胃は(食欲が起きることが刺戟となりて)胃液を分泌せしめたりするのである。これによりても生理的作用が即ち精神的作用が肉體即ち物質に影響を及ぼす得ることが分るのでないか。斯くして吾々は精神の肉體に及ぼす作用を理解した。斯の如く、精神が肉體に及ぼす影響によりて種々なる作用を起させるものである。これはその病人の性質、病氣の種類等によりて多くも又少くもの影響を與へるものであるから、肉體硬化や想像妊娠等の醫學的實證に徴しても吾人はこれを認めねばならぬのである。然しそれ等の可能は各人の特異質に依存することによつて差異を生ずるは勿論である。

これだから醫學に於いて機質的疾患と云はれ精神的療法では如何ともすることが出来ぬとされた疾病でもその病人の主觀だけでは治癒したと思ひ込まれてゐることがある。これは確かである。このことから我々は客觀的に治らぬことを主觀的に癒つたとしてゐるものがあると云ふことを知ることが出来る。勿論精神的治療で心理的疾患の治療せられることは何等の不思議ではない。が機質的疾患の場合には客觀的に癒らぬものでも主觀的に癒つたと思ひ込まれてゐることがほとんど全部であると云つてもよい。だからこう云ふ場合はやがては再發し病勢進行して一命を失ふに

至るのが多いのである。

斯くして精神的産物である信仰力を以つてある種の疾病を治療せしめ得ると云ふことが理解することが出来る。だからと云つて信仰を以つてどの病氣も癒ると云ふことは出来ない。況して、その病氣治癒の原因を直ちに神の存在に結びつけ、神あるが爲めに神の慈悲をもつて疾病治癒せりと信するのは、疎漏なる速断であるばかりでなく盲信がかつた信仰だと云はなくてはならぬのであります。今一步を譲つて神の存在を前置きして、この神が吾人の疾病を治せしむるものとするれば疾病治癒と神の慈悲との關係がどうあらねばならないものかと云ふことについて充分徹底的に考へて見なければならぬのであります。

余はこうした考へ方に従つて卑見を述べて行くこととしよう。

(ハ) 神様が病氣を癒すものとすれば、神様はどうなるか？ 疾病はどうならねばならぬか？

先づ天理教側の言ふことを認めて神の存在を前置きとしよう。そして疾病治癒は神のお爲によるものだと云ふことも又認めてかゝらう。

さてこゝに、甲乙兩人の病人があるとする。そして甲は熱烈なる天理教信者であり、乙はむしろ冷淡な信仰には反對の方の人間であつたとする。而して甲は醫者や天理教の教師の治療を受けて全快したとする。乙は元來信仰反對の思想をもつてゐる唯物論者だから信仰なんか問題にしないでただ醫療にばかりたよつて病氣を癒したとする。この際天理教々理的の頭でこれ等甲乙兩人の疾病治癒を評すれば、甲の治病したのは當然神様の御慈悲によるものであると説明する此れは何等の不思議ではない。

が、乙の治癒したのも又神様の御慈悲によるんだと説明するとせばいさゝかおかしいではないだらうか。

何故神様を拜まぬものに神様は御守護を與へたか？

こう云ふ質問に對して天理教々理の組立てから来る當然の返事は、これは乙なる人の積んだ、「いんねん」が良い、「いんねん」を積んであつたため、神様がその良い「いんねん」に對して御守護をお與へ下されたのだと説明する。この説明だけを聞けば成る程そうだとうなじけるでせう。如何にも神様の公明正大な處置振りだと思はれるでせう。誠によい、「いんねん」さへ積んで置けば神様は大慈悲力をもつて乙のやうに神様を拜せぬものにまでも御守護を與へるのである。と云ふ

ことは如何にも立派な神様だと思はれるかも知れぬ。然しこれ等のことを思ひ込む前に我々はこう云ふことを知つてをらねばならない。それは、

乙も病氣をしたのだ！

と云ふことである。諸君は余をして變なことを書く男だと思ふかも知れぬ。が、天理教で云ふ病氣は、

病は埃りのあらはれである。

と云つてゐる。このことは埃りを積んだから病氣になつたのだと云ふことである。埃りとは本論に於いて口を酔くして述べたやうに「悪因縁」を積むものである。だから『埃りを積む』と云ふことは『悪因縁を積む』と云ふのと同じであるのだ。つまり、

病氣は埃りの表れである。

埃りを積むことは悪因縁を積むことである。

故に病氣は積んだ悪因縁のあらはれである。

といふことになるのではないか。だから、乙が病氣になつたのは、神の腹立ちであり、神の與へた障りである。

それは乙が因縁を積んでゐたのに對して與へたのである。だから乙にはもう『白因縁』が無い筈だ『白因縁』があるとすれば、病氣とはならなかつた筈だと云ふことになるのではないか。ところがこの場合天理教々師の説明と引較べて見るとどうなる。

悪因縁を積んだから病氣になつた。ところがその人は白因縁を積んでゐたから神様を拜がまなくとも神様が御守護を與へて病氣を治してあげたのだ。

と云ふことになる。諸君これを矛盾でないと云ひ切ることの出来る人はありますか？ただ余は以上の提言を述べて置くに止めやう。それにしても思ひ出さざるを得ぬのは清水氏の死であ。天理教の神が若しあるとすれば、天理教布教の爲めに南洋パラオ島に至り神様の道を廣めやうとして努力せんとする人に何んの埃りがあつたのか。皮膚と筋肉との間に腫物が出来高度の熱で苦しみ肉親の看護をも受けず死なねばならぬとは一體天理王命どう血迷つたものなんだ。若し清水氏にして甚大なる埃りありとしても氏の行動に對しては既にその埃りをも拂つてくれるのが當然の處置ではなかつたか。埃りを拂ひ因縁を切つてこそ大慈悲の神と云ふてもよい。埃りがあるから因縁があるからと云つて病氣にさせたり困らしたり、死なしたり(實は殺す)することは、それが大慈悲の神様のする仕事なのか！清水氏の場合に於ける如く、殺ろさんでもよいではないか。若

しそれある教師の云ふが如く、他の事柄の表はれだとするものあらむか若しそうした神様があるとすれば、それこそその神の頭腦の健否を疑はねばならぬのである。清水氏の例よりすれば、いくら神の爲めに盡しても、いくら神様を拜んでも、自分が作つたいんねん（前生のも前々生のいんねん）のあるうちは、天理の神は病氣にしたり失業させたり、失敗させたりするのである。そればかりか、殺すこともあるのである。

と云ふことを銘記せねばならぬのである。この事から、余等は次の結論を導びき出すことが出来る。

- 1、天理教の神は大慈悲ならず。
- 2、天理教の神は功利的である。
- 3、天理教の神は社會救済の意圖なし。
- 4、天理教の神は無力である。
- 5、天理教の神は空無である。

と云ふことが出来る。もし一步を譲つて存在するものとしても我々を救済出来る神でない。我々を救済するのはただ我々の行爲が、道德倫理に合する行爲なるや否やと云ふにあると云ふこと

を知らねばならぬのである。従つて神を拜む必要はないのである。

であるから、自分の病氣が過去に自己の行つた行爲の表はれとしても自分自身でその元因を拂拭するでなければその元因を無くすることが出来ぬものと云ふことを知るのみである。神が存在するにしても吾々人間とそれは何等の關係もないことである。病氣を癒すものは自己を抜きにして何者もないのである。

我れに力ありとの信念を保持し、平衡状態に吾人の生理的狀態を置き日々養生を心掛ぐるならば、決して病にはならぬのである。それには漢方的養生法を責任を以つておすゝめしたのである。いづれ著者はこの要求を充すべく手ごろのものを公刊するつもりであるからその時に詳細を述べることとする。

一旦病氣になつても決して心を弱く持つてはならぬ定めなきこの體である。それを決定せんとするのは無理な話だ。そう云ふ心掛は捨てたがよい、そして自己の職業に専心であれば病氣にはかゝらぬものである。

余はこの項を終るに際して病氣は精神を以つて（心理的作用或は生理的作用をもつて）癒ることが無い、とは云ふことが出来ぬ。だからと云つて、何んでもかでも天理教で云ふやうに精神（信

仰)で癒さんとすれば癒らぬばかりか種々なる弊害を醸すに至るものである。信仰するに際しても充分こうしたことを戒めてかからぬばならぬものである。

或ることを解釋するに都合がよいからと云つて、その或ることが、解釋される通りに出來あがつたものは極はめて稀れであるものだ。癒るかどうか不明のものを癒ると云はれて一にも二にも信用し切ることは誤りである。どこどこまでも注意に注意をせねばならぬ。と云ふことを提言して擲筆しよう。

### 天理教その搾取戰術 (畢)

昭和五年九月十日印刷  
昭和五年九月十五日發行

天理教その搾取戰術  
定價一圓五十錢

著 者 柳 谷 素 靈

東京市小石川區大塚上町十五

發 行 者 中 西 政 市

東京市小石川區東古川町十九

印 刷 者 山 崎 竹 次 郎



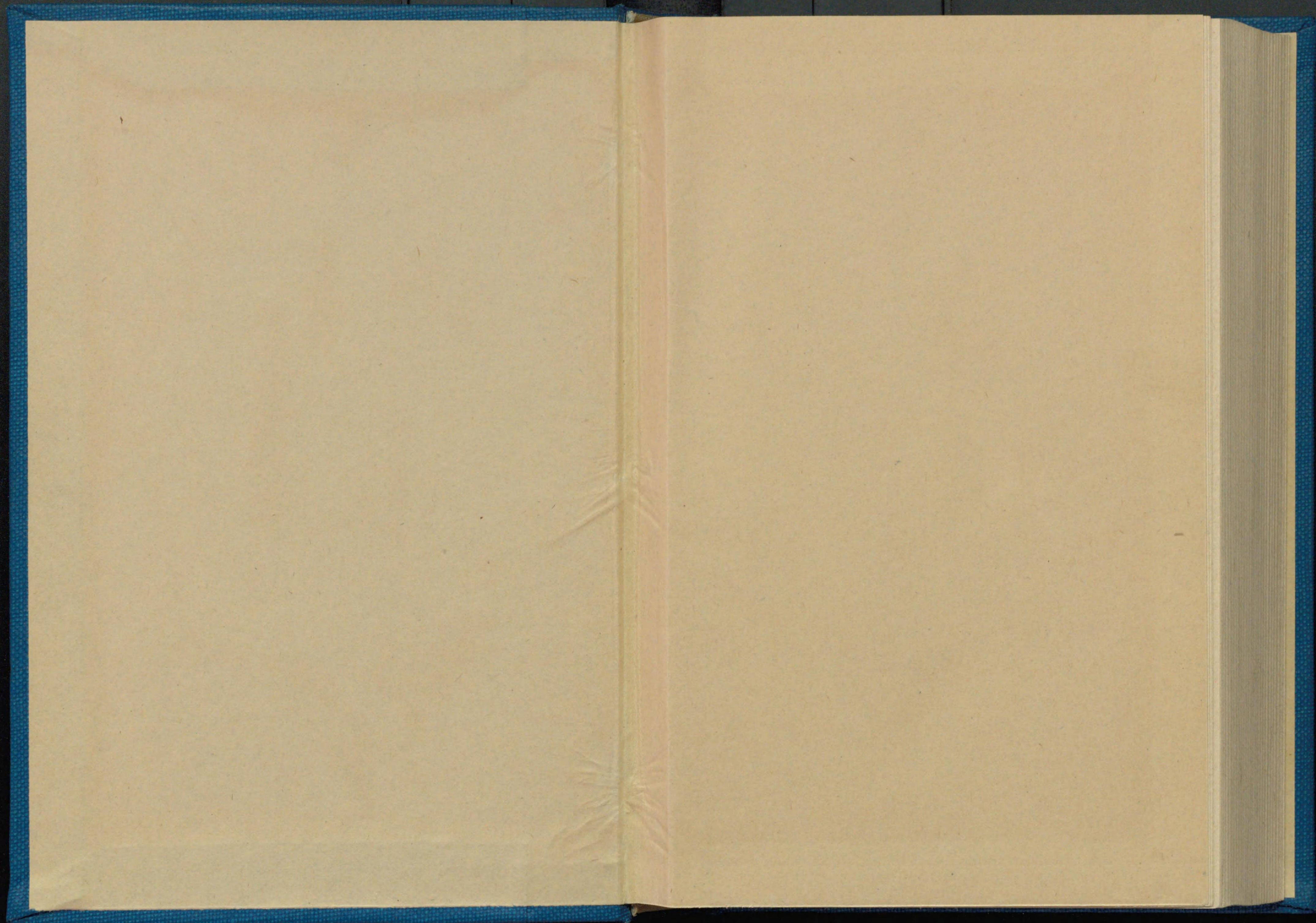
### 發 行 所

東京市小石川區  
大塚上町十五

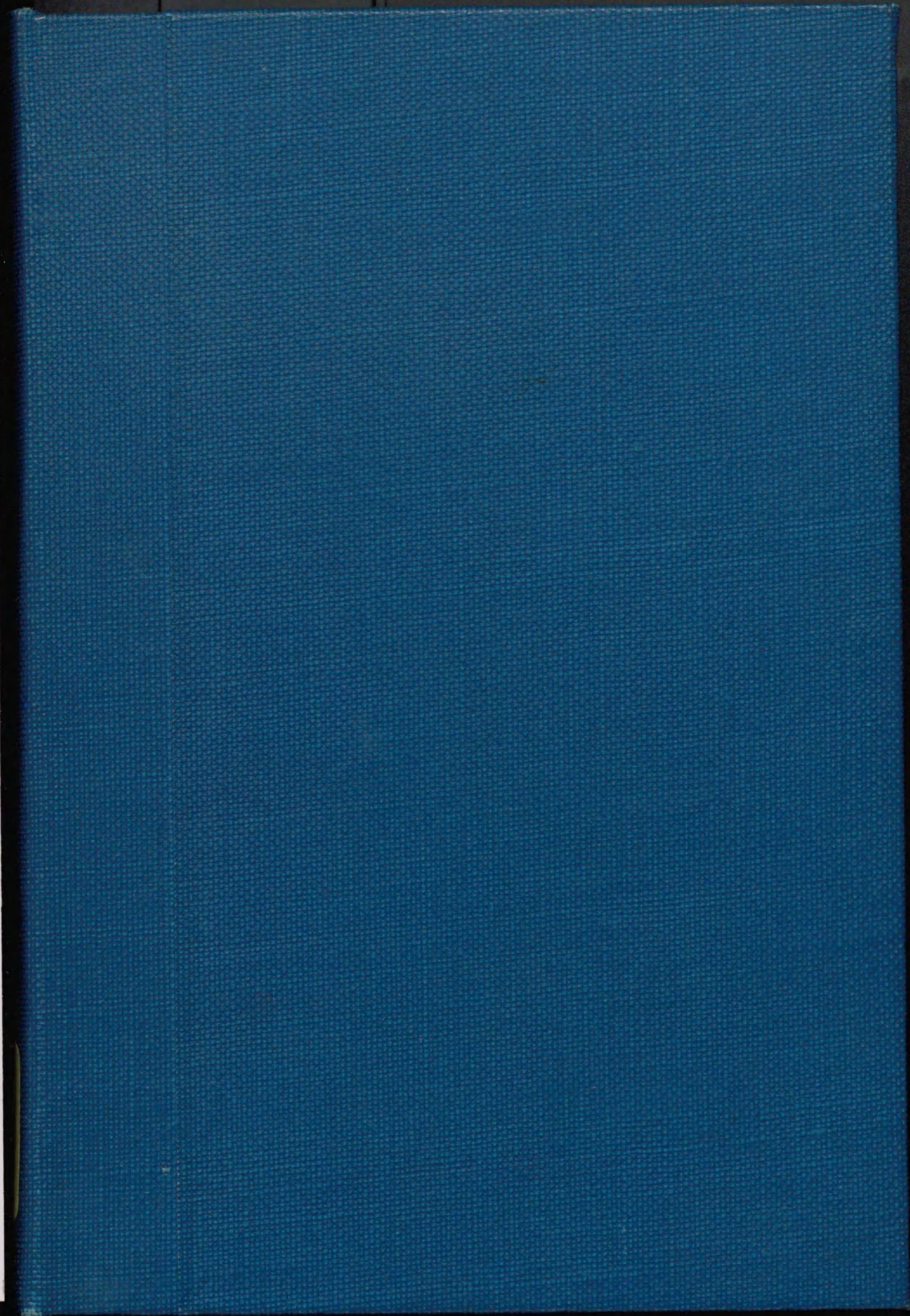
### 中 西 書 房

振替東京七二七〇五番

11598





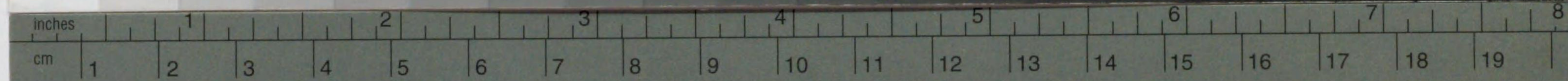


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

